BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

八登崇之(Takayuki YATO; aka. "ZR" v2.5a [2021/05/18]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザマニュアル bxjscls-manual.pdf を参照してください。

目次

1	はじめに	3
2	オプション	10
3	和文フォントの変更	40
4	フォントサイズ	40
5 5.1	レイアウト ページレイアウト	46 47
6	改ページ(日本語 T _E X 開発コミュニティ版のみ)	62
7	ページスタイル	63
8.1 8.2 8.3 8.4 8.5 8.6	文書のマークアップ 表題 章・節 リスト環境 パラメータの設定 フロート キャプション	66 66 72 84 91 93
9	フォントコマンド	95

10	相互参照	98
10.1	目次の類	98
10.2	参考文献	103
10.3	索引	105
10.4	脚注	106
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	109
12	いろいろなロゴ	113
13	amsmath との衝突の回避	113
14	初期設定	114
付録 A	和文ドライバの仕様 圏	118
付録 B	和文ドライバ:minimal	119
B.1	補助マクロ	119
B.2	(u)pT _E X 用の設定	121
B.3	pdfT _E X 用の処理	126
B.4	XgTeX 用の処理	127
B.5	後処理(エンジン共通)	128
付録 C	和文ドライバ:standard 圏	131
C.1	準備	131
C.2	和文ドライバパラメタ	131
C.3	共通処理 (1)	132
C.4	pT _F X 用設定	140
C.5	pdfT _E X 用設定:CJK + bxcjkjatype	143
C.6	XATEX 用設定:xeCJK + zxjatype	145
C.7	LuaT _E X 用設定:LuaT _E X-ja	148
C.8	共通処理 (2)	151
付録 D	和文ドライバ:modern 🕾	152
D.1	フォント設定	153
D.2	fixltx2e 読込	153
D.3	和文カテゴリコード	153
D.4	完了	153
付録 E	和文ドライバ:pandoc 圏	154
E.1	準備	154
E.2	和文ドライバパラメタ	154

E.4	lang 変数	57
E.5	geometry 変数	60
E.6	CJKmainfont 変数	60
E.7	Option clash 対策	60
E.8	レイアウト上書き禁止	60
E.9	paragraph のマーク	61
E.10	全角空白文字	62
E.11	hyperref 対策	62
E.12	Pandoc 要素に対する和文用の補正	62
E.13	ifPDFTeX スイッチ	63
E.14	完了 1	64
付録F	補助パッケージー覧 圏 1	.65
付録 G	補助パッケージ:bxjscompat 🚳 1	.65
G.1	準備	65
G.2	X _H T _E X 部分	66
G.3	LuaTeX 部分 1	66
G.4	完了 1	68
付録 H	補助パッケージ:bxjscjkcat 圏 1	.68
付録 H H.1	3 3	.68 .68
	準備	
H.1	準備	68
H.1 H.2	準備	.68 .69
H.1 H.2 H.3	準備	.68 .69
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5	準備 1 和文カテゴリコードの設定 1 ギリシャ・キリル文字の扱い 1 初期設定 完了 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 3 4 5 6 7 8 9 1 1	.68 .69 .69 .77
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5	準備 1 和文カテゴリコードの設定 1 ギリシャ・キリル文字の扱い 1 初期設定 1 完了 1 補助パッケージ: bxjspandoc 圏 1	.68 .69 .77 .77
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5	準備 1 和文カテゴリコードの設定 1 ギリシャ・キリル文字の扱い 1 初期設定 1 完了 1 補助パッケージ: bxjspandoc 密 1 準備 1	.68 .69 .77 .77
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1	準備1和文カテゴリコードの設定1ギリシャ・キリル文字の扱い1初期設定1完了1補助パッケージ: bxjspandoc 圏1準備1パッケージオプション1	.68 .69 .69 .77 .77
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2	準備1和文カテゴリコードの設定1ギリシャ・キリル文字の扱い1初期設定1完了1補助パッケージ: bxjspandoc 管1準備1パッケージオプション1パッケージ読込の阻止1	.68 .69 .77 .77 .77 .77 .77
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4	準備1和文カテゴリコードの設定1ギリシャ・キリル文字の扱い1初期設定1完了1補助パッケージ: bxjspandoc 響1準備1パッケージオプション1パッケージ読込の阻止1fixltx2e パッケージ1	.68 .69 .69 .77 .77 .77 .77 .78
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4 I.5	準備1和文カテゴリコードの設定1ギリシャ・キリル文字の扱い1初期設定1完了1補助パッケージ: bxjspandoc 圏1準備1パッケージオプション1パッケージ読込の阻止1fixltx2e パッケージ1cmap パッケージ1	.68 .69 .69 .77 .77 .77 .78 .78
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4 I.5	準備	.68 .69 .77 .77 .77 .77 .78 .78 .78
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4 I.5 I.6	 準備 和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 完了 補助パッケージ: bxjspandoc 圏 準備 パッケージオプション パッケージ読込の阻止 fixltx2e パッケージ cmap パッケージ が立て対すージ がいたージ がいたいと がいたいたージ がいたいたいと がいたいと がいたい	.68 .69 .77 .77 .77 .78 .78 .78 .79
H.1 H.2 H.3 H.4 H.5 付録 I I.1 I.2 I.3 I.4 I.5	 準備 和文カテゴリコードの設定 ギリシャ・キリル文字の扱い 初期設定 完了 補助パッケージ: bxjspandoc 準備 パッケージオプション パッケージ読込の阻止 fixltx2e パッケージ cmap パッケージ microtype パッケージ Unicode 文字変換対策 PandoLa モジュール 	.68 .69 .77 .77 .77 .77 .78 .78 .78

1 はじめに

この文書は「BXJS ドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

```
⟨article⟩ bxjsarticle.cls 短いレポート (章なし) ⟨report⟩ bxjsreport.cls 長いレポート (章あり) ⟨book⟩ bxjsbook.cls 書籍用 ⟨slide⟩ bxjsslide.cls スライド用
```

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる 「pIFTEX 2_{ε} 新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラス に関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対する解説である。

これは IATEX3 Project の classes.dtx と株式会社アスキーの jclasses.dtx に基づいてもともと奥村晴彦により作成されたものです。現在は日本語 TEX 開発コミュニティにより GitHub で管理されています。

https://github.com/texjporg/jsclasses

[2002-12-19] いろいろなものに収録していただく際にライセンスを明確にする必要が生じてきました。アスキーのものが最近は modified BSD ライセンスになっていますので、私のものもそれに準じて modified BSD とすることにします。

[2016-07-13] 日本語 T_FX 開発コミュニティによる管理に移行しました。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upIATeX 対応パッチを取り込みました。

ここでは次のドキュメントクラス (スタイルファイル) を作ります。

[2017-02-13] forum:2121 の議論を機に、jsreport クラスを新設しました。従来のjsbookの report オプションと比べると、abstract 環境の使い方および挙動がアスキーのjreport に近づきました。

```
⟨article⟩ jsarticle.cls 論文・レポート用
⟨book⟩ jsbook.cls 書籍用
⟨report⟩ jsreport.cls レポート用
⟨jspf⟩ jspf.cls 某学会誌用
⟨kiyou⟩ kiyou.cls 某紀要用
```

以下では実際のコードに即して説明します。

minijs は、jsclasses に似た設定を行うパッケージです。

- 1 %<*minijs>
- 2 %% if jsclasses loaded, abort loading this package
- 3 \ifx\@jsc@uplatextrue\@undefined\else
- 4 \PackageInfo{minijs}{jsclasses does not need minijs, exiting}
- 5 \expandafter\endinput
- $6 \fi$
- 7 %% "fake" jsarticle

- 8 \expandafter\def\csname ver@jsarticle.cls\endcsname{}
- 9 %</minijs>

\bxjs@clsname

文書クラスの名前です。エラーメッセージ表示などで使われます。

- 11 % このファイルは日本語文字を含みます.
- 12 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
- 13 % <book > \def \bxjs@clsname {bxjsbook}
- 14 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
- 15 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}

\ifjsc@needsp@tch [2016-08-22] 従来 jsclasses では、pLATFX やLATFX の不都合な点に対して、クラスファ イル内で独自に対策を施していました。しかし、2016年以降、コミュニティ版 pIATeX が次 第に対策コードをカーネル内に取り込むようになりました。そこで、新しい pIATeX カーネ ルと衝突しないように、日付が古い場合だけパッチをあてる場合があります。この処理に使 用するフラグを定義します。

- 16 \newif\ifjsc@needsp@tch
- 17 \jsc@needsp@tchfalse

■BXJS クラス特有の設定 湾

長さ値の指定で式を利用可能にするため calc を読み込む。

18 \RequirePackage{calc}

クラスオプションで key-value 形式を使用するため keyval を読み込む。

19 \RequirePackage{keyval}

クラスの本体ではこの他に geometry パッケージが読み込まれる。

TODO: 依存パッケージの情報。

互換性のための補助パッケージを読み込む。

- 20 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
- 21 \let\jsAtEndOfClass\@gobble
- 22 \RequirePackage{bxjscompat}%
- 23 }{}

\jsDocClass [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等:\jsArticle=bxjsarticle, \jsBook=bxjsbook, \jsReport=bxjsreport, \jsSlide=bxjsslide.

- 24 \let\jsArticle=a
- 25 \let\jsBook=b
- 26 \let\jsReport=r
- 27 \let\jsSlide=s
- 28 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
- 29 % <book > \let\jsDocClass\jsBook
- 30 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
- 31 %<slide>\let\jsDocClass\jsSlide

\jsEngine [暗黙文字トークン] エンジン (TrX の種類) の種別: j = pTrX 系、x = XrTrX、p =

```
pdfT<sub>F</sub>X(含 DVI モード)、1 = LuaT<sub>F</sub>X、J = NTT jT<sub>F</sub>X、0 = Omega 系、n =以上の何
                れでもない。
                32 \let\jsEngine=n
                33 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
                34 \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
                35 \edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}%
                36 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
                37 \bxjs@test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}
                38 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
                39 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=0}
                40 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
                41 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
                42 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=1}
\ifjsWithupTeX [スイッチ] エンジンが(内部漢字コードが Unicode の) upTrX であるか。
                43 \neq 3 
                44 \ifx\ucs\@undefined\else \ifnum\ucs"3000="3000
                45 \jsWithupTeXtrue
                46 \fi\fi
                47 \left| \text{if@jsc@uplatex} \right|
\ifjsWithpTeXng 〔スイッチ〕エンジンが pTFX-ng であるか。
                48 \newif\ifjsWithpTeXng
                49 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}
 \ifjsWitheTeX 〔スイッチ〕エンジンが\varepsilon-TFX 拡張をもつか。
                50 \neq 50 
                51 \bxjs@test@engine\eTeXversion{\jsWitheTeXtrue}
                  非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。
                ※ NTT jT<sub>F</sub>X と Omega 系。
                52 \let\bxjs@tmpa\relax
                53 \ifx J\jsEngine \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
                54 \ifx O\jsEngine \def\bxjs@tmpa{Omega}\fi
                55 \ifx\bxjs@tmpa\relax \expandafter\@gobble
                56 \else
                57 \ClassError\bxjs@clsname
                     {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
                     {It's a fatal error. I'll quit right now.}
                60 \expandafter\@firstofone
                61 \fi{\endinput\@@end}
                  LuaT<sub>F</sub>X の場合、本クラス用の Lua モジュールを用意する。
                62 \ifx 1\jsEngine
                63 \directlua{ bxjs = {} }
                64\fi
\bxjs@protected \varepsilon-TrX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。
```

```
65 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected
```

66 \else \let\bxjs@protected\@empty

67 \fi

\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。

 $68 \ifjsWitheTeX$

69 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}

70 \else

71 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand*}

72\fi

\ifjsInPdfMode 〔スイッチ〕pdfTFX / LuaTFX が PDF モードで動作しているか。

※ LuaT_FX 0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。

73 \newif\ifjsInPdfMode

74 \@nameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}

75 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine

76 \let\PackageWarningNoLine\PackageInfo % suppress warning

77 \RequirePackage{ifpdf}

78 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa

79 \@nameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}

80 \let\ifjsInPdfMode\ifpdf

\ifbxjs@TUenc 〔スイッチ〕I₄TFX の既定のフォントエンコーディングが TU であるか。

※ 2017 年 1 月以降の Istr-X カーネルにおいて「Unicode を表す Istr-X 公式のフォントエ ンコーディング」である"TU"が導入され、これ以降の LATEX を XFIEX または LuaTeX で動かしている場合は、既定のエンコーディングが TU になる。それ以外の場合は、既定の エンコーディングは OT1 である。

81 \newif\ifbxjs@TUenc

82 \def\bxjs@tmpa{TU}\edef\bxjs@tmpb{\f@encoding}

83 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb

84 \bxjs@TUenctrue

85 \fi

\ifbxjs@old@hook@system

〔スイッチ〕LATFX の新しいフック管理システムが未導入であるか。

※カーネルの 2020/10/01 版で導入された。

86 \newif\ifbxjs@old@hook@system

87 \@ifl@t@r\fmtversion{2020/10/01}{}\bxjs@old@hook@systemtrue}

 $T_{E}X$ の if-文(\ifXXX……〈真〉\else(偽〉\fi)を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。

88 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%

89 #1\expandafter\@firstoftwo

 $90 \quad \verb|\else| expand after \verb|\@second of two|$

91 \fi}

\bxjs@cslet \bxjs@cslet{ \langle 名前 1 \rangle }\制御綴:

92 \def\bxjs@cslet#1{%

93 \expandafter\let\csname#1\endcsname}

```
\bxjs@csletcs \bxjs@csletcs{\langle 名前 1\rangle}{\langle 名前 2\rangle}:
                   94 \def\bxjs@csletcs#1#2{%
                   95 \expandafter\let\csname#1\expandafter\endcsname\csname#2\endcsname}
      \bxjs@catopt \bxjs@catopt{\langle文字列 1\rangle}{\langle文字列 2\rangle}: 2 つの文字列を , で繋いだ文字列。ただし片方
                   が空の場合は,を入れない。完全展開可能。
                   96 \def\bxjs@catopt#1#2{%
                   97 #1\if\relax#1\relax\else\if\relax#2\relax\else,\fi\fi#2}
      \bxjs@ifplus \@ifstar の + 版。
                   98 \def\bxjs@ifplus#1{\@ifnextchar+{\@firstoftwo{#1}}}
\bxjs@gset@tempcnta calc の整数式を用いて \@tempcnta の値を設定する。
                   99 \let\c@bxjs@tempcnta\@tempcnta
                  100 \def\bxjs@gset@tempcnta{\setcounter{bxjs@tempcnta}}
    \jsSetQHLength \jsSetQHLength\CS{〈長さ式〉}: \setlength の変種で、通常の calc の長さ式の代わ
                   りに、「Q/H/trueQ/trueH/zw/zh の単位付きの実数」が記述できる(この場合は式は使え
                   ない)。
                  101 \def\jsSetQHLength#1#2{%
                  102 \begingroup
                         \bxjs@parse@qh{\#2}\%
                  103
                  104
                         \ifx\bxjs@tmpb\relax
                           \setlength\@tempdima{#2}%
                  105
                  106
                           \xdef\bxjs@g@tmpa{\the\@tempdima}%
                  107
                         \else \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
                  108
                         \fi
                  109
                       \endgroup
                       #1=\bxjs@g@tmpa\relax}
                  110
    \bxjs@parse@qh #1 が Q/H/trueQ/trueH/zw/zh で終わる場合、単位用の寸法値マクロ \bxjs@unit@XXX が
                   定義済なら、\bxjs@tmpb に #1 に等しい寸法の表現を返し、そうでないならエラーを出す。
                   それ以外では、\bxjs@tmpb は \relax になる。
                   ※(u)pIATFX の場合はこれらの和文単位はエンジンでサポートされる。しかし和文フォント
                   の設定が完了するまでは zw/zh の値は正しくない。
                  111 \if j\jsEngine \def\bxjs@parse@qh@units{zw,zh}
                  112 \else \def\bxjs@parse@qh@units{trueQ,trueH,Q,H,zw,zh}
                  113 \fi
                  114 \def\bxjs@parse@qh#1{%
                  115
                       \let\bxjs@tmpb\relax
                       \@for\bxjs@tmpa:=\bxjs@parse@qh@units\do{%
                  116
                         \ifx\bxjs@tmpb\relax
                  117
                           \edef\bxjs@next{{\bxjs@tmpa}{#1}}%
                  118
                           \expandafter\bxjs@parse@qh@a\csname bxjs@unit@\bxjs@tmpa\expandafter
                  119
                  120
                              \endcsname\bxjs@next
                  121
                         fi}
                  122 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc deparse Qh@a#1#2#3}}\%
```

```
124
                          \bxjs@next#3\@nil#2\@nil\@nnil}
                     125 \def\bxjs@parse@qh@b#1#2#3{%
                          \ifx\@nnil#2\@nnil\else
                     126
                           \ifx#3\relax
                     127
                             \ClassError\bxjs@clsname
                     128
                              {You cannot use '\bxjs@tmpa' here}{\@ehc}%
                     129
                     130
                             \def\bxjs@tmpb{0pt}%
                           \else
                     131
                             \@tempdimb#3\relax \@tempdimb#1\@tempdimb
                     132
                             \edef\bxjs@tmpb{\the\@tempdimb}%
                      133
                           \fi
                     134
                          \fi}
                     135
                      今の段階では Q/H だけが使用可能。
                          \def\bxjs@unit@Q{0.25mm}\let\bxjs@unit@H\bxjs@unit@Q
\bxjs@begin@document@hook BXJS クラス用の文書本体開始時フック。
                      137 \Conlypreamble\bxjsCbeginCdocumentChook
                      138 \let\bxjs@begin@document@hook\@empty
                      139 \AtBeginDocument{\bxjs@begin@document@hook}
  \bxjs@post@option@hook \ProcessOptions 直後に実行されるフック。
                      140 \@onlypreamble\bxjs@post@option@hook
                     141 \let\bxjs@post@option@hook\@empty
 \bxjs@pre@jadriver@hook 和文ドライバ読込直前に実行されるフック。
                      142 \@onlypreamble\bxjs@pre@jadriver@hook
                     143 \let\bxjs@pre@jadriver@hook\@empty
        \jsAtEndOfClass このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)
                     144 \def\jsAtEndOfClass{%
                         \expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-h@@k\endcsname}
                        一時的な手続き用の制御綴。
                     146 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo
                     147 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@a
                     148 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@b
                     149 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@c
                     150 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@d
                        LuaT<sub>F</sub>X の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリ
                      コードを一時的に11に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。
                      ※現在の LuaL4TpX では、漢字のカテゴリコードは最初から 11 になっているので、この処
                      理は特段の意味を持たない。しかし、昔は12になっていて、この場合、日本語文字のコン
                      トロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを11に変更する必要がある。
                      151 \if l\jsEngine
                     152 \def\bxjs@tmpdo#1{%
                         \xdef\bxjs@pre@jadriver@hook{%
```

123

- 154 \bxjs@pre@jadriver@hook
- 155 \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}%
- 156 \catcode`#1=11\relax}
- 157 \@tfor\bxjs@tmpa:=和西暦\do
- 158 {\expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@tmpa}
- 159 \fi

\jsInhibitGlue は \inhibitglue が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何もしない。

- 160 \bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%
- 161 \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了させる。

- $162 \footnote{1}{if@compatibility}$
- 163 \ClassError\bxjs@clsname
- 164 {Something went chaotic!\MessageBreak
- 165 (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak
- I cannot go a single step further...}
- 167 {If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak
- then there'll still be hope....}
- 169 \expandafter\@firstofone
- 170 \else \expandafter\@gobble
- 171 \fi{\typeout{Farewell!}\endinput\@@end}

2 オプション

これらのクラスは \documentclass{jsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{jsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

172 \newif\if@restonecol

\ifCtitlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

173 $\newif\if0titlepage$

\ifCopenright \chapter, \part を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要するに片起こし、奇数ページ起こしになります。

174 %<book|report>\newif\if@openright

\if@openleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。

175 %<book|report>\newif\if@openleft

\if@mainmatter 真なら本文,偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。

176 % <book | report > \newif \if@mainmatter \@mainmattertrue

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチです。

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

177 \newif\if@enablejfam \@enablejfamfalse

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積 $1 \, \mathrm{m}^2$,縦横比 $1:\sqrt{2}$ の長方形の辺の長さを mm 単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては mm 単位に切り捨てたものが A1,A2,…です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が $1.5\,\mathrm{m}^2$ ですが,ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$ です。このため,IATEX 2_ε の b5paper は $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$ ですが,pIATEX 2_ε の b5paper は $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$ になっています。ここでは pIATEX 2_ε に ならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形, 182mm×230mm), a4var (A4 変形, 210mm×283mm) を追加しました。

BXJS クラスではページレイアウト設定に geometry パッケージを用いる。用紙サイズ設定は geometry に渡すオプションの指定と扱われる。

- 179 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
- 180 \newif\ifbxjs@iso@bsize
- 181 \DeclareOption{iso-bsize}{\bxjs@iso@bsizetrue}
- $182 \verb|\donlypreamble\bxjs@setpaper@bsize|$
- 183 \def\bxjs@setpaper@bsize#1{\edef\bxjs@param@paper{%
- 184 b#1\ifbxjs@iso@bsize paper\else j\fi}}
- 185 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
- 186 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
- 187 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
- 188 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
- 189 \DeclareOption{b4paper}{\bxjs@setpaper@bsize{4}}

- 193 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
- 195 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{b5j}}
- 196 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}}{283truemm}}}

```
197 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
198 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
199 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
200 \DeclareOption{executivepaper}{\bxjs@setpaper{executivepaper}}
geometry の用紙サイズのオプション名を全てサポートする。
201 \@for\bxjs@tmpa:={%
202 a0,a1,a2,c0,c1,c2,c3,c4,c5,c6,ansia,ansib,ansic,ansid,ansie%
203 }\do{\edef\bxjs@next{%
204 \noexpand\DeclareOption{\bxjs@tmpa paper}%
205 {\noexpand\bxjs@setpaper{\bxjs@tmpa paper}}%
206 }\bxjs@next}
207 \DeclareOption{screen}{\bxjs@setpaper{screen}}
```

ただし b?paper は iso-bsize の指定に従い ISO と JIS の適切な方の B 列を選択する。

```
208 \@for\bxjs@tmpa:={0,1,2,3}\do{\edef\bxjs@next{%}

209 \noexpand\DeclareOption{b\bxjs@tmpa paper}%

210 {\noexpand\bxjs@setpaper@bsize{\bxjs@tmpa}}%

211 }\bxjs@next}
```

Pandoc では用紙サイズ指定について「後ろに paper を付けた名前のオプション」を指定する。これに対処するため、後ろに paper をつけた形を用意する。さらに、「用紙サイズをcustom とすると何も設定しない」ようにするため custompaper というオプションを用意する。

```
212 \DeclareOption{a4varpaper}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
213 \DeclareOption{b5varpaper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}{230truemm}}}
214 \DeclareOption{screenpaper}{\bxjs@setpaper{screen}}
215 \DeclareOption{custompaper}{}
```

■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

```
216 \newif\if@landscape
```

217 \@landscapefalse

218 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}

■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったので、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

219 \newif\if@slide

BXJSではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。 ※この \if@slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

```
220 %<!slide>\@slidefalse
```

221 %<slide>\@slidetrue

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の 20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的 なドキュメントクラスと同様にポイント数から10を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設 しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag です。

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag* を新設しました。

\Optsize は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は \jsUnusualPtSize (=-20) k \neq δ .

- 222 \newcommand{\@ptsize}{0}
- 223 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}
- 224 \def\jsUnusualPtSize{-20}

\bxjs@setbasefontsize 基底フォントサイズを実際に変更する。

- 225 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%
- Q単位の長さ指定をサポートするため \jsSetQHLength を使う。
- ※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、LATeX はクラス ファイルの読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で \jQ をサポートする ことは原理的に不可能である。
- \jsSetQHLength\@tempdima{#1}% 226
- \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}%
- 228 \ifdim\@tempdima=10pt \long\def\@ptsize{0}%
- $\ensuremath{$\ensuremath{\tt 0.95pt \long\\def\\@ptsize{1}}\%}$ 229
- \else\ifdim\@tempdima=12pt \long\def\@ptsize{2}%
- \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}

TODO: 恐らく 14pt と base=14.4pt 等の関係も全く等価であるべき。

- 232 \def\bxjs@setjbasefontsize#1{%
- 233 \setkeys{bxjs}{jbase=#1}}

\ifjsc@mag は「\mag を使うか」を表すスイッチ。

\ifjsc@mag@xreal は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。

- 234 \newif\ifjsc@mag
- 235 \newif\ifjsc@mag@xreal
- 236 %\let\jsc@magscale\@undefined
- 237 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}
- 238 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}

```
239 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}}
240 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}
241 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
242 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
243 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}
244 \DeclareOption{20pt}{\bxjs@setbasefontsize{20pt}}
245 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
246 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
247 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
248 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
249 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
250 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
251 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}
252 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
253 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
254 \DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}
{\tt 255 \setminus DeclareOption\{12ptj\}\{\setminus bxjs@setjbasefontsize\{12pt\}\}}
  JS クラス互換の magstyle 設定オプション。
256 \DeclareOption{usemag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@@usemag}
258 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@@xreal}
```

■トンボオプション トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は pI \neq TEX 2_{ε} 本体 で行います (plcore.dtx 参照)。オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ \hour, \minute は pI \neq TEX 2_{ε} 本体で宣言されています。

取りあえず、 pT_{EX} 系の場合に限り、JSクラスのトンボ関連のコードをそのまま活かしておく。正常に動作する保証はない。

```
259 \if j\jsEngine
260 \leftarrow \frac{1}{100}
261 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
262 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
263 \DeclareOption{tombow}{%
                         \tombowtrue \tombowdatetrue
                          \verb|\colored| \colored| \c
265
266
                          \@bannertoken{%
                                          \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
267
268
                                           \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
                          \maketombowbox}
270 \DeclareOption{tombo}{%
                         \tombowtrue \tombowdatefalse
271
                          \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
                       \maketombowbox}
273
```

274\fi

- ■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これ もアスキー版のままです。
- 275 \if j\jsEngine
- 276 \DeclareOption{mentuke}{%
- 277 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 278 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
- 279 \maketombowbox}
- 280 \fi
- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- 282 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue \@mparswitchtrue}
- 283 \DeclareOption{vartwoside}{\@twosidetrue \@mparswitchfalse}
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- 284 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
- 285 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
- ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 286 \DeclareOption{titlepage}{\Otitlepagetrue}
- 287 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
- ■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれを openright と表すことにしてあります。 openany で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] openright は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは LATEX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、jsclasses では新たに openleft も追加しました。

- 288 % book | report > \DeclareOption { openright } { \Qopenright true \Qopenleft false }
- 289 %<book|report>\DeclareOption{openleft}{\Qopenlefttrue\Qopenrightfalse}
- 290 % book | report > \DeclareOption { openany } { \Quad Qopen left false }
- ■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。
- - 291 \def\eqnarray{%
 - 292 \stepcounter{equation}%
 - 293 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
 - 294 \global\@eqnswtrue

```
\m@t.h
295
296
      \global\@eqcnt\z@
297
      \tabskip\@centering
      \let\\\@egncr
298
      $$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
299
          \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
300
        &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
301
302
        &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
        &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
303
304
           \tabskip\z@skip
305
        \cr
  leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出
力されます。森本さんにしたがって訂正しました。
306 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
307 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}%
308 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
    \def\eqnarray{%
309
       \stepcounter{equation}%
310
       \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
311
       \global\@eqnswtrue\m@th
312
313
       \global\@eqcnt\z@
314
      \tabskip\mathindent
315
      \let\\=\@eqncr
       \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
316
317
       \ifvmode
        \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
318
319
       \fi
       \addtolength\abovedisplayskip{\parskip}%
320
       \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
321
       \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
322
       \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
323
324
      $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
325
        \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
326
        &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
327
328
        &\global\@eqcnt\tw@
           $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
329
        &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
330
       \tabskip\z@skip\cr
331
332
      }}
■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。
 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。
333 % \DeclareOption{openbib}{%
334 %
      \AtEndOfPackage{%
335 %
        \renewcommand\@openbib@code{%
```

\advance\leftmargin\bibindent

336 %

- 337 % \itemindent -\bibindent 338 % \listparindent \itemindent
- 339 % \parsep \z0}%
- 340 % \renewcommand\newblock{\par}}}

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォン トしか使えません。AMSFonts や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん 使うと "Too many math alphabets ..." というエラーが起こってしまいます。disablejfam オプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので, 数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッ ケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので、この新ドキュメントクラ スでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメ ントクラスの仕様に合わせることにしました。

\bxjs@enablejfam 〔暗黙文字トークン〕enablejfam オプションの状態:

341 %\let\bxjs@enablejfam\@undefined

enablejfam オプションの処理。

- 342 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
- $343 \end{area} enable jfam@false{\let\bxjs@enablejfam=f} \\$
- $344 \end{tabule} in \verb|def| bxjs@kv@enablejfam@default{\let} bxjs@enablejfam@undefined} \\$
- 345 \define@key{bxjs}{enablejfam}[true]{%
- 346 \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

JS クラスとの互換のため disablejfam オプションを定義する。

347 \DeclareOption{disablejfam}{\let\bxjs@enablejfam=f}

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せに より、enablejfam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は 異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。 [2016-07-13] \ifdraft を定義するのをやめました。

\ifjsDraft draft オプションが指定されているか。

※ JS クラスの \ifdraft が廃止されたので、BXJS クラスでも \ifdraft を 2.0 版で廃止 した。

- $348 \neq 348$
- 349 \DeclareOption{draft}{\jsDrafttrue \overfullrule=5pt }
- 350 \DeclareOption{final}{\jsDraftfalse \overfullrule=Opt }

■和文フォントメトリックの選択 このクラスファイルでは、和文 TFM として東京書籍印刷の小林肇さんの作られた JIS フォントメトリック(jis, jisg)を標準で使うことにしますが、従来の min10、goth10 などを使いたいときは mingoth というオプションを指定します。また、winjis オプションで winjis メトリック(OTF パッケージと同じ psitau さん作;ソースに書かれた Windows の機種依存文字が dvips、dvipdfmx などで出力出来るようになる)が使えます。

[2018-02-04] winjis オプションはコッソリ削除しました。代替として、同等なものをパッケージ化 (winjis.sty) して、GitHub にはコッソリ置いておきます。

BXJS クラスではここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用 dvips や dviout で用紙設定を自動化するにはオプション papersize を与えます。

BXJS クラスでは geometry パッケージがこの処理を行う。

\ifbxjs@papersize

[スイッチ] papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプションで無効にできる。

- ※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。
- 351 \newif\ifbxjs@papersize
- 352 \bxjs@papersizetrue
- 353 \DeclareOption{nopapersize}{\bxjs@papersizefalse}
- 354 \DeclareOption{papersize}{\bxjs@papersizetrue}
- ■英語化 オプション english を新設しました。
- ※\if@english は非ユニークで衝突耐性がない。
- 355 \newif\if@english
- 356 \@englishfalse
- ■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していましたが、新しく jsreport クラスも作りました。どちらでもお好きな方を使ってください。

BXJS では当初から bxjsreport クラスが用意されている。

■jslogo パッケージの読み込み IstTeX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読み込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおりの動作となります。デフォルトは jslogo で、すなわちパッケージを読み込みます。

BXJS クラスでは、nojslogo を既定とする。

```
358 \newif\if@jslogo \Qjslogofalse
```

- 359 \DeclareOption{jslogo}{\@jslogotrue}
- 360 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}

■複合設定オプション 湾

TODO: \bxjs@invscale を書く場所を決める。(JS クラスと同じにはできなそう。)

\bxjs@invscale

\bxjs@invscale は T_EX における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば \bxjs@invscale\dimX{1.3} は \dimX=1.3\dimX の逆の演算を行う。

※局所化の \begingroup ~ \endgroup について、以前は \group ~ \egroup を使っていたが、これだと数式モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

※元の長さが128 pt 以上の場合でも動作するように修正した。

```
361 \mathchardef\bxjs@isc@ll=128
```

362 \mathchardef\bxjs@isc@sl=259

363 \def\bxjs@isc@sl@h{65539 }

 $364 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@invscale#1#2}}\%$

365 \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax

366 \ifdim\@tempdima<\bxjs@isc@ll\p@

367 \Otempcnta\Otempdima \multiply\Otempcnta\Occlvi

368 \divide\@tempcnta\@tempdimb \multiply\@tempcnta\@cclvi

369 \else

370 \@tempcnta\@tempdima \divide\@tempcnta\@tempdimb

372 \fi

373 \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb

374 \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@

375 \@tempdimb\@tempcnta\@ne

376 \advance\@tempcnta\@tempcntb \advance\@tempcnta\@tempcntb

377 \advance\@tempcnta\bxjs@isc@sl \@tempdimc\@tempcnta\@ne

378 \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%

379 \@tempcntb\@tempdimb \advance\@tempcntb\@tempdimc

380 \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@

381 \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima

382 \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne

 $\label{lem:contour} 383 $$ \else \$\else_\else_\else_\else_\fi}%$

 $384 \qquad \texttt{\xdef\bxjs@gtmpa{\the\cdempdimb}\%}$

385 \endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}

を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断される場合に用意される。

pandoc オプションは、Pandoc で IATEX 用の既定テンプレートを用いて他形式から IATEX (および PDF) 形式に変換する用途に最適化した設定を与える。

- 386 \DeclareOption{pandoc}{%
- 387 \bxjs@apply@pandoc@opt}
- 388 \@onlypreamble\bxjs@apply@pandoc@opt
- 389 \def\bxjs@apply@pandoc@opt{%

和文ドライバを pandoc に、エンジン指定を autodetect-engine に変更する。

- ※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。
- 390 \g@addto@macro\bxjs@post@option@hook{%
- 391 \bxjs@oldfontcommandstrue
- 392 \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}%
- 393 \let\bxjs@engine@given=*}%

ドライバオプションを dvi=dvipdfmx 相当に変更する。

- ※これは実際のドライバ設定で上書きできる(オプション宣言順に注意)。
- 394 \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined
- 395 \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
- 396 \bxjs@dvi@opttrue
- 397 \fi
- 398 \global\let\bxjs@apply@pandoc@opt\relax}

pandoc+ オプションは、pandoc と同じ設定をした上で、さらに和文パラメタの先頭に _plus を追加する。

- 399 \DeclareOption{pandoc+}{%
- $400 \qquad \verb|\g@addto@macro| \verb| bxjs@post@option@hook{%}| \\$
- $401 \qquad \texttt{\edef\jsJaParam{\bxjs@catopt{_plus}\jsJaParam}}\%$
- 402 \ExecuteOptions{pandoc}}

■エンジン・ドライバオプション 彎

\bxjs@engine@given オプションで明示されたエンジンの種別。

\bxjs@engine@opt 明示されたエンジンのオプション名。

404 %\let\bxjs@engine@opt\@undefined

エンジン明示指定のオプションの処理。

- ※ 0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は ...latex に限定する。xetex や pdftex は一般的な LATEX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。
- 405 \DeclareOption{autodetect-engine}{%
- 406 \let\bxjs@engine@given=*}
- 407 \DeclareOption{latex}{%

```
\let\bxjs@engine@given=n}
                   409
                   410 \DeclareOption{platex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{platex}%
                   411
                        \let\bxjs@engine@given=j}
                   413 \DeclareOption{uplatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{uplatex}%
                   414
                   415
                        \let\bxjs@engine@given=u}
                   416 \DeclareOption{xelatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%
                        \let\bxjs@engine@given=x}
                   418
                   419 \DeclareOption{pdflatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
                        \let\bxjs@engine@given=p}
                   421
                   422 \DeclareOption{lualatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
                        \let\bxjs@engine@given=1}
                   424
                   425 \DeclareOption{platex-ng}{%
                   426
                        \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
                        \let\bxjs@engine@given=g}
                   427
                   428 \DeclareOption{platex-ng*}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
                   429
                        \let\bxjs@platexng@nodrv=t%
                   430
                        \let\bxjs@engine@given=g}
                   431
\bxjs@driver@given オプションで明示されたドライバの種別。
                   432 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
                   433 \let\bxjs@driver@@dvimode=0
                   434 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
                   435 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2
                   436 \let\bxjs@driver@@xetex=3
                   437 \let\bxjs@driver@@dvips=4
                   438 \let\bxjs@driver@@none=5
  \bxjs@driver@opt 明示された「ドライバ指定」のオプション名。
                   439 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined
                   440 \DeclareOption{dvips}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvips}
                   442
                   443 \DeclareOption{dviout}{%
                   444
                        \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                   445
                   446 \DeclareOption{xdvi}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
                   447
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                   448
                   449 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
```

\def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%

\let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}

450

\def\bxjs@engine@opt{latex}%

408

```
452 \DeclareOption{nodvidriver}{%
453
    \def\bxjs@driver@opt{nodvidriver}%
     \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none}
455 \DeclareOption{pdftex}{%
    \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
456
    \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
457
458 \DeclareOption{luatex}{%
    \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
    \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
461 \DeclareOption{xetex}{%
    \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
462
    \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}
   dvipdfmx-if-dvi は 2.0 版より非推奨となった。
```

464 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{\bxjs@depre@opt@do{dvipdfmx-if-dvi}{dvi=dvipdfmx}}

■その他の BXJS 独自オプション 湾

TODO: 互換用オプションを分離する(2.0版で?)。

\bxjs@depre@opt 非推奨のオプションについて警告を出す。

\bxjs@depre@opt@do 465 \@onlypreamble\bxjs@depre@opt

466 \def\bxjs@depre@opt#1#2{%

\ClassWarningNoLine\bxjs@clsname

{The old option '#1' is DEPRECATED\MessageBreak 468

and may be abolished in future!\MessageBreak 469

470 You should instead write:\MessageBreak

471 \space\space #2}}

472 \@onlypreamble\bxjs@depre@opt@do

473 \def\bxjs@depre@opt@do#1#2{%

\bxjs@depre@opt{#1}{#2}%

\setkeys{bxjs}{#2}}

\ifbxjs@bigcode upTpX で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」 を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、この ファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、既定を真とした上で、オプションで 指定することとする。

※ 2.0 版より、既定値を常に真とする。

476 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodetrue

nobigcode /bigcode オプションの定義。

477 \DeclareOption{nobigcode}{%

478 \bxjs@bigcodefalse}

479 \DeclareOption{bigcode}{%

\bxjs@bigcodetrue}

\ifbxjs@oldfontcommands \allowoldfontcommands を既定で有効にするか。

481 \newif\ifbxjs@oldfontcommands

nooldfontcommands、oldfontcommands オプションの定義。

※oldfontcommands オプションの名前は memoir クラスに倣った。ちなみに KOMA-Script では enabledeprecatedfontcommands であるがこれはチョットアレなので避けた。

- $482 \verb|\DeclareOption{nooldfontcommands}{{\%}}$
- 483 \bxjs@oldfontcommandsfalse}
- 484 \DeclareOption{oldfontcommands}{%
- 485 \bxjs@oldfontcommandstrue}

■JS クラスのオプションで無効なもの 圏 ltjsclasses に倣って警告を出す。

```
486 \DeclareOption{winjis}{%
```

- 487 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- 488 {This class does not support `winjis' option}%
- 489 }
- 490 \DeclareOption{mingoth}{%
- 491 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- 492 {This class does not support `mingoth' option}%
- 493 }
- 494 \DeclareOption{jis}{%
- 495 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
- 496 {This class does not support `jis' option}%
- 497 }

■keyval 型のオプション 彎

その他のオプションは keyval の機構を用いて処理する。

- 498 \DeclareOption*{%
- 499 \def\bxjs@next{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}%
- 500 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\CurrentOption}}

\bxjs@safe@setkeys

未知のキーに対してエラー無しで無視する \setkeys。

- ※ネスト不可。
- $501 \ensuremath{\mbox{\sc bxjs@safe@setkeys#1#2}\mbox{\sc height}}\label{fig:sol}$
- 502 \let\bxjs@save@KV@errx\KV@errx \let\KV@errx\@gobble
- 503 \setkeys{#1}{#2}%
- 504 \let\KV@errx\bxjs@save@KV@errx}

\bxjs@declare@enum@option

\bxjs@declare@enum@option{(オプション名)}{(enum 名)}{(初期値)}

" $\langle \texttt{オプションA} \rangle = \langle \acute{\textbf{u}} \rangle$ "のオプション指定に対して、 $\backslash [\texttt{bxjs@} \langle \texttt{enum A} \rangle]$ を $\backslash [\texttt{bxjs@} \langle \texttt{enum A} \rangle \otimes (\acute{\textbf{u}})$ に等値する(後者の制御綴が未定義の場合はエラー)、という動作を規定する。

- $505 \verb|\color= bxjs@declare@enum@option|$
- 506 \def\bxjs@declare@enum@option#1#2#3{%
- 507 \bxjs@csletcs{bxjs@#2}{bxjs@#2@@#3}%
- 508 \define@key{bxjs}{#1}{%
- 509 \expandafter\ifx\csname bxjs@#2@@##1\endcsname\relax

```
\bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                           510
                                  \else \bxjs@csletcs{bxjs@#2}{bxjs@#2@@##1}%
                           511
                           512
                           \bxjs@declare@bool@option{\オプション名\}{\スイッチ名\}{\初期値\}
\bxjs@declare@bool@option
                              "\langle オプション名\rangle = \langle 真偽値\rangle"のオプション指定に対して、\langle if[bxjs@\langle スイッチ名\rangle]を設定
                            する、という動作を規定する。
                           513 \@onlypreamble\bxjs@declare@bool@option
                           514 \def\bxjs@declare@bool@option#1#2#3{%
                                \csname newif\expandafter\endcsname\csname ifbxjs@#2\endcsname
                                \ensuremath{\mbox{\tt 0nameuse}\{\ensuremath{\mbox{\tt bxjs0\#2\#3}}\%}
                           516
                           517
                                \define@key{bxjs}{#1}[true]{%
                                  \expandafter\ifx\csname bxjs@#2##1\endcsname\relax
                           518
                           519
                                    \bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                           520
                                  \else \@nameuse{bxjs@#2##1}%
                           521
                                  fi}
         \bxjs@set@keyval \bxjs@set@keyval\{\langle key \rangle\}\{\langle value \rangle\}\{\langle error \rangle\}
                              \bxjs@kv@(key)@(value) が定義済ならそれを実行し、未定義ならエラーを出す。
                           522 \det bxjs@set@keyval#1#2#3{%}
                                \bxjs@csletcs{bxjs@next}{bxjs@kv@#1@#2}%
                           524
                                \ifx\bxjs@next\relax
                                  \bxjs@error@keyval{#1}{#2}%
                           525
                           526
                                  #3%
                               \else \bxjs@next
                           527
                                \fi}
                           528
                           529 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
                           530 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
                                \ClassError\bxjs@clsname
                                 {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
                           532
                  \jsScale 〔実数値マクロ〕和文スケール値。
                           533 \def\jsScale{0.924715}
           \bxjs@base@opt 明示された base オプションの値。
                           534 %\let\bxjs@base@opt\@undefined
                              base オプションの処理。
                           535 \ensuremath{\mbox{define@key{bxjs}{base}{\%}}
                                \edef\bxjs@base@opt{#1}%
                                \bxjs@setbasefontsize{#1}}
                           538 \define@key{bxjs}{fontsize}{\setkeys{bxjs}{base=#1}}
          \bxjs@jbase@opt 明示された jbase オプションの値。
                           539 %\let\bxjs@jbase@opt\@undefined
                              jbase オプションの処理。
                           540 \define@key{bxjs}{jbase}{\edef\bxjs@jbase@opt{#1}}
                           541 \define@key{bxjs}{jafontsize}{\setkeys{bxjs}{jbase=#1}}
```

```
\bxjs@scale@opt 明示された scale オプションの値。
              542 %\let\bxjs@scale@opt\@undefined
                 scale オプションの処理。
              543 \define@key{bxjs}{scale}{%
              ^{544} \eggs ale@opt{#1}%
              545 \let\jsScale\bxjs@scale@opt}
              546 \define@key{bxjs}{jafontscale}{\setkeys{bxjs}{scale=#1}}
                noscale オプションの処理。
              547 \DeclareOption{noscale}{\bxjs@depre@opt@do{noscale}{scale=1}}
\bxjs@param@mag mag オプションの値。
              548 \let\bxjs@param@mag\relax
                mag オプションの処理。
              549 \define@key{bxjs}{mag}{\edef\bxjs@param@mag{#1}}
                paper オプションの処理。
              550 \define@key{bxjs}{paper}{\edef\bxjs@param@paper{#1}}
\bxjs@jadriver 和文ドライバの名前。
              551 \let\bxjs@jadriver\relax
              552 %\let\bxjs@jadriver@opt\@undefined
                 ja オプションの処理。
               %jadriver は 0.9 版で用いられた旧称。
               ※単なる ja という指定は無視される (Pandoc 対策)。
              553 \define@key{bxjs}{jadriver}{%
              554 \bxjs@depre@opt{jadriver}{ja=#1}\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}}
              555 \define@key{bxjs}{ja}[\relax]{%
              556 \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}\fi}
     \jsJaFont 和文フォント設定の名前。
              557 \let\jsJaFont\@empty
                 jafont オプションの処理。
              558 \define@key{bxjs}{jafont}{\edef\jsJaFont{#1}}
    \jsJaParam 和文ドライバパラメタの文字列。
              559 \let\jsJaParam\@empty
                 japaram オプションの処理。
              560 \define@key{bxjs}{japaram}{%
                  \edef\jsJaParam{\bxjs@catopt\jsJaParam{#1}}}
                 引数をもつ pandoc・pandoc+ オプションは、その引数を和文パラメタの指定と見なす。
              562 \define@key{bxjs}{pandoc}[]{%
              563 \ExecuteOptions{pandoc}%
```

```
\edef\jsJaParam{\bxjs@catopt\jsJaParam{#1}}}
               565 \define@key{bxjs}{pandoc+}[]{%
                    \ExecuteOptions{pandoc+}%
                    \edef\jsJaParam{\bxjs@catopt\jsJaParam{#1}}}
               567
 \bxjs@magstyle magstyle 設定値。(古いイマイチな名前。)
               568 \let\bxjs@magstyle@@mag=m
                569 \let\bxjs@magstyle@@real=r
                570 \let\bxjs@magstyle@@xreal=x
                (新しい素敵な名前。)
                ※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、\bxjs@magstyle@@xreal の方を優
                先させる。
                571 \let\bxjs@magstyle@@usemag\bxjs@magstyle@@mag
                572 \let\bxjs@magstyle@@nomag\bxjs@magstyle@@real
               573 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@magstyle@@nomag*}\bxjs@magstyle@@xreal|
                \bxjs@magstyle@@default は既定の値を表す。
                574 \let\bxjs@magstyle@@default\bxjs@magstyle@@usemag
               575 \ifx 1\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
               576 \let\bxjs@magstyle@@default\bxjs@magstyle@@xreal
               577 \fi\fi
               578 \ifjsWithpTeXng
               579 \let\bxjs@magstyle@@default\bxjs@magstyle@@xreal
               580 \fi
               581 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@@default
                  magstyle オプションの処理。
               582 \define@key{bxjs}{magstyle}{%
                    \bxjs@csletcs{bxjs@magstyle}{bxjs@magstyle@@#1}%
                    \ifx\bxjs@magstyle\relax
               584
                      \bxjs@error@keyval{magstyle}{#1}%
                      \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@@default
                586
               587
                    \fi}
 \bxjs@geometry geometry オプションの指定値。
                588 \let\bxjs@geometry@@class=c
               589 \let\bxjs@geometry@@user=u
               590 \bxjs@declare@enum@option{geometry}{geometry}{class}
\ifbxjs@fancyhdr 〔スイッチ〕fancyhdr の指定値。fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。
                591 \bxjs@declare@bool@option{fancyhdr}{fancyhdr}{true}
\ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。
               592 \newif\ifbxjs@dvi@opt
                  DVIモードのドライバとドライバ種別との対応。
               593 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
                594 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvips
```

```
597 \let\bxjs@dvidriver@@nodvidriver=\bxjs@driver@@none
                                                                                                                      dvi オプションの処理。
                                                                                                           598 \define@key{bxjs}{dvi}{%
                                                                                                                             \bxjs@csletcs{bxjs@tmpa}{bxjs@dvidriver@@#1}%
                                                                                                                             \ifx\bxjs@tmpa\relax
                                                                                                           600
                                                                                                                                     \bxjs@error@keyval{dvi}{#1}%
                                                                                                           601
                                                                                                           602
                                                                                                                             \else
                                                                                                              \bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
                                                                                                           603
                                                                                                                                     \def\bxjs@driver@opt{#1}%
                                                                                                                                     \let\bxjs@driver@given\@undefined
                                                                                                           604
                                                                                                           605
                                                                                                                                     \bxjs@dvi@opttrue
                                                                                                           606
                                                                                                                             \fi}
    \ifbxjs@layout@buggyhmargin [スイッチ] bxjsbook の左右マージンがアレか。
                                                                                                               ※layout が v1 の場合はアレになる。
                                                                                                           607 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin
\ifbxjs@force@chapterabstract 〔スイッチ〕abstract 環境を chapterabstract にするか。
                                                                                                               %bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
                                                                                                           608 \newif\ifbxjs@force@chapterabstract
                                                                                                           609 % <book > \bxjs@force@chapterabstracttrue
                                                                                                                      layout オプションの処理。
                                                                                                           610 \@namedef{bxjs@kv@layout@v1}{%
                                                                                                           611 %<book>\bxjs@layout@buggyhmargintrue
                                                                                                           612 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                                                                                                           613 }
                                                                                                           614 \@namedef{bxjs@kv@layout@v2}{%
                                                                                                           615 %<book>\bxjs@layout@buggyhmarginfalse
                                                                                                           616 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
                                                                                                           617 }
                                                                                                           618 \define@key{bxjs}{layout}{%
                                                                                                                             \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}
                          \bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。
                                                                                                           620 %\let\bxjs@textwidth@limit@opt\@undefined
                                                                                                           621 \ensuremath{\mbox{\sc define@key{bxjs}}{\mbox{\sc textwidth-limit}}{\mbox{\sc width-limit}}{\mbox{\sc width-limit}}{\mbo
                                                                                                                              \bxjs@depre@opt{textwidth-limit}{textwidth=#1zw}%
                                                                                                                             \edef\bxjs@textwidth@limit@opt{#1}}
                                                                                                           623
                                  \bxjs@textwidth@opt textwidth の指定値。
                                                                                                           624 %\let\bxjs@textwidth@opt\@undefined
                                                                                                           625 \end{fine} \end{
                                                                                                           626 \define@key{bxjs}{line_length}{\setkeys{bxjs}{textwidth=#1}}
```

595 \let\bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode 596 \let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode

```
\bxjs@number@of@lines@opt number-of-lines の指定値。
                         627 %\let\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined
                         628 \define@key{bxjs}{number-of-lines}{\edef\bxjs@number@of@lines@opt{#1}}
                         629 \define@key{bxjs}{number_of_lines}{\setkeys{bxjs}{number-of-lines=#1}}
    \bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。パラグラフのマーク。
                         630 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined
                         631 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%
                             \edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}
  \ifbxjs@whole@zw@lines 〔スイッチ〕whole-zw-lines の指定値。
                         633 \bxjs@declare@bool@option{whole-zw-lines}{whole@zw@lines}{true}
     \ifbxjs@jaspace@cmd 〔スイッチ〕jaspace-cmd の指定値。
                         634 \bxjs@declare@bool@option{jaspace-cmd}{jaspace@cmd}{true}
                         635 \define@key{bxjs}{xkanjiskip-cmd}[true]{\setkeys{bxjs}{jaspace-cmd=#1}}
      \ifbxjs@fix@at@cmd 〔スイッチ〕fix-at-cmd の指定値。
                         636 \bxjs@declare@bool@option{fix-at-cmd}{fix@at@cmd}{true}
    \ifbxjs@hyperref@enc [スイッチ] hyperref-enc の指定値。
                         637 \bxjs@declare@bool@option{hyperref-enc}{hyperref@enc}{true}
      \bxjs@everyparhook everyparhook の指定値。
                         638 \chardef\bxjs@everyparhook@@none=0
                         639 \chardef\bxjs@everyparhook@@compat=1
                         640 \chardef\bxjs@everyparhook@@modern=2
                         641 \bxjs@declare@enum@option{everyparhook}{everyparhook}{%
                         642 \if j\jsEngine compat\else modern\fi}
     \bxjs@label@section label-section の指定値。
                         643 \chardef\bxjs@label@section@@none=0
                         644 \chardef\bxjs@label@section@@compat=1
                         645 \chardef\bxjs@label@section@@modern=2
                         646 \bxjs@declare@enum@option{label-section}{label@section}{compat}
           \ifbxjs@usezw 〔スイッチ〕use-zw の指定値。
                         647 \bxjs@declare@bool@option{use-zw}{usezw}{true}
                         648 \DeclareOption{nozw}{\bxjs@depre@opt@do{nozw}{use-zw=false}}
                         649 \DeclareOption{zw}{\bxjs@depre@opt@do{zw}{use-zw=true}}
     \ifbxjs@disguise@js 〔スイッチ〕disguise-js の指定値。
                         650 \bxjs@declare@bool@option{disguise-js}{disguise@js}{true}
                         651 \DeclareOption{nojs}{\bxjs@depre@opt@do{nojs}{disguise-js=false}}
                         652 \DeclareOption{js}{\bxjs@depre@opt@do{js}{disguise-js=true}}
     \ifbxjs@precisetext 〔スイッチ〕precise-text の指定値。
                         653 \bxjs@declare@bool@option{precise-text}{precisetext}{false}
```

- 654 \DeclareOption{noprecisetext}{\bxjs@depre@opt@do{noprecisetext}{precisetext=false}}
- 655 \DeclareOption{precisetext}{\bxjs@depre@opt@do{precisetext}{precisetext=true}}

\ifbxjs@simplejasetup 〔スイッチ〕simple-ja-setup の指定値。

- 656 \bxjs@declare@bool@option{simple-ja-setup}{simplejasetup}{true}
- 657 \DeclareOption{nosimplejasetup}{\bxjs@depre@opt@do{nosimplejasetup}{simple-jasetup=false}}
- 658 \DeclareOption{simplejasetup}{\bxjs@depre@opt@do{simplejasetup}{simple-jasetup=true}}

\ifbxjs@plautopatch 〔スイッチ〕plautopatch の指定値。

- 659 \bxjs@declare@bool@option{plautopatch}{plautopatch}{false}
- 660 \g@addto@macro\bxjs@plautopatchfalse{\def\bxjs@plautopatch@given{false}}

■オプションの実行

LATeX の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に { } が含まれ ると正常に処理ができない。これに対処する為 \@removeelement の実装に少し手を加える (仕様は変わらない)。

※クラスに \DeclareOption* がある場合は \@unusedoptions は常に空のままであるこ とを利用している。

- 661 \let\bxjs@org@removeelement\@removeelement
- 662 \def\@removeelement#1#2#3{%
- \def\reserved@a{#2}% 663
- \ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty 664
- \else \bxjs@org@removeelement{#1}{#2}{#3}% 665
- \fi} 666

デフォルトのオプションを実行します。multicols や url を \RequirePackage するの はやめました。

- 667 %<article>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,notitlepage,final}
- 668 %<book>\ExecuteOptions{a4paper,twoside,onecolumn,titlepage,openright,final}
- 669 %%<report>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,titlepage,openany,final}
- 670 %<slide>\ExecuteOptions{36pt,a4paper,landscape,oneside,onecolumn,titlepage,final}
- 671 \ProcessOptions\relax
- 672 \bxjs@post@option@hook

後処理

- $673 \footnote{off}$
- $674 $$ \end{area} $$ \end{area} {\end{area} or \end{area} {\end{area} or \end{area} } $$ $$ \end{area} $$ \end{area} $$ $$ $$ \end{area} $$ $$ \end{area} $$ \end{area}$
- 675 \fi
- 676 \if@landscape
- \setlength\@tempdima {\paperheight}

- 678 \setlength\paperheight{\paperwidth}
- 679 \setlength\paperwidth {\@tempdima}

680 \fi

■グローバルオプションの整理 灣

グローバルオプションのトークン列に { } が含まれていると、やはり後のパッケージの読込処理で不具合を起こすようである(\ProcessOptions* がエラーになる)。従って、このようなオプションは除外することにする。

- $681 \ensuremath{\mbox \mbox{681}} \ensuremath{\mbox \mbox{681}} \ensuremath{\mbox{\mbox{mpdo}}} \ensuremath{\mbox{\%}}$
- $682 $$ \def\bxjs@tmpa{\Qgobble}%$
- 683 \expandafter\bxjs@tmpdo@a\@classoptionslist,\@nil,%
- 684 \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa}
- 685 \def\bxjs@tmpdo@a#1,{%
- 686 \ifx\@nil#1\relax\else
- 687 \bxjs@tmpdo@b#1{}\@nil
- 688 \if@tempswa \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}\fi
- 689 \expandafter\bxjs@tmpdo@a
- 690 \fi}
- 691 \def\bxjs@tmpdo@b#1#{\bxjs@tmpdo@c}
- 692 \def\bxjs@tmpdo@c#1\@nil{%
- 693 \ifx\@nil#1\@nil \@tempswatrue \else \@tempswafalse \fi}
- $694 \bxjs@tmpdo$

papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性があるため、グローバルオプションから外す。

- 695 \@expandtwoargs\@removeelement
- 696 {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist
- 697 \@expandtwoargs\@removeelement
- 698 {10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist
- 699 \@expandtwoargs\@removeelement
- 700 {noscale}\@classoptionslist\@classoptionslist

■使用エンジンの検査・自動判定 ユーザが uplatex オプションの有無により指定したエンジンが、実際に使われているものと一致しているかを検査し、一致しない場合はエラーメッセージを表示します。

[2016-11-09] pIATEX/ upIATEX を自動判別するオプション autodetect-engine を新設しました。upIATEX の場合は,グローバルオプションに uplatex を追加することで,自動判定に応じて otf パッケージにも uplatex オプションが渡るようにします。

ここのコードを削除。

[2016-11-11] pI $oldsymbol{I}
oldsymbol{E}
oldsymbol{X}
oldsymbol{B}
oldsymbol{B$

正規化前の和文ドライバの値を \bxjs@jadriver に設定する。

701 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else 702 \let\bxjs@jadriver\bxjs@jadriver@opt

703 \fi

```
エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するか
を検査する。
704 \let\bxjs@tmpb\jsEngine
705 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng
706 \let\bxjs@tmpb=g
707 \fi\fi
708 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX
709 \let\bxjs@tmpb=u
710 \fi\fi
711 \ifx p\bxjs@tmpb\ifjsInPdfMode\else
712 \let\bxjs@tmpb=n
713 \fi\fi
(この時点で \bxjs@tmpb は \bxjs@engine@given と同じ規則で分類したコードをもって
いる。)
714 \ifx *\bxjs@engine@given
715 \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb
エンジン指定が autodetect-engine であり、かつ実際のエンジンが (u)pIATpX だった場
合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。
716 \ifx j\bxjs@engine@given
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,platex}
   \else\ifx u\bxjs@engine@given
718
719
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
720 \fi\fi
721 \fi
722 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else
   \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else
      \ClassError\bxjs@clsname
724
725
       {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc
   \fi
726
727 \fi
  エンジンが pT_FX-ng の場合、グローバルオプションに uplatex を追加する。
728 \ifjsWithpTeXng
729 \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
730 \fi
■ドライバ指定 響 ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合
するかを検査する。
731 \@tempswatrue
```

```
732 \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
733
    \ifjsInPdfMode
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
734
        \@tempswafalse
735
736
     \else\ifx x\jsEngine
737
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else
738
739
        \@tempswafalse
      \fi
740
741
    \else
       \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
742
        \@tempswafalse
743
       \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
744
        \@tempswafalse
745
       \fi\fi
746
       \ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@dvipdfmx\else
747
        \@tempswafalse
748
      \fi\fi
749
750
    \fi\fi
751 \fi
752 \if@tempswa\else
753 \ClassError\bxjs@clsname
      {Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
754
755 \fi
  DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。
756 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
757 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
758 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
759 \else \@tempswatrue
760 \fi\fi\fi
761 \if@tempswa
 ドライバオプションがない場合は警告を出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする (0.3 版との互換性のため)。
    \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else
762
       \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
763
      {No driver option is given}
764
    \fi\fi
765
dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオ
 プションに XXX を追加する。)
766
    \ifbxjs@dvi@opt
767
      \edef\bxjs@next{%
        \let\noexpand\bxjs@driver@given
768
         \csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
769
        \verb|\noexpand\g@addto@macro\noexpand\g@classoptionslist|
770
          {,\bxjs@driver@opt}%
771
772
      }\bxjs@next
```

```
773 \fi
774 \fi
       エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、
  エンジンオプションが platex-ng* (*付) の場合、および既に dvipdfmx が指定されてい
  る場合を除く。
775 \ifjsWithpTeXng
776 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
777
                  \let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
             \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
                  \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
780
           \fi\fi
781 \fi
        ドライバが nodvidriver であった場合の処理。DVI ウェア依存の処理を全て無効化する。
782 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none
783 \bxjs@papersizefalse
784\fi
  ■その他の BXJS 特有の後処理 ® \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は
  minimal に変える。ただしエンジンが (u)pTpX である場合は standard に変える。
  ※ (u)pT<sub>F</sub>X 以外で ja を省略するのは 2.0 版より非推奨となった。
785 \def\bxjs@@minimal{minimal}
786 \ifx\bxjs@jadriver\relax
787
             \ifx j\jsEngine
                  \def\bxjs@jadriver{standard}
788
789
             \else
                  \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
790
                     {The option 'ja' is MISSING!!\MessageBreak
791
                        So 'ja=minimal' is assumed as fallback, but\MessageBreak
792
                        such implicit setting is now DEPRECATED!\MessageBreak
793
                        You should write 'ja=minimal' explicitly,\MessageBreak
794
                        if it is intended}
795
796
                  \let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal
           \fi
797
798\fi
       plautopatch が真の場合はここで plautopatch を読み込む。
  ※この時点で既に読み込まれているパッケージは、calc、keyval、ifpdf。
  ※ Pandoc モードでは plautopatch の既定値を真とする。
799 \def\bxjs@@pandoc{pandoc}
800 \ \texttt{\formula} \ \texttt{\formu
                  \ifjsWitheTeX
801
802 \bxjs@plautopatchtrue
803 \fi\fi\fi
804 \ifx j\jsEngine \ifbxjs@plautopatch
805 \RequirePackage{plautopatch}[2018/08/22]%v0.3
806 \fi\fi
```

エンジンオプションがない場合はエラーを出す。 ※ただし ja 非指定の場合はスキップする。 807 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else \ifx\bxjs@engine@given\@undefined \ClassError\bxjs@clsname 809 {An engine option must be explicitly given}% 810 {When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak 811 engine option.\MessageBreak\@ehc} $813 \fi\fi$ 新しい LuaT_FX (0.87 版以降) では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されて いた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag* であり、エラーの場合は既定値に 置き換えられる。) $814 \ \texttt{ifx} \ \texttt{bxjs@magstyle@@defaultbxjs@magstyle@@mag} \\ else$ \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@@mag \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@@default 816 \ClassError\bxjs@clsname 817 {The engine does not support 'magstyle=usemag'}% 818 {LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak 819 The default value 'nomag*' is used instead.\MessageBreak \@ehc} 820 821 \fi 822 \fi base、jbase、scale の値を用いて和文スケール値を解決する。 ※\bxjs@param@basefontsize と \jsScale へのオプション値の反映は既に実施されてい ることに注意。jbase 非指定の場合はこのままでよい。 823 \ifx\bxjs@jbase@opt\@undefined\else \ifx\bxjs@base@opt\@undefined jbase 指定済で base 未指定の場合は、\jsScale の値を採用して和文基底サイズを決定 する。 825 \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@jbase@opt}% \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale 826 827 \bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}% 828 jbase と base がともに指定済の場合は、それらの値から和文スケール値を決定する。 \ifx\bxjs@scale@opt\@undefined\else 829 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname 830 {Redundant 'scale' option is ignored}% 831 832 \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@jbase@opt}% 833 \@tempdimb=\bxjs@param@basefontsize\relax 834 \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdimb}% 835 \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale 836 \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdima}% 837 \fi 838 839 \fi

\Cjascale 和文クラス共通仕様(※ただし ZR 氏提唱)における、和文スケール値の変数。

840 \let\Cjascale\jsScale

8bit 欧文 T_{EX} の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を通用させるため。)

841 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T

842 \@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100

843 \catcode\@tempcnta\active

844 \advance\@tempcnta\@ne

845 \repeat

異常ではない。

846 \fi

js オプション指定時は、jsarticle(または jsbook)クラスを読込済のように振舞う。 % 「2 つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に

847 \ifbxjs@disguise@js

848 % book report > \def \bxjs@js@clsname{jsbook}

849 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}

850 \@namedef{ver@\bxjs@js@clsname.cls}{2001/01/01 (bxjs)}

851 \fi

color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。

 $852 \ensuremath{\mbox{\tt QClassoptionslist\{,nosetpagesize\}}}$

oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。

853 \ifbxjs@oldfontcommands

854 \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}

855 \fi

■papersize スペシャルの出力 dvi ファイルの先頭に dvips の papersize special を書き込むことで、出力用紙サイズを設定します。これは dvipdfmx や最近の dviout にも有効です。 どうやら papersize special には true 付の単位は許されず、かつ単位は常に true なものと扱われるようです。そこで、後で出てくる(☆)の部分、「\mag にあわせてスケール」よりも手前で実行しておくことになります。

トンボの付いたときの用紙サイズは無意味ですが、いわゆる「ノビ」サイズという縦横 1 インチずつ長い用紙に出力することを考えて、1 インチずつ加えました。ところが pI \neq T $_{\rm E}$ X 2_{ε} はトンボ出力幅を両側に 1 インチとっていますので、1 dvips 使用時に

-0.5in,-0.5in

というオプションを与えて両側0.5インチのトンボにするといいでしょう。

[2003-05-17] トンボをプレビューに使うことを考えて1インチを2インチにしました。

[2016-07-11] memoir クラスのマニュアルによると、トンボを含めた用紙の寸法は\stockwidth、\stockheightと呼ぶようですので、これを使うことにしました。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth,\stockheight を定義するようにしました。

[2020-10-04] IFTEX 2_{ε} 2020-10-01 でカーネルの \shipout コードが拡張され \AtBeginDvi の実行タイミングが変化したので、この時点で発行する \special の中身を展開しておくようにしました。こうしないと、用紙サイズ設定を間違ってしまいます (Issue #72)。

BXJS では出力用紙サイズ記録は geometry パッケージが行う。 また、JS クラスと異なり、\stockwidth、\stockheight は常に定義される。

- 856 \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- 857 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup
- 858 \expandafter\ifx\csname iftombow\expandafter\endcsname\csname iftrue\endcsname
- 859 % \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- 860 \setlength{\stockwidth}{\paperwidth}
- 861 \setlength{\stockheight}{\paperheight}
- 862 \advance \stockwidth 2in
- 863 \advance \stockheight 2in
- 864\fi

■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

- 865 % < slide > \def \n@baseline {13} %
- 867 %<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi

■拡大率の設定

\bxjs@magstyle の値に応じてスイッチ jsc@mag と jsc@mag@xreal を設定する。

- $868 \verb|\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@@magstyle@@magstyle@finesemagstyle@fines$
- 869 \jsc@magtrue
- 870 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@@xreal
- 871 \jsc@mag@xrealtrue
- 872 \fi\fi

サイズの変更は T_EX のプリミティブ $\mbox{\mbox{mag}}$ を使って行います。9 ポイントについては行送 9 も若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていたところを \inv@mag in に直しましたので,geometry パッケージと共存できると思います。なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

設定すべき \mag 値を (基底サイズ)/($10\,\mathrm{pt}$) × $1000\,\mathrm{c}$ 2 算出。BXJS クラスでは、\mag を 直接指定したい場合は、geometry 側ではなくクラスのオプションで行うものとする。

```
873 \ifx\bxjs@param@mag\relax
```

- 874 \@tempdima=\bxjs@param@basefontsize
- 875 \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25
- 876 \divide\@tempdima16384\relax \@tempcnta\@tempdima\relax
- 877 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 878 \else
- 879 % mag 値が直接指定された場合
- 880 \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@param@mag}
- 881 \ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
- 882 % 有効な mag 値の範囲は 1--32768
- 883 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 884 \advance\@tempcnta100000
- 885 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4#5\@nil{\@tempdima=#2#3#4.#5\p@}
- 886 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
- 887 \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}
- 888 \fi
- 889 \@tempcnta\bxjs@param@mag \advance\@tempcnta100000
- $890 \end{area} $4\end{area} $40\end{area} $40\end{area}$
- $891 \ensuremath{\mbox{\mbox{1} \mbox{2}} \ensuremath{\mbox{\mbox{2}} \mbox{2} \ensuremath{\mbox{2}} \ensuremath{\m$
- $892 \verb|\edg| strip@pt\\@tempdima|$
- $893 \verb|\let\jsBaseFontSize\bxjs@param@basefontsize|$

[2016-07-08] \jsc@mpt および \jsc@mmm に, それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

\mag する場合 (現状はこれが既定) にコードの変更を低減するために、以下では必要に応じて、\jsc@mpt を \p0? と書く。その上で、\mag する場合は? を無視して \p0 と解釈させ、\mag しない場合は? を英字扱いにして \p0? という制御綴を\jsc@mpt と同値にする。※ (多分 2.0 版あたりで) JS クラスに合わせるため \p0? 表記を止める予定。

- $894 \newdimen\jsc@mpt$
- $895 \newdimen\jsc@mmm$
- $896 \ifjsc@mag$
- $897 \ \jsc@mpt=1\p@$
- $898 \qquad \verb|\jsc@mmm=1mm|$
- \$99 \catcode`\?=9 % \p@? read as \p@
- 900 \else
- 901 \jsc@mpt=\jsc@magscale\p@
- 902 \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
- 903 \catcode`\?=11 \let\p@?\jsc@mpt
- 904\fi

```
905 \chardef\bxjs@qmcc=\catcode`\?\relax
        906 \g@addto@macro\bxjs@pre@jadriver@hook{\catcode`\?=12\relax}
           ここで pTrX の zw に相当する単位として用いる長さ変数 \jsZw を作成する。約束によ
         り、これは \jsScale × (指定フォントサイズ) に等しい。
          nozw 非指定時は \zw を \jsZw と同義にする。
        907 \newdimen\jsZw
        908 \jsZw=10\jsc@mpt \jsZw=\jsScale\jsZw
        909 \ifbxjs@usezw
        910 \providecommand*\zw{\jsZw}
        911 \fi
\zwspace 全角幅の水平空き。
        912 \def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}
          そして、magstyle が nomag* の場合は、NFSS にパッチを当てる。
        913 \ifjsc@mag@xreal
            \RequirePackage{type1cm}
        914
            \let\jsc@invscale\bxjs@invscale
         ムニャムニャムニャ……。
        916
            \ifbxjs@TUenc
        917
              \else
        918
              \verb|\expandafter\et| csname OT1/cmr/m/n/10\endcsname\elax|
        919
        920
            \expandafter\let\csname OMX/cmex/m/n/10\endcsname\relax
        921
            \let\jsc@get@external@font\get@external@font
            \def\get@external@font{%
        923
              \jsc@preadjust@extract@font
        925
              \jsc@get@external@font}
            \def\jsc@fstrunc#1{%
        926
              \edef\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%
              \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.****\@nil}
        928
            \def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@nil{%
        929
        930
              \edef\jsc@tmpa{#1%
        931
                932
              \fi}
        933
        934
            \def\jsc@preadjust@extract@font{%
        935
              \let\jsc@req@size\f@size
              \dimen@\f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
        936
              \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
        937
        938
              \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
              \let\f@size\jsc@ref@size}
        939
            \def\execute@size@function#1{%
              \let\jsc@cref@size\f@size
        941
```

942

\let\f@size\jsc@req@size

```
943
                          \csname s@fct@#1\endcsname}
                   944
                        \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
                        \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
                   945
                          \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
                   946
                          \edef\jsc@tmpa{{#1}{#2}{#3}{#4}{\strip@pt\@tempdimc}}
                   947
                          \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
                   948
                        \def\gen@sfcnt{%
                   949
                   950
                          \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
                          \empty@sfcnt}
                   951
                   952
                        \def\genb@sfcnt{%
                   953
                          \edef\mandatory@arg{%
                            \mandatory@arg\expandafter\genb@x\jsc@cref@size..\@@}%
                   954
                          \empty@sfcnt}
                   955
                        \ifbxjs@TUenc\else
                   956
                          \DeclareErrorFont{OT1}{cmr}{m}{n}{10}
                   957
                        \fi
                   958
                   959 \fi
                      [2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている \smallskip の, 単位 pt を
                    \jsc@mpt に置き換えた \jsc@smallskip を定義します。これは \maketitle で用い
                    られます。\jsc@medskip と \jsc@bigskip は必要ないのでコメントアウトしています。
     \jsc@smallskip
       \jsc@medskip 960 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}
                   961 %\def\jsc@medskip{\vspace\jsc@medskipamount}
       \jsc@bigskip
                   962 %\def\jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}
\jsc@smallskipamount
 \jsc@medskipamount 963 \newskip\jsc@smallskipamount
                   964 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt
 \jsc@bigskipamount
                   965 %\newskip\jsc@medskipamount
                   966 %\jsc@medskipamount =6\jsc@mpt plus 2\jsc@mpt minus 2\jsc@mpt
                   967 %\newskip\jsc@bigskipamount
                   968 %\jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt
                      \paperwidth, \paperheight を\mag にあわせてスケールしておきます (☆)。
                      [2016-07-11] 新しく追加した\stockwidth, \stockheight も\mag にあわせてスケール
                    します。
                      [2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth,
                    \stockheight が定義されています。
                    ■pagesize スペシャルの出力 [2003-05-17] dvipdfm(x) の pagesize スペシャルを出力し
                    ます。
                      [2004-08-08] 今の dvipdfmx は dvips 用スペシャルを理解するようなので外しました。
                   969 % \ifpapersize
                   970 %
                          \setlength{\Otempdima}{\paperwidth}
                   971 %
                          \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}
```

- 972 % \iftombow
- 973 % \advance \@tempdima 2truein
- 974 % \advance \@tempdimb 2truein
- 975 % \f:
- 976 % \AtBeginDvi{\special{pdf: pagesize width \the\@tempdima\space height \the\@tempdimb}}
- 977 % \fi

3 和文フォントの変更

和文フォントの設定は和文ドライバの管轄。

\@ 欧文といえば、IFTEX の \def\@{\spacefactor\@m} という定義(\@m は 1000) では I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次 のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

[2016-07-14] 2015-01-01 の I $\stackrel{\text{LY}}{=}$ X で、auxiliary files に書き出されたときにスペースが食われないようにする修正が入りました。これに合わせて {} を補いました。

BXJS クラスでの変更点:

- fix-at-cmd オプションが偽の場合は再定義しない。
- 固定の 3000 でなく実際のピリオドの sfcode 値を使う。
- 「防御的な \@」での不具合を防ぐため、大文字直後の \@ は標準と同等の動作にする。
- 978 \chardef\bxjs@periodchar=`\.
- 979 \bxjs@protected\def\bxjs@SE{%
- 980 \ifnum\spacefactor<\@m \spacefactor\@m
- 981 \else \spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar
- 982 \fi}
- $983 \five 0 cmd$
- 984 $\def\0{\bxjs0SE{}}$
- 985 \fi

4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など)の実際の挙動の設定は、三つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って、たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い、行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では 10 と同義の IATeX の内部命令 \@xpt を使っています。この \@xpt の類は次のものがあり、IATpX 本体で定義されてい ます。

```
\@vpt
          5
                   \@vipt
                             6
                                    \@viipt
                                             7
                   \@ixpt
                                    \@xpt
\@viiipt
          8
                                            10
\@xipt
         10.95
                   \@xiipt 12
                                    \@xivpt 14.4
```

ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して、段落の字下げ \parindent, 和文文字 間のスペース \kanjiskip, 和文・欧文間のスペース \xkanjiskip を変更しています。

\kanjiskip は pIAT $_{
m E}$ X $2_{arepsilon}$ で Opt plus .4pt minus .5pt に設定していますが, これは そもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに、プラスになったりマイナ スになったりするのは、追い出しと追い込みの混在が生じ、統一性を欠きます。なるべく追 い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが、ごくわずかなマイナスは許すこ とにしました。

\xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あ るいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四 分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けて も空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 (1zw) に直します。 [2008-02-18] english π

\set@fontsize \fontsize 命令(\large 等でなく)でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行され るように、\@setfontsize ではなく \set@fontsize に対してパッチを当てるように変更。

```
986 \ensuremath{\tt def\ensuremath{\tt set@fontsize\#1\#2\#3}}
```

987 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%

\set@fontsize{#1}{#2}{#3}%

989 % 末尾にコードを追加

\expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{%

\size@update 991

\jsFontSizeChanged}% 992

993 }

\jsFontSizeChanged フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。\jsZw を再設定している。その後でユーザ定義用 のフック \jsResetDimen を実行する。

994 \newcommand*\jsFontSizeChanged{%

\jsZw=\f@size\p@ 995

996 \jsZw=\jsScale \jsZw

\ifdim\parindent>\z@ 997

\if@english \parindent=1em 998

\else \parindent=1\jsZw 999

1000 \fi

 $fi\relax$ 1001

1002 \jsResetDimen}

```
\jsResetDimen ユーザ定義用のフック。
```

1003 \newcommand*\jsResetDimen{}

\jsc@setfontsize クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した \jsc@setfontsize を\@setfontsize の 変わりに用いることにします。

```
1004 \ifjsc@mag
1005
                              \let\jsc@setfontsize\@setfontsize
1006 \else
1007
                                   \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
1008
                                               \@setfontsize#1{#2\jsc@mpt}{#3\jsc@mpt}}
1009 % microtype 対策
                               \ifjsWitheTeX\if j\jsEngine\else
1010
                                                \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
1011
                                                             \edef\bxjs@sfs@next{%
1012
1013
                                                                          \unexpanded{\@setfontsize#1}%
1014
                                                                                             \label{limexpr} $$ {\theta^2 \int_{\mathbb R}^{\infty} \frac{d^2n}{d^2n} } d^2n^2 d^2n
1015
                                                            }\bxjs@sfs@next}
1016
                                \fi\fi
1017 \fi
```

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、\emergencystretch に訴え ます。

これはフォントサイズ非依存なので \Cwd で書くのが適当だが、\Cwd はまだ定義されて いない。

1018 \emergencystretch 3\jsZw

\ifnarrowbaselines 欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines \widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対し て、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。 TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

別行立て数式に入るときに \narrowbaselines が呼ばれるが、このコードでは「数式中 で \normalsize などのサイズ命令 (\@currsize の実体) が呼ばれた」ことになり警告が 出る。JS クラスでは、\@setfontsize 中の \@nomath 実行を消して「そもそもサイズ命令 で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないので、BXJS クラス の実装では、\narrowbaselines の時だけ警告が出ないようにする。

^{1019 \}newif\ifnarrowbaselines

^{1020 \}if@english

```
1021
     \narrowbaselinestrue
1022 \fi
1023 \def\narrowbaselines{%
     \narrowbaselinestrue
1024
1025
      \skip0=\abovedisplayskip
     \skip2=\abovedisplayshortskip
1026
     \skip4=\belowdisplayskip
1027
     \skip6=\belowdisplayshortskip
1029 % 一時的に警告を無効化する
1030
     \let\bxjs@save@nomath\@nomath
1031
     \let\@nomath\@gobble
1032
    \@currsize\selectfont
     \let\@nomath\bxjs@save@nomath
     \abovedisplayskip=\skip0
1034
1035
     \abovedisplayshortskip=\skip2
     \belowdisplayskip=\skip4
      \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
1037
1038 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}
```

microtype パッケージを読み込んだ場合、\normalsize 等のフォントサイズ変更命令の 定義の中に if 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは microtype が邪悪 なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アスキーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、ここでは 16 ポイントにしました。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント(アスキーのものの 0.961 倍)であることもあり,行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際, $16/9.25\approx 1.73$ であり,和文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75)に近づきました。

microtype 対策のため if 文を避ける。

```
1044 \renewcommand{\normalsize}{%
1045 \bxjs@if@narrowbaselines{%
1046 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt
1047 }{%else
1048 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}%
1049 }%
```

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip),数式の下のアキ(\belowdisplayshortskip)の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T_EX Q & A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調節してみることにしました。

- 1050 \abovedisplayskip 11\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- $1051 \quad \verb|\abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?$
- 1052 \belowdisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- 1053 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

最後に、リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を、\@listi にコピーしておきます。\@listI の設定は後で出てきます。

1054 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

- 1055 %</class>
- 1056 %<*class|minijs>
- 1057 %% initialize
- 1058 \normalsize
- 1059 %</class|minijs>
- 1060 %<*class>

\Cht 基準となる長さの設定をします。 $\operatorname{pl} T_{\operatorname{E}} X \, 2_{\varepsilon} \,$ カーネル($\operatorname{plfonts.dtx}$)で宣言されているパ

\Cdp ラメータに実際の値を設定します。たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅 (1zw) です。

\Cwd [2017-08-31] 基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1)から「漢」(JIS コー

\Cvs ド 0x3441) へ変更しました。

\Chs

\Cwd 等の変数は pTrX 系以外では未定義なのでここで定義する。

- 1061 \ifx\Cht\@undefined \newdimen\Cht \fi
- 1062 \ifx\Cdp\@undefined \newdimen\Cdp \fi
- 1063 \ifx\Cwd\@undefined \newdimen\Cwd \fi
- $1065 \ifx\Chs\Cundefined \newdimen\Chs \fi$

規約上、現在の \jsZw の値が \Cwd である。BXJS では \Cht と \Cdp は単純に \Cwd の88% と 12% の値とする。

1066 \setlength\Cht{0.88\jsZw}

- $1067 \stlength\Cdp{0.12\jsZw}$
- $1068 \sline Cwd{1\jsZw}$
- 1069 \setlength\Cvs{\baselineskip}
- $1070 \verb|\chs{1\jsZw}|$

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば $16 \times 0.9 = 14.4$ ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ 4 ± 2 , 2 ± 1 ポイントでしたが,ここではゼロ(\ze)にしました。

microtype 対策のため if 文を避ける。後の \footnotesize も同様。

```
1071 \newcommand{\small}{%
                                       \bxjs@if@narrowbaselines{%
                           1073 %<!kiyou>
                                                              \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%
                           1074 %<kiyou>
                                                            \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%
                           1075 }{%else
                           1076 %<!kiyou>
                                                              \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%
                           1077 %<kiyou>
                                                            \jsc@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%
                           1078
                                       }%
                                       \abovedisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
                           1079
                                       \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
                           1080
                                       \belowdisplayskip \abovedisplayskip
                           1081
                                       \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
                           1082
                           1083
                                        \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                                                                \topsep \z@
                           1084
                           1085
                                                                \parsep \z@
                           1086
                                                                \itemsep \parsep}}
\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は,元はそれぞれ3\pm 1,2\pm 1 ポイン
                               トでしたが、ここではゼロ(\z0)にしました。
                           1087 \newcommand{\footnotesize}{%
                                     \bxjs@if@narrowbaselines{%
                           1089 %<!kiyou>
                                                              \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
                           1090 %<kiyou>
                                                            \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
                           1091 }{%else
                           1092 %<!kiyou>
                                                              \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
                           1093 %<kiyou>
                                                            \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
                                       }%
                           1094
                                       \abovedisplayskip 6\p0? \@plus2\p0? \@minus3\p0?
                           1095
                                       \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
                                       \belowdisplayskip \abovedisplayskip
                           1097
                           1098
                                       \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
                                       \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                           1099
                                                                \topsep \z@
                           1100
                                                                \parsep \z@
                           1101
                           1102
                                                                \itemsep \parsep}}
   \scriptsize それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
                \tiny ます。特に注意すべきは \large で、これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い、
                              行送りを \normalsize と同じにすることによって, 節見出しが複数行にわたっても段間で
              \large
                              行が揃うようにします。
              \Large
                                  [2004-11-03] \HUGE を追加。
              \LARGE
                \label{local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_loc
                           1104 \newcommand{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
                \Huge _{1105} \if@twocolumn
                \HUGE
```

```
1106 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
1107 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\11.111}{\n@baseline}}
1108 \else
1109 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{17}}
1110 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\11.111}{17}}
1111 \fi
1112 %<!kiyou>\newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
1113 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large{12.222}{21}}
1114 \newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large{12.222}{21}}
1115 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxvpt{28}}
1116 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
1117 \newcommand{\HUGE}{\jsc@setfontsize\HUGE{30}{40}}
```

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは、行列や場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送りが変わるような大きいものを使わず、行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがいいでしょう。

1118 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道があればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく,\headfont という命令で定めることにします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが,通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。 $\mathbb{P}IMT_EX\ 2_{\varepsilon}$ 美文書作成入門』(1997年) では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが,\fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

- 1119 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}
- 1120 \newcommand{\headfont}{\sffamily}
- 1121 % \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}

5 レイアウト

■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが、2zw にしました。 \columnseprule このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

- 1122 %<!kiyou>\setlength\columnsep{2\Cwd}
- 1123 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}
- 1124 \setlength\columnseprule{\z0}

■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら、 \lineskip より近づかないようにし \normallineskip

\lineskiplimit

ます。元は Opt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

- 1125 \setlength\lineskip{1\jsc@mpt}
- 1126 \setlength\normallineskip{1\jsc@mpt}
- 1127 \setlength\lineskiplimit{1\jsc@mpt}
- 1128 \setlength\normallineskiplimit{1\jsc@mpt}

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

\renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の 2 倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行送りの伸縮はしないのが一般的です。

1129 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが,ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

- $1130 \stlength\parskip{\z0}$
- 1131 \if@slide
- 1132 \setlength\parindent{0\p0}
- 1133 \else
- 1134 \setlength\parindent{1\Cwd}
- 1135 \fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう \@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

 $\ensuremath{\verb{\coloredge}}$ \Chighpenalty 1136 \Clowpenalty 51

1137 \@medpenalty 151

 $1138 \setminus \text{Ohighpenalty } 301$

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

1139 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。

1140 % \brokenpenalty 100

5.1 ページレイアウト

BXJS ではページレイアウトの処理は geometry パッケージが担当している。

■準備 湾

\bxjs@bd@pre@geometry@hook begin-document フックのコード内で、geometry パッケージが挿入するコードの直前で実行されるフック。

```
1141 \@onlypreamble\bxjs@bd@pre@geometry@hook
                                                             1142 \let\bxjs@bd@pre@geometry@hook\@empty
                                                                           現状ではここで \mag を設定している。
                                                                           \topskip も指定する。
                                                             1143 \ifjsc@mag
                                                             1144 \mag=\bxjs@param@mag
                                                             1145 \fi
                                                             1146 \setlength{\topskip}{10\p0?}
                                                                           \jsSetQHLength のための和文単位の定義。
                                                             1147 \def\bxjs@unit@trueQ{0.25truemm}\let\bxjs@unit@trueH\bxjs@unit@trueQ
                                                              1148 \ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw{\jsZw}|} let\ensuremath{\verb|bxjs@unit@zh\bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\verb|def|bxjs@unit@zw|} let\ensuremath{\|def|bxjs@unit@zw|} let\ensure
                                                                           \bxjs@param@paper が長さ指定の場合、geometry の形式 (papersize={W,H}) に変換
                                                                   する。{W}{H} の形式について。
                                                             1149 \@tempswafalse
                                                             1150 \end{figure} bxjs@tmpdo{\end{figure} ognoup\end{figure} bxjs@tmpdo@a\end{figure} ognoup\end{figure} and figure figure for the contraction of the contraction o
                                                             1151 \def\bxjs@tmpdo@a#1{\edef\bxjs@tmpa{#1}%
                                                                                  \@ifnextchar\bgroup\bxjs@tmpdo@b\remove@to@nnil}
                                                             1153 \def\bxjs@tmpdo@b#1{\edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}%
                                                                                 \@ifnextchar\@nnil\bxjs@tmpdo@c\remove@to@nnil}
                                                             1155 \def\bxjs@tmpdo@c\@nnil{\@tempswatrue
                                                                                  \edef\bxjs@param@paper{papersize={\bxjs@tmpa}}}
                                                             1157 \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@param@paper\@nnil
                                                                   W,H の形式について。
                                                             1158 \if@tempswa\else
                                                                                 \def\bxjs@tmpa{\@nil,\@nil}
                                                                                 \def\bxjs@tmpdo#1,#2,#3\@nnil{%
                                                             1160
                                                             1161
                                                                                         \def\bxjs@tmpb{#3}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
                                                                                                \Otempswatrue\edef\bxjsOparamOpaper{papersize={#1,#2}}\fi}
                                                             1162
                                                             1163
                                                                                 \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@param@paper,\@nil,\@nil\@nnil
                                                             1164 \fi
                                                                   W*H の形式について。
                                                             1165 \if@tempswa\else
                                                                               \def\bxjs@tmpa{\@nil*\@nil}
                                                                                  \def\bxjs@tmpdo#1*#2*#3\@nnil{%
                                                             1167
                                                                                         \def\bxjs@tmpb{#3}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
                                                             1168
                                                                                                \Otempswatrue\edef\bxjsOparamOpaper{papersize={#1,#2}}\fi}
                                                              1169
                                                                                 \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@param@paper*\@nil*\@nil\@nnil
                                                             1170
                                                             1171 \fi
\bxjs@layout@paper geometry の用紙設定のオプション。
                                                             1172 \edef\bxjs@layout@paper{%
                                                             1173
                                                                              \ifjsc@mag truedimen,\fi
                                                                                \if@landscape landscape,\fi
                                                             1174
                                                                               \bxjs@param@paper}
```

1175

```
\bxjs@layout geometry のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。
            1176 %<*article|report>
            1177 \def\bxjs@layout@base{%
                  headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
                  headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
            1180 }
            1181 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
            1182 hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
            1183
                  vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
            1184 }
            1185 %</article|report>
            1186 %<*book>
            1187 \def\bxjs@layout@base{%
                  headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
            1188
            1190 \ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                %---
            1191 % アレ
            1192 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                 hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
            1194
                  vscale=0.83, vmarginratio=1:1,%
            1195 }
                                                %---
            1196 \else
            1197% 非アレ
            1198 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
            1199 hmargin=18\jsc@mmm,%
                  vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
            1200
            1201 }
            1202 \fi
                                                %---
            1203 %</book>
            1204 %<*slide>
            1205 \def\bxjs@layout@base{%
            1206 noheadfoot,%
            1207 }
            1208 \verb|\edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base}|
            1209 hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
            1210
                  vscale=0.944, vmarginratio=1:1,%
            1211 }
            1212 %</slide>
                textwidth オプションの設定を反映する。
            1213 %<*!book>
            1214 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else
                  \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}
                  \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout width=\the\@tempdima,}
            1216
            1217 \fi
            1218 %</!book>
            1219 \ifx\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined\else
                  \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@number@of@lines@opt}
                  \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout lines=\the\@tempcnta,}
            1221
```

1222 \fi

\fullwidth 〔寸法レジスタ〕ヘッダ・フッタ領域の横幅。

1223 \newdimen\fullwidth

\bxjs@textwidth@limit 〔寸法値マクロ〕bxjsbook における、\textwidth 上限の値。

\jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕\bxjs@textwidth@limit の全角(\Cwd)単位での値。

1224 %<*book>

1225 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}

1226 \@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd

1227 \ifx\bxjs@textwidth@limit@opt\@undefined\else

1228 \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@textwidth@limit@opt}

1229 \@tempdima=\@tempcnta\Cwd

1230 \fi

1231 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else

1232 \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}

1233 \fi

1234 \edef\bxjs@textwidth@limit{\the\@tempdima}

1235 \ifdim\@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd\else

1236 \bxjs@invscale\@tempdima{\strip@pt\Cwd}

1237 \long\edef\jsTextWidthLimit{\strip@pt\@tempdima}

1238 \fi

1239 %</book>

\bxjs@preproc@layout geometry の前処理。

geometry は \topskip が標準の行高(\ht\strutbox) より小さくならないようにする 自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避(無効化)して いる。

1240 \def\bxjs@preproc@layout{%

1241 \edef\bxjs@save@ht@strutbox{\the\ht\strutbox}\ht\strutbox=10\jsc@mpt}

\bxjs@postproc@layout geometry の後処理。

1242 \def\bxjs@postproc@layout{%

geometry のドライバを再設定する。

243 \ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else

1244 \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver

1245 \fi

\ht\strutbox の値を元に戻す。

1246 \ht\strutbox=\bxjs@save@ht@strutbox\relax

\textwidth の値を補正する。

1247 \ifbxjs@whole@zw@lines

1248 \@tempdimb=\textwidth

1249 \if@twocolumn \@tempdima=2\Cwd \else \@tempdima=1\Cwd \fi

1250 \advance\textwidth.005pt\relax

 $1251 \hspace{1.5cm} \verb|\divide| \texttt{textwidth} @ tempdima \ \\ \verb|\multiply| \texttt{textwidth} & \texttt{dtempdima} \\$

```
\advance\@tempdimb-\textwidth
1252
1253
        \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb
1254
        \advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb
1255
      \fi
      \fullwidth=\textwidth
 bxjsbook の場合は、geometry が設定した \textwidth は \fullwidth として扱い、その
 値から実際の \textwidth を導出する。
1257 %<*book>
     \@tempdima=\bxjs@textwidth@limit\relax
1258
1259
     \ifbxjs@whole@zw@lines
        \advance\@tempdima.005pt\relax
1260
1261
        \divide\@tempdima\Cwd \multiply\@tempdima\Cwd
1262
1263
     \ifdim\textwidth>\@tempdima
        \textwidth=\@tempdima
1264
        \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
1265
     \fi
1266
1267 %</book>
 \textheight 関連の調整。
1268
      \@tempdimb=\textheight
      \advance\textheight-\topskip
1269
      \advance\textheight.005pt\relax
      \divide\textheight\baselineskip \multiply\textheight\baselineskip
1271
1272
      \advance\textheight\topskip
1273
      \advance\@tempdimb-\textheight
     \verb|\advance| topmargin 0.5 | @tempdimb|
 \headheight 関連の調整。
1275
     \@tempdima=\topskip
      \advance\headheight\@tempdima
1276
      \advance\topmargin-\@tempdima
 marginpar 関連の調整。
      \setlength\marginparsep{\columnsep}
1278
      \setlength\marginparpush{\baselineskip}
1279
      \setlength\marginparwidth{\paperwidth-\oddsidemargin-1truein%
1280
          -\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep}
1281
1282
      \ifbxjs@whole@zw@lines
        \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
1283
1284
 連動する変数。
      \maxdepth=.5\topskip
      \stockwidth=\paperwidth
1286
1287
      \stockheight=\paperheight
1288 }
```

\jsGeometryOptions geometry パッケージに渡すオプションのリスト。

```
※geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。
1289 \edef\jsGeometryOptions{%
    \bxjs@layout@paper,\bxjs@layout}
 ■geometry パッケージを読み込む 彎
   ムニャムニャ。
1291 \def\bxjs@geometry@name{geometry}
1292 \ifbxjs@old@hook@system
    \let\bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook\AtBeginDocument
1294 \else
     \def\bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{%
1296
      \AddToHook{begindocument}[\bxjs@geometry@name]}
1297\fi
   geoemtry=class の場合に、実際に geometry パッケージを読みこむ。
geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止
 するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプ
 ションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時
 は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。
1299 \ifbxjs@papersize
    \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
      \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
1301
    \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode
1302
      \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
1303
    \fi\fi
1304
    \let\bxPapersizeSpecialDone=t
1306 \else
    \PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}
1308 \fi
```

ここで geometry を読み込む。

※geometry の begin-document フックにおいて、LuaTrX の旧版互換を有効にする。

```
1309 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook
```

- 1310 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\bxjs@bd@pre@geometry@hook}
- 1311 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\ImposeOldLuaTeXBehavior}
- 1312 \bxjs@preproc@layout
- 1313 \edef\bxjs@next{%
- $1314 $$ \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}\% $$$
- 1315 }\bxjs@next
- 1316 \bxjs@apply@bd@pre@geometry@hook{\RevokeOldLuaTeXBehavior}

\bxjs@geometry@driver geometry が用いるドライバの名前。

※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、\bxjs@postproc@layout において書

```
き戻す処理を入れている。
                                        1317 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver
                                        1318 \bxjs@postproc@layout
                                                  geometry のドライバ自動判別に対する前処理。
                                        1319 \verb|\g@addto@macro\bxjs@bd@pre@geometry@hook{%}|
                                            BXJS2.0 版より、geometry の 4.x 版のサポートは廃止された。
                                                              \@ifpackagelater{geometry}{2010/02/12}{}{\%else
                                                                    \PackageError\bxjs@clsname
                                        1321
                                        1322
                                                                      {Your 'geometry' package is too old (< v5.0)}%
                                                                      {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                        1323
                                        1324
                                                                    \let\Gm@driver\relax}%
                                             エンジンが platex-ng の時は geometry のドライバを pdftex にする。
                                                              \ifjsWithpTeXng
                                                                    \ifx\Gm@driver\@empty
                                        1326
                                                                          \def\Gm@driver{pdftex}%
                                        1327
                                        1328
                                                                    \fi
                                                              fi
                                        1329
\setpagelayout ページレイアウト設定のためのユーザ命令。
                                        1330 \def\setpagelayout{%
                                                        \bxjs@ifplus{\bxjs@setpagelayout@a\tw@}{%else
                                                              \@ifstar{\bxjs@setpagelayout@a\@ne}{\bxjs@setpagelayout@a\z@}}}
                                        1332
                                        1333 \def\bxjs@setpagelayout@a#1#2{%
                                                        \ifcase#1% modify
                                                              \def\bxjs@next{\ifjsc@mag truedimen,\fi #2}%
                                        1335
                                        1336
                                                       \or% reset(*)
                                                              \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,#2}%
                                        1337
                                                        \or% semireset(+)
                                        1338
                                                              \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout@base,#2}%
                                        1339
                                        1340
                                                        \bxjs@preproc@layout
                                        1341
                                        1342
                                                        \edef\bxjs@next{%
                                                              \noexpand\geometry{\bxjs@next}%
                                        1343
                                                        }\bxjs@next
                                                        \bxjs@postproc@layout}
                                        1345
```

■geometry パッケージを読み込まない 彎

geometry=user の場合の処理。

 $1346 \else \ if x \ bxjs @geometry \ bxjs @geometry \ @user$

この場合はユーザが何らかの方法(例えば geometry を読み込む)でページレイアウトを設定する必要がある。もし、本体開始時に \textwidth がカーネル設定の値(.5\maxdimen)のままになっている場合はエラーを出す。

```
※\jsUseMinimalPageLayout は動作テスト用。
1347 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                      \ifdim\textwidth=.5\maxdimen
                               \ClassError\bxjs@clsname
1349
                                    {Page layout is not properly set}%
1350
1351
                                    {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                      \fi}
1352
1353 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
                        \setlength{\textwidth}{6.5in}%
1354
                        \setlength{\textheight}{8in}}
               \setpagelayout はとりあえず無効にしておく。
1356 \let\bxjs@geometry@driver\relax
1357 \def\setpagelayout{%
                       \bxjs@ifplus{\bxjs@pagelayout@a}{%else
                                \@ifstar{\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}}
1359
1360 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
                       \ClassError\bxjs@clsname
1362
                           {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak
1363
                               because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}
1364 %
1365 \fi\fi
```

■JS クラスと共通処理の開始 灣

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- zw の代わりに \jsZw を用いる。
- article/report/book/slide の切り分けの処理が異なる。
- ※ diff が崩壊するのを避けるためオリジナルのコードを無効化した状態で挿入しておく。

1366 %<*jsclasses>

■縦方向のスペース

\topskip

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値 にすると、本文中に ∫ のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のペー ジより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

> [2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで、元は12pt でしたが、新ドキュメントクラ スでは \topskip と等しくしていました。ところが、fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようですので、2倍に増やしました。代わりに、版面の上下 揃えの計算では \headheight ではなく \topskip を使うことにしました。

> [2016-08-17] 圏点やルビが一行目に来た場合に下がるのを防ぐため、\topskip を 10pt から 1.38zw に増やしました。\headheight は従来と同じ 20pt のままとします。

```
1367 \setlength\topskip{1.38zw}\% from 10\jsc@mpt (2016-08-17)
        1368 \if@slide
        1369 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
        1370 \else
        1371 \setlength\headheight{20\jsc@mpt}\% from 2\topskip (2016-08-17); from \topskip (2003-
           06-26)
        1372 \fi
\footskip \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは、book で
         0.35in (約8.89mm), book 以外で30pt (約10.54mm) となっていましたが, ここではA4
         判のときちょうど 1cm となるように、\paperheight の 0.03367 倍 (最小 \baselineskip)
         としました。書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。
        1373 %<*article|kiyou>
        1375 \setlength\footskip{0pt}
        1376 \else
            \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
        1378
             \ifdim\footskip<\baselineskip
               \setlength\footskip{\baselineskip}
        1380
            \fi
        1381 \fi
        1382 %</article|kiyou>
        1383 %<jspf>\setlength\footskip{9\jsc@mmm}
        1384 %<*book>
        1385 \if@report
            \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
        1386
             \ifdim\footskip<\baselineskip
              \setlength\footskip{\baselineskip}
        1388
        1389
        1390 \else
             \setlength\footskip{0pt}
        1391
        1392 \fi
        1393 %</book>
        1394 %<*report>
        1395 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
        1396 \ifdim\footskip<\baselineskip
        1397 \setlength\footskip{\baselineskip}
        1398 \fi
        1399 %</report>
 \headsep \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。 元は book で 18pt (約 6.33mm), そ
         れ以外で25pt(約8.79mm)になっていました。ここではarticleは\footskip - \topskip
         としました。
           [2016-10-08] article の slide のとき、および book の非 report と kiyou のときに
         \headsep を減らしそこねていたのを修正しました(2016-08-17 での修正漏れ)。
        1400 %<*article>
```

1401 \if@slide

```
1402
     \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
1403
     \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
     1405 \else
     \verb|\ength>| footskip| 
1406
     \addtolength\headsep{-\topskip}
1408 \fi
1409 %</article>
1410 %<*book>
1411 \if@report
     \setlength\headsep{\footskip}
1413
     \addtolength\headsep{-\topskip}
1414 \else
     \setlength\headsep{6\jsc@mmm}
1415
     \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
1417
     \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
1418 \fi
1419 %</book>
1420 %<*report>
1421 \setlength \endsep{footskip}
1422 \addtolength\headsep{-\topskip}
1423 %</report>
1424 %<*jspf>
1425 \setlength\headsep{9\jsc@mmm}
1426 \addtolength\headsep{-\topskip}
1427 %</jspf>
1428 %<*kiyou>
1429 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
1430 \stlength\headsep{0\jsc@mpt}
1431 \addtolength\headsep{-\topskip}\%% added (2016-10-08)
1432 \addtolength\headsep\{10\jsc@mpt\}\% added (2016-10-08)
1433 %</kiyou>
```

\maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain T_EX や LAT_EX 2.09 では 4pt に固定でした。LAT_EX2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ(ここでは 10pt)に等しいので、結局 \maxdepth は \topskip の半分の値(具体的には 5pt)にします。

1434 \setlength\maxdepth{.5\topskip}

■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。

 $1435 \verb|\newdimen\fullwidth|$

この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍

(二段組では全角幅の偶数倍) にします。0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から約2 インチを引いた値になるように選びました。book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。article では A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50zw (25 文字 ×2 段) +段間 8mm とします。

```
1436 %<*article>
1437 \if@slide
1438
      \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}
1440 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1441 \fi
1442 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1443 \verb|\divide\fullwidth\@tempdima \ \verb|\multiply\fullwidth\@tempdima| \\
1444 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1445 %</article>
1446 %<*book>
1447 \if@report
      \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1448
1449 \else
      \setlength\fullwidth{\paperwidth}
1451
      \verb|\addtolength| fullwidth{-36\jsc@mmm}|
1452 \fi
1453 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1454 \det \frac{\text{divide}\left(\frac{1}{2}\right)}{\text{divide}\left(\frac{1}{2}\right)} 
1455 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1456 \setminus if@report \setminus else
      \if@twocolumn \else
1457
         \ifdim \fullwidth>40zw
1458
           \setlength\textwidth{40zw}
1459
1460
         \fi
      \fi
1461
1462 \fi
1463 %</book>
1464 %<*report>
1465 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1466 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1467 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1468 \stiength\textwidth{\fullwidth}
1469 %</report>
1470 %<*jspf>
1471 \verb|\setlength\fullwidth{50zw}|
1472 \addtolength\fullwidth{8\jsc@mmm}
1473 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1474 %</jspf>
1475 %<*kiyou>
1476 \text{ } \text{setlength} \text{fullwidth} \text{ } 48zw
```

```
1477 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
1478 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1479 %</kiyou>
```

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と \textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は、紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、\topskip を引き、それを \baselineskip の倍数に切り捨て、最後に \topskip を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-26] \topskip を 10pt から 1.38zw に増やしましたので,その分 \textheight を増やします(2016-08-17 での修正漏れ)。

[2016-10-08] article の slide のときに \headheight はゼロなので、さらに修正しました $(2016-08-17\$ での修正漏れ)。

```
1480 %<*article|book|report>
```

1481 \if@slide

 $1482 \quad \texttt{\setlength{\textheight}{0.95}paperheight}$

1483 \else

 $1484 \quad \texttt{\setlength{\texttextheight}{0.83}paperheight}$

1485 \fi

 $1486 \addtolength{\text{\textheight}}_{-10\jsc@mpt}\% \ from -\topskip (2016-10-08); \ from -\topskip (2003-06-26)$

 $1487 \addtolength{\text{textheight}}{-\headsep}$

1488 \addtolength{\textheight}{-\footskip}

 $1489 \addtolength{\text{textheight}}{-\topskip}$

1490 \divide\textheight\baselineskip

1491 \multiply\textheight\baselineskip

1492 %</article|book|report>

1493 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}

1494 % kiyou>\setlength{\textheight}{47\baselineskip}

 $1495 \addtolength{\text{textheight}}{\text{topskip}}$

1496 \addtolength{\textheight}{0.1\jsc@mpt}

1497 %<jspf>\setlength{\mathindent}{10\jsc@mmm}

\flushbottom [2016-07-18] \textheight に念のため 0.1 ポイント余裕を持たせているのと同様に、 \flushbottom にも余裕を持たせます。元の $ext{IMTEX}\,2_{arepsilon}$ での完全な \flushbottom の定義は

```
\def\flushbottom{%
```

\let\@textbottom\relax \let\@texttop\relax}

ですが,次のようにします。

```
1498 \def\flushbottom{%
```

- 1500 \let\@texttop\relax}

\marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。\marginparpush は欄外の書き込 \marginparpush みどうしの最小の間隔です。

- 1501 \setlength\marginparsep{\columnsep}
- 1502 \setlength\marginparpush{\baselineskip}

\oddsidemargin それぞれ奇数ページ,偶数ページの左マージンから 1 インチ引いた値です。片面印刷では \evensidemargin が使われます。 $T_{\rm E}X$ は上・左マージンに 1truein を挿入しますが,トン ボ関係のオプションが指定されると ${\rm pId}T_{\rm E}X$ 2_{ε} (plcore.ltx) はトンボの内側に 1in のスペース(1truein ではなく)を挿入するので,場合分けしています。

- 1503 \setlength{\oddsidemargin}{\paperwidth}
- $1504 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}$
- 1505 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}
- 1506 \iftombow
- 1507 \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}
- 1508 \ 🗕 🗆
- 1509 \addtolength{\oddsidemargin}{-\inv@mag in}
- 1510 \fi
- 1511 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
- 1512 \if@mparswitch
- 1513 \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}
- $1514 \qquad \verb|\addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}|$
- 1515 \fi

\marginparwidth \marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅(\evensidemargin + 1 インチ)から 1 センチを引き,さらに \marginparsep(欄外の書き込みと本文のアキ)を引いた値にしました。最後に 1 zw の整数倍に切り捨てます。

- $1516 \verb|\colored]{th} argin parwidth {\colored}{paper width}$
- 1517 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}
- 1518 \addtolength\marginparwidth{-\inv@mag in}
- 1519 \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}
- 1520 \addtolength\marginparwidth{-10\jsc@mmm}
- $1521 \addtolength\marginparwidth{-\marginparsep}$
- 1522 \@tempdima=1zw
- 1523 \divide\marginparwidth\@tempdima
- 1524 \multiply\marginparwidth\@tempdima

\topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離)から1インチ引いた値です。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-17] \topskip を 10pt から 1.38zw に直しましたが,\topmargin は従来の値から変わらないように調節しました。…のつもりでしたが,\textheight を増やし忘れていたので変わってしまっていました(2016-08-26 修正済み)。

```
1525 \setlength\topmargin{\paperheight}
1526 \addtolength topmargin{-\textheight}
1527 \setminus if@slide
1528 \addtolength\topmargin{-\headheight}
1529 \else
     \addtolength\topmargin{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -
    \headheight (2003-06-26)
1531 \fi
1532 \addtolength\topmargin{-\headsep}
1533 \addtolength topmargin{-\footskip}
1534 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
1535 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
1536 \setminus iftombow
      \addtolength\topmargin{-1in}
1537
1538 \else
1539 \addtolength\topmargin{-\inv@mag in}
1540 \fi
1541 %</jsclasses>
```

■脚注

\footnotesep 各脚注の頭に入る支柱(strut)の高さです。脚注間に余分のアキが入らないように, \footnotesize の支柱の高さ(行送りの0.7倍)に等しくします。

ここは元々は

{\footnotesize\global\setlength\footnotesep{\baselineskip}}

としていたが、そもそも \global\setlength~ は calc 使用時には有意義な動作をしない。 \global\footnotesep だと所望の値が得られるが、同時に \footnotesize のフォントを 固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

1542 \footnotesep=11\p@? \footnotesep=0.7\footnotesep

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが、和文の行送りを考えてもうちょっと大 きくします。

1543 \setlength{\skip\footins}{16\p0? \0plus 5\p0? \0minus 2\p0?}

■フロート関連 フロート(図,表)関連のパラメータは IATeX 2 本体で定義されています が、ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)とフロートだ けのページで設定が異なります。ちなみに、カウンタは内部では \ce を名前に冠したマクロ になっています。

\c@topnumber topnumber カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

1544 \setcounter{topnumber}{9}

\topfraction 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

1545 \renewcommand{\topfraction}{.85}

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1546 \setcounter{bottomnumber}{9}

 $\$ \bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

1547 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

1548 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2~e~0.1 に変えました。

1549 \renewcommand{\textfraction}{.1}

\floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。 $1550 \renewcommand{floatpagefraction}{.8}$

\c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。 $[2003-08-23] \ \,$ ちょっと増やしました。

1551 \setcounter{dbltopnumber}{9}

\dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7 を 0.8 に変えてあります。

1552 \renewcommand{\dbltopfraction}{.8}

\dblfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8 に変えてあります。

 $1553 \verb| renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}$

\floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・\textfloatsep 下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本\intextsep 文との距離です。

1554 \setlength\floatsep {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?} 1555 \setlength\textfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?} 1556 \setlength\intextsep {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?}

\dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。

\@fptop フロートだけのページに入るグルーです。\@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部,

\@fpsep \@fpsep はフロート間に入ります。

\@fpbot

```
1559 \setlength\@fptop{0\p@? \@plus 1fil}
1560 \setlength\@fpsep{8\p@? \@plus 2fil}
1561 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}

\@dblfptop 段抜きフロートについての値です。

\@dblfpsep 1562 \setlength\@dblfptop{0\p@? \@plus 1fil}
\@dblfpbot 1563 \setlength\@dblfpsep{8\p@? \@plus 2fil}
1564 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}
```

6 改ページ(日本語 TEX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage \pltx@cleartoleftpage

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,同じ命令を追加しました。

\pltx@cleartooddpage

\pltx@cleartoevenpage

1. \pltx@cleartorightpage:右ページになるまでページを繰る命令

2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令

3. \pltx@cleartooddpage:奇数ページになるまでページを繰る命令

4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

となっています。

```
1565 %\def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
1566 % \ifodd\c@page
1567 %
         \iftdir
1568 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1569 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1570 %
         \fi
1571 % \else
1572 %
         \ifydir
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1573 %
1574 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1575 %
         \fi
1576 % \fi\fi}
1577 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1578 % \ifodd\c@page
1579 %
         \ifydir
1580 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1581 %
1582 %
         \fi
1583 % \else
1584 %
         \iftdir
1585 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1586 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1587 %
         \fi
1588 % \fi\fi}
1589 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page\else
1590
1591
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
```

```
1592 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1593 \fi\fi}
1594 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
1595 \ifodd\c@page
1596 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1597 \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1598 \fi\fi}
```

BXJS クラスでは \iftdir 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

1599 \let\pltx@cleartorightpage\pltx@cleartooddpage 1600 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage

\cleardoublepage [2017-02-24] コミュニティ版 pLTEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて, report と book クラスの場合に\cleardoublepage を再定義します。

1601 %<*book|report>

1602 \if@openleft

1603 \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage

1604 \else\if@openright

1605 \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage

1606 \fi\fi

1607 %</book|report>

7 ページスタイル

ページスタイルとして,IFTEX 2_{ε} (欧文版)の標準クラスでは empty, plain, headings, myheadings があります。このうち empty, plain スタイルは IFTEX 2_{ε} 本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが, ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps0... の形のマクロで定義されています。

\Cevenhead \Coddhead, \Coddfoot, \Cevenhead, \Cevenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

\Coddhead フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。

\@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右} 右の柱を設定します。

\leftmark 左の柱を出力します。

\rightmark 右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

```
1608 \% \left( \frac{\text{gempty}}{\%} \right)
```

- 1609 % \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1610 % \let\@oddhead\@empty
- 1611 % \let\@oddfoot\@empty
- 1612 % \let\@evenhead\@empty
- 1613 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

- 1614 \def\ps@plainfoot{%
- 1615 \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1616 \let\@oddhead\@empty
- $1617 $$ \def\\dot{\operatorname{\bf Afil}\theta} \hfil\hepage\hfil}%$
- 1618 \let\@evenhead\@empty
- 1619 \let\@evenfoot\@oddfoot}
- $1620 \ensuremath{\mbox{def\ps@plainhead}}$
- 1621 \let\@mkboth\@gobbletwo
- 1622 \let\@oddfoot\@empty
- 1623 \let\@evenfoot\@empty
- 1624 \def\@evenhead{%
- 1625 \if@mparswitch \hss \fi
- 1626 \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
- 1627 \if@mparswitch\else \hss \fi}%
- 1628 \def\@oddhead{%
- 1629 \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
- 1630 %<book>\let\ps@plain\ps@plainhead
- 1631 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot

\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン ダーラインを引くようにしてみました。

まず article の場合です。

- 1632 %<*article|slide>
- $1633 \setminus if@twoside$
- $1634 \qquad \texttt{\def\ps@headings}\{\%$
- 1635 \let\@oddfoot\@empty
- 1636 \let\@evenfoot\@empty
- 1637 \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
- 1638 \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%

```
1639
         \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1640
       \def\@oddhead{%
1641
         \underline{%
           \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1642
1643
       \let\@mkboth\markboth
       \def\sectionmark##1{\markboth{%
1644
          1645
1646
          ##1}{}}%
       \def\subsectionmark##1{\markright{%
1647
          \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \bxjs@label@sect{subsection}\hskip1\jsZw\fi
1648
          ##1}}%
1649
1650
1651 \else % if not twoside
     \def\ps@headings{%
1652
       \let\@oddfoot\@empty
1653
       \def\@oddhead{%
1654
         \underline{%
1655
           \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1656
1657
       \let\@mkboth\markboth
       \def\sectionmark##1{\markright{%
1658
           \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \bxjs@label@sect{section}\hskip1\jsZw\fi
1660
1661 \fi
1662 %</article|slide>
```

次は book および report の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。

\autoxspacing は未定義の可能性があるため、「\autoxspacing が定義済なら実行する」マクロ \bxjs@maybe@autoxspacing を代わりに用いる。

```
1663 %<*book|report>
1664 \def\bxjs@maybe@autoxspacing{%
      \ifx\autoxspacing\@undefined\else \autoxspacing \fi}
1666 \newif\if@omit@number
1667 \def\ps@headings{%
      \let\@oddfoot\@empty
1668
      \let\@evenfoot\@empty
1669
      \def\@evenhead{%
        \if@mparswitch \hss \fi
1671
1672
        \underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
1673
            \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1674
      \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
1676
            {\if@twoside\rightmark\else\leftmark\fi}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
      \let\@mkboth\markboth
1677
1678
      \def\chaptermark##1{\markboth{%
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1679
```

```
1681
                       \if@omit@number\else
            1682
                         \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\jsZw
                       \fi
            1683
                     \fi
            1684
                   \fi
            1685
                   ##1}{}}%
            1686
                 \def\sectionmark##1{\markright{%
                   1688
            1689
            1690 %</book|report>
                最後は学会誌の場合です。
            1691 %<*jspf>
            1692 \ensuremath{\mbox{\mbox{def}\ps@headings}}\
                 \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
            1693
                 \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
                 \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
            1695
                 \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
            1696
            1697 %</jspf>
\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するた
              め,ここでの定義は非常に簡単です。
                [2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。
            1698 \def\ps@myheadings{%
                 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
                 \def\@evenhead{%
            1700
            1701
                   \if@mparswitch \hss \fi%
            1702
                   \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
                   \if@mparswitch\else \hss \fi}%
            1703
            1704
                 \def\@oddhead{%
                   1705
                 \let\@mkboth\@gobbletwo
            1707 % <book | report > \let\chaptermark \@gobble
                 \let\sectionmark\@gobble
            1709 %<!book&!report> \let\subsectionmark\@gobble
            1710 }
```

8 文書のマークアップ

\if@mainmatter

1680

8.1 表題

\title これらは \LaTeX 本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示し\author ます。

```
\date 1711 % \newcommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}}

1712 % \newcommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}}

1713 % \newcommand*{\date}[1]{\gdef\@date{#1}}
```

\subtitle 副題を設定する。

```
\jsSubtitle ※プレアンブルにおいて \newcommand*{\subtitle}{...} が行われることへの対策とし
                                                                                                                                                  て、\subtitle の定義を \title の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題
                                                                                                                                                   より前に副題を設定したい場合は、\jsSubtitle 命令を直接用いればよい。
                                                                                                                                                            本体を \jsSubtitle として定義する。
                                                                                                                                        1715 \ensuremath{\label{locality}} 1715 \ensuremath{\locality} 1715 \ensuremath{\loc
                                                                                                                                       1716 %\let\bxjs@subtitle\@undefined
                                                                                                                                                            \title にフックを入れる。
                                                                                                                                       1717 \renewcommand*{\title}[1]{\bxjs@decl@subtitle\gdef\@title{#1}}
                                                                                                                                       1718 \verb|\g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\bxjs@decl@subtitle}|
                                                                                                                                       1719 \def\bxjs@decl@subtitle{%
                                                                                                                                                                      \global\let\bxjs@decl@subtitle\relax
                                                                                                                                                                    \ifx\subtitle\@undefined
                                                                                                                                       1721
                                                                                                                                        1722
                                                                                                                                                                                  \global\let\subtitle\jsSubtitle
                                                                                                                                       1723
                                                                                                                                                                  \fi}
\bxjs@annihilate@subtitle \subtitle 命令を無効化する。
                                                                                                                                                  ※独自の\subtitle が使われている場合は無効化しない。
                                                                                                                                       1724 \def\bxjs@annihilate@subtitle{%
                                                                                                                                                                      \ifx\subtitle\jsSubtitle \global\let\subtitle\relax \fi
                                                                                                                                                                 \global\let\jsSubtitle\relax}
                                                                                                 \etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル,英語の著者名,キーワード,メールアドレスです。
                                                                                            \eauthor 1727 %<*jspf>
                                                                                      \label{eq:local_local_local_local_local_local} $$ \operatorname{1728 \ensuremath{$ 1728 \ensuremath
                                                                                                                                         1729 \newcommand*{\eauthor}[1]{\gdef\@eauthor{#1}}
                                                                                                                                       1730 \ensuremath{\ensuremath{\mbox{1730 $\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\m
                                                                                                                                       1731 \newcommand*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}
                                                                                                                                       1732 \end{\{\AuthorsEmail\}[1]} \end{\{\Authorsemail} \end{\{\Authorsemail
                                                                                                                                       1733 %</jspf>
                                                 \plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ
                                                                                                                                                plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle
                                                                                                                                                 {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが
                                                                                                                                                 empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにし
                                                                                                                                                   ます。
                                                                                                                                       1734 \def\plainifnotempty{%
                                                                                                                                       1735 \ifx \@oddhead \@empty
                                                                                                                                                                                  \ifx \@oddfoot \@empty
                                                                                                                                        1736
                                                                                                                                                                                  \else
                                                                                                                                       1737
                                                                                                                                                                                              \thispagestyle{plainfoot}%
                                                                                                                                       1738
```

```
\fi
                          1739
                          1740
                                         \else
                          1741
                                               \thispagestyle{plainhead}%
                          1742
                                         \fi}
\maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large, 和
                              文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。
                                    [2016-11-16] 新設された nomag および nomag* オプションの場合をデフォルト (usemag
                              相当) に合わせるため、\smallskip を\jsc@smallskip に置き換えました。\smallskip
                               のままでは nomag(*) の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。
                          1743 %<*article|book|report|slide>
                          1744 \if@titlepage
                          1745
                                         \newcommand{\maketitle}{%
                          1746
                                               \begin{titlepage}%
                                                    \let\footnotesize\small
                          1747
                                                    \let\footnoterule\relax
                          1748
                                                    \let\footnote\thanks
                          1749
                                                    \null\vfil
                          1750
                          1751
                                                    \if@slide
                                                          {\footnotesize \@date}%
                          1752
                          1753
                                                          \begin{center}
                                                              \mbox{} \ \[1\jsZw]
                          1754
                          1755
                                                              \large
                                                              {\maybeblue\hrule height0\p0? depth2\p0?\relax}\par
                          1756
                          1757
                                                              \jsc@smallskip
                                                              \@title
                          1758
                          1759
                                                              \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                                                   \par\vskip\z@
                          1760
                                                                   {\small \bxjs@subtitle\par}
                          1761
                          1762
                                                              \jsc@smallskip
                          1763
                          1764
                                                              {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
                                                              \vfill
                          1765
                          1766
                                                              {\small \@author}%
                                                         \end{center}
                          1767
                                                    \else
                          1768
                                                    \vskip 60\p@?
                          1769
                          1770
                                                    \begin{center}%
                                                         {\LARGE \@title \par}%
                          1771
                          1772
                                                          \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                          1773
                                                              \space{1mm} \spa
                                                              {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                          1774
                                                         \fi
                          1775
                                                         \vskip 3em%
                          1776
                          1777
                                                         {\large
```

\lineskip .75em

\@author

\begin{tabular}[t]{c}%

1778

1779

1780

```
\end{tabular}\par}%
1781
1782
             \vskip 1.5em
1783
             {\large \@date \par}%
          \end{center}%
1784
1785
1786
          \par
          \@thanks\vfil\null
1787
1788
        \end{titlepage}%
        \setcounter{footnote}{0}%
1789
        \global\let\thanks\relax
1790
1791
        \global\let\maketitle\relax
        \global\let\@thanks\@empty
1792
        \global\let\@author\@empty
1793
        \global\let\@date\@empty
1794
1795
        \global\let\@title\@empty
1796
        \global\let\title\relax
        \global\let\author\relax
1797
        \global\let\date\relax
1798
1799
        \verb|\global| = \and \relax|
        \bxjs@annihilate@subtitle
1800
1801
      }%
1802 \else
1803
      \newcommand{\maketitle}{\par
1804
        \begingroup
          \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1805
1806
          \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
          \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1807
1808
             \parindent 1\jsZw\noindent
1809
             \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\jsZw}##1}%
          \if@twocolumn
1810
             \ifnum \col@number=\@ne
1811
1812
               \@maketitle
             \else
1813
1814
               \twocolumn[\@maketitle]%
             \fi
1815
1816
          \else
1817
             \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
1818
1819
             \@maketitle
1820
1821
          \plainifnotempty
1822
          \@thanks
1823
        \endgroup
        \setcounter{footnote}{0}%
1824
1825
        \global\let\thanks\relax
        \global\let\maketitle\relax
1826
1827
        \global\let\@thanks\@empty
        \global\let\@author\@empty
1828
1829
        \global\let\@date\@empty
```

```
1830
                                                 \global\let\@title\@empty
                            1831
                                                 \global\let\title\relax
                             1832
                                                 \global\let\author\relax
                                                 \global\let\date\relax
                            1833
                                                 \global\let\and\relax
                            1834
                                                \bxjs@annihilate@subtitle
                            1835
                            1836
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
                                           \def\@maketitle{%
                             1838
                                                 \newpage\null
                            1839
                                                \vskip 2em
                                                \begin{center}%
                            1840
                                                      \let\footnote\thanks
                            1841
                            1842
                                                      {\LARGE \@title \par}%
                            1843
                                                      \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                                                           \space{2.5cm} 
                            1844
                                                           {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                            1845
                            1846
                                                      \fi
                                                      \vskip 1.5em
                            1847
                            1848
                                                      {\large
                                                           \lineskip .5em
                            1849
                                                           \begin{tabular}[t]{c}{\%}
                            1850
                                                                \@author
                            1851
                                                           \end{tabular}\par}%
                            1852
                                                      \vskip 1em
                            1853
                                                      {\large \@date}%
                            1854
                            1855
                                                 \end{center}%
                             1856
                                                \par\vskip 1.5em
                            1857 %<article|slide>
                                                                                         \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
                            1858 }
                            1859 \fi
                            1860 %</article|book|report|slide>
                            1861 %<*jspf>
                            1862 \verb|\newcommand{\maketitle}{\par}
                            1863
                                           \begingroup
                                                 \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
                            1864
                                                 1865
                            1866
                                                \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
                                                      \parindent 1\jsZw\noindent
                            1867
                            1868
                                                      \label{lap(0)} $$ \sim {\mathbb \mathbb{Z}_w}\#1}% $$
                            1869
                                                      \twocolumn[\@maketitle]%
                            1870
                                                 \plainifnotempty
                                                \@thanks
                            1871
                            1872
                                           \endgroup
                                           \setcounter{footnote}{0}%
                            1873
                                           \global\let\thanks\relax
                                           \global\let\maketitle\relax
                            1875
                            1876
                                           \global\let\@thanks\@empty
```

```
1877
                           \global\let\@author\@empty
1878
                           \global\let\@date\@empty
1879 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
                           \global\let\title\relax
1880
                           \global\let\author\relax
1881
1882
                           \global\let\date\relax
                           \global\let\and\relax
1883
                           \label{lem:condition} $$  \if x \ \ \end{\cond} \ \ \ \end{\cond} $$  \ \ \end{\cond} $$  \ \ \end{\cond} $$  \ \end{\cond} $$\ \end{\cond} $$\ \ \end{\cond} $\ \ \end{\cond} $$\ \ \end{\cond} $\ \ \end{\cond} $\ \ \end{\cond} $\ \ \end{\cond} 
                                   \def\@makefntext{\advance\leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}%
1885
                                   \footnotetext[0]{\itshape\authors@mail}%
1886
 1887
                           \global\let\authors@mail\@undefined}
1888
1889 \def\@maketitle{%
                           \newpage\null
1890
                           \vskip 6em % used to be 2em
1891
 1892
                           \begin{center}
                                   \let\footnote\thanks
1893
                                   \label{large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-lar
1894
1895
                                   \lineskip .5em
                                   \ifx\@author\@undefined\else
1896
1897
                                             \vskip 1em
                                             \begin{tabular}[t]{c}%
1898
1899
                                                      \@author
                                             \end{tabular}\par
1900
                                   \fi
1901
1902
                                   \ifx\@etitle\@undefined\else
                                             \vskip 1em
1903
1904
                                             {\large \@etitle \par}%
1905
                                   \ifx\@eauthor\@undefined\else
1906
                                             \vskip 1em
1907
1908
                                             \begin{tabular}[t]{c}%
                                                      \@eauthor
1909
1910
                                             \end{tabular}\par
                                   \fi
1911
1912
                                   \vskip 1em
                                   \@date
1913
                           \end{center}
1914
1915
                           \vskip 1.5em
                           \centerline{\box\@abstractbox}
1916
1917
                           \ifx\@keywords\@undefined\else
1918
                                   \vskip 1.5em
                                   \centerline{\parbox{157\jsc@mmm}{\texttextsf{Keywords:}}\ \scite{Constraints}}
1919
                           \fi
1920
1921
                         \vskip 1.5em}
1922 %</jspf>
```

ムニャムニャ……。

\bxjs@label@sect 節付 #1 の番号を出力する。節付 XXX に対して、\labelXXX が定義済ならそれが出力書式を表す。未定義ならばカウンタの出力書式 \theXXX が使われる。

1923 \def\bxjs@label@sect#1{%

1924 \expandafter\ifx\csname label#1\endcsname\relax

1925 \csname the#1\endcsname

1926 \else \csname label#1\endcsname

1927 \fi}

 $1928 \end{area} $$1928 \end{$

\@secapp 節番号の接頭辞。

\@secpos 節番号の接尾辞。

 $1929 \verb|\finum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@@compat\else| \\$

 $1930 \ \texttt{\Qsecapp{\presectionname}}$

1931 \def\@secpos{\postsectionname}

1932 \fi

\labelsection 節番号の出力書式。

1933 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@@modern

 $1934 \ensuremath{\verb| def \abelsection{\asecapp\thesection{\asecaps}} }$

1935 \fi

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして * と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} * [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です(例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

前アキ この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

後アキ 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

* この * 印がないと,見出し番号を付け,見出し番号のカウンタに 1 を加算します。 別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6 個の引数として定義されます。 次は \@startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが \baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

```
1936 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%
1937
     \if@noskipsec \leavevmode \fi
1938
     \par
1939 % 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
1940 \@tempskipa #4\relax
1941 % \@afterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
    \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
1943 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
     \ifdim \@tempskipa <\z@
1944
       \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
1945
1946
     \if@nobreak
1947
       \everypar{\everyparhook}% これは間違い
1948 %
1949
       \everypar{}%
1950
     \else
       \addpenalty\@secpenalty
1951
1952% 次の行は削除
       \addvspace\@tempskipa
1953 %
1954%次の \noindent まで追加
1955
       \ifdim \@tempskipa >\z@
         \if@slide\else
1956
1957
           \vspace*{-\baselineskip}%
1958
1959
         \vskip\@tempskipa
1960
       \fi
1961
1962
     \fi
1963
     \noindent
1964% 追加終わり
    \@ifstar
1965
       {\c {\c 43}{\#4}{\#5}{\#6}}%
1966
1967
       {\d}^{\d}_{\d}^{\#4}_{\#5}_{\#6}}
```

\@sect と \@xsect は、前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように、多少変えてあります。\everyparhook も挿入しています。

\everyparhook の挿入は everyparhook=compat の時のみ行う。

\bxjs@if@ceph everyparhook=compat である場合にのみ直後のトークンを実行する。

```
\let\bxjs@if@ceph\@firstofone
1970 \else \let\bxjs@if@ceph\@gobble
1971 \fi
1972 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
     \ifnum #2>\c@secnumdepth
       \let\@svsec\@empty
1974
1975
     \else
       \refstepcounter{#1}%
1976
1977
       \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
1978
1979 % 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #5\relax
1981 % 条件判断の順序を入れ換えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1982
       \def\@svsechd{%
1983
         #6{\hskip #3\relax
1984
1985
         \@svsec #8}%
1986
         \csname #1mark\endcsname{#7}%
         \addcontentsline{toc}{#1}{%
1987
1988
           \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
             \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
1989
1990
           \fi
           #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
1991
1992
     \else
1993
       \begingroup
         \interlinepenalty \@M % 下から移動
1994
         #6{%
1995
           \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
1996
           \interlinepenalty \@M % 上に移動
1997 %
           #8\@@par}%
1998
1999
       \endgroup
       \csname #1mark\endcsname{#7}%
2000
2001
       \addcontentsline{toc}{#1}{%
         \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
2002
2003
           \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
2004
         #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
2005
2006
     \fi
     \0xsect{#5}}
2007
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され,それ
 以降は前者が実行されます。
   [2016-07-28] slide オプションと twocolumn オプションを同時に指定した場合の罫線の
 位置を微調整しました。
2008 \left( \frac{9}{2008} \right)
```

1968 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@@compat

2009 % 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット

```
2010
                         \@tempskipa #1\relax
                   2011 % 条件判断の順序を変えました
                         \left( \cdot \right) = \left( \cdot \right)
                           \@nobreakfalse
                   2013
                           \global\@noskipsectrue
                   2014
                           \everypar{%
                   2015
                             \if@noskipsec
                   2016
                   2017
                               \global\@noskipsecfalse
                              {\setbox\z@\lastbox}%
                   2018
                               \clubpenalty\@M
                   2019
                               \begingroup \@svsechd \endgroup
                   2020
                   2021
                               \unskip
                               \@tempskipa #1\relax
                   2022
                               \hskip -\@tempskipa
                   2023
                   2024
                   2025
                               \clubpenalty \@clubpenalty
                               \everypar\expandafter{\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
                   2026
                             \fi\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
                   2027
                   2028
                         \else
                           \par \nobreak
                   2029
                   2030
                           \vskip \@tempskipa
                           \@afterheading
                   2031
                   2032
                         \fi
                         \if@slide
                   2033
                           {\vskip\if@twocolumn-5\jsc@mpt\else-6\jsc@mpt\fi
                   2034
                            \maybeblue\hrule height0\jsc@mpt depth1\jsc@mpt
                   2035
                            \vskip\if@twocolumn 4\jsc@mpt\else 7\jsc@mpt\fi\relax}%
                   2036
                   2037
                         \fi
                   2038
                         \par % 2000-12-18
                   2039
                         \ignorespaces}
                   2040 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
                         \@tempskipa #3\relax
                   2041
                         \ifdim \@tempskipa<\z@
                   2042
                   2043
                           \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
                   2044
                         \else
                   2045
                           \begingroup
                             #4{%
                   2046
                   2047
                               \@hangfrom{\hskip #1}%
                   2048
                                 \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
                   2049
                           \endgroup
                   2050
                         \0xsect{#3}}
                   2051
                     ■柱関係の命令
      \chaptermark \...mark の形の命令を初期化します(第7節参照)。\chaptermark 以外は LATEX 本体で
      \sectionmark 定義済みです。
   \verb|\subsectionmark| 2052 \verb|\newcommand*\chaptermark[1]{}|
                   2053 % \newcommand*{\sectionmark}[1]{}
\subsubsectionmark
    \paragraphmark
                                                              75
\subparagraphmark
```

```
2055 % \newcommand*{\subsubsectionmark}[1]{}
                2056 % \newcommand*{\paragraphmark}[1]{}
                2057 % \newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
                  ■カウンタの定義
  \c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。
                2058 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}
                2059 % <book | report > \setcounter { secnumdepth } {2}
      \c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは
      \cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
   \c@subsection 2060 \newcounter{part}
 \c@subsubsection 2061 % \cook|report>\newcounter{chapter} \cook|report>\newcounter{section}[chapter]
    \verb|\c@paragraph||_{2063} \% < \verb|!book&!report>\\ \verb|\newcounter{section}||
 \c@subparagraph 2064 \newcounter{subsection} [section]
                2065 \newcounter{subsubsection} [subsection]
                2066 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                2067 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
        \thepart カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
                    カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。
     \thechapter
     \thesection
                       \arabic{COUNTER}
                                           1, 2, 3, ...
  \thesubsection
                                           i, ii, iii, ...
                       \roman{COUNTER}
\thesubsubsection
                       \Roman{COUNTER}
                                           I, II, III, ...
   \theparagraph
                                           a, b, c, ...
                       \alph{COUNTER}
 \thesubparagraph
                                            A, B, C, ...
                       \Alph{COUNTER}
                                           -, \equiv, \equiv, \dots
                       \kansuji{COUNTER}
                    以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。
                2068 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                2069 %<*!book&!report>
                2070 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@@compat
                2071 \renewcommand{\thesection}{\presectionname\@arabic\c@section\postsectionname}
                2072 \renewcommand{\thesubsection}{\Qarabic\cQsection.\Qarabic\cQsubsection}
                2073 \else
                2074 \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
                2076 \fi
                2077 %</!book&!report>
                2078 %<*book|report>
                2079 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                2080 \label{thesection} {\tt thesection} {\tt thechapter. \c @arabic \c @section} \\
                2081 \renewcommand{\the subsection} {\the section . \Qarabic \cQsubsection}
```

2054 % \newcommand*{\subsectionmark}[1]{}

```
2082 %</book|report>
         2083 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
              \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
         2085 \renewcommand{\theparagraph}{%
              \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
         2087 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
              \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
         2088
          \@chapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
  \@chapapp
            \Ochappos の初期値は \postchaptername(章)です。
  \@chappos
            \appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。
            [2003-03-02] \@secapp は外しました。
         ■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」,それ以外が「前付」「後付」です。
\frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。
            [2017-03-05] \frontmatter と \mainmatter の 2 つの命令は、改丁または改ページした
          後で \pagenumbering{...} でノンブルを1にリセットします。長い間 \pagenumbering
          openany のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に
          偶奇逆転が起こる場合がありました。openany かどうかに依らず奇数ページまで繰るように
          修正することで、問題を解消しました。実は、IATFX の標準クラスでは 1998 年に修正され
          ていた問題です(コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/03/05 も参照)。
         2091 %<*book|report>
         2092 \newcommand\frontmatter{%
         2093
             \pltx@cleartooddpage
         2094
             \@mainmatterfalse
             \pagenumbering{roman}}
\mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。
         2096 \newcommand\mainmatter{%
             \pltx@cleartooddpage
         2097
             \@mainmattertrue
         2098
             \pagenumbering{arabic}}
\backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。
         2100 \newcommand\backmatter{%
         2101
             \if@openleft
         2102
               \cleardoublepage
         2103
             \else\if@openright
               \cleardoublepage
         2104
         2105
             \else
         2106
               \clearpage
         2107
             \fi\fi
             \@mainmatterfalse}
         2108
```

2109 %</book|report>

■部

\part 新しい部を始めます。

\secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。

\secdef{星なし}{星あり}

星なし * のない形の定義です。

星あり * のある形の定義です。

\secdef は次のようにして使います。

\def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }

\def\CMDA [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義 \def\CMDB #1{....} % \chapter*{...} の定義

まず book と report のクラス以外です。

- 2110 %<*!book&!report>
- 2111 \newcommand\part{%
- 2112 \if@noskipsec \leavevmode \fi
- 2113 \par
- 2114 \addvspace{4ex}%
- 2115 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
- 2116 \secdef\@part\@spart}
- 2117 %</!book&!report>

book および report クラスの場合は、少し複雑です。

- 2118 %<*book|report>
- 2119 \newcommand\part{%
- 2120 \if@openleft
- 2121 \cleardoublepage
- 2122 \else\if@openright
- 2123 \cleardoublepage
- 2124 \else
- 2125 \clearpage
- 2126 \fi\fi
- 2127 \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
- $2128 \quad \verb|\if@twocolumn| \\$
- 2129 \onecolumn
- 2130 \@restonecoltrue
- 2131 \else
- 2132 \@restonecolfalse
- 2133 \fi
- 2134 \null\vfil
- 2135 \secdef\@part\@spart}
- 2136 %</book|report>

\@part 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。

book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付け

```
ます。
2137 %<*!book&!report>
2138 \def\@part[#1]#2{%
2139
     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
2140
        \refstepcounter{part}%
2141
        \addcontentsline{toc}{part}{%
2142
          \prepartname \the part \postpartname \hspace {1 jsZw} \#1} \%
2143
     \else
2144
        \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
2145
     \markboth{}{}%
2146
     {\parindent\z@
2147
2148
        \raggedright
        \interlinepenalty \@M
2149
        \normalfont
2150
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
2151
2152
          \verb|\Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname| \\
2153
          \par\nobreak
        \fi
2154
2155
        \huge \headfont #2%
        \markboth{}{}\par}%
2156
2157
      \nobreak
      \vskip 3ex
2158
     \@afterheading}
2160 %</!book&!report>
   book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
2161 %<*book|report>
2162 \def\@part[#1]#2{%
     \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
2163
2164
        \refstepcounter{part}%
2165
        \addcontentsline{toc}{part}{%
2166
          2167
     \else
        \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
2168
2169
      \markboth{}{}%
2170
     {\centering
2171
        \interlinepenalty \@M
2173
        \normalfont
2174
        \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
2175
          \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
          \par\vskip20\p@?
2176
2177
        \Huge \headfont #2\par}%
2178
      \@endpart}
2180 %</book|report>
```

\@spart 番号を付けない部です。

```
2181 %<*!book&!report>
2182 \def\@spart#1{{%
        \parindent \z@ \raggedright
2184
        \interlinepenalty \@M
        \normalfont
2185
        \huge \headfont #1\par}%
2186
      \nobreak
2187
2188
      \vskip 3ex
      \@afterheading}
2189
2190 %</!book&!report>
2191 %<*book|report>
2192 \def\@spart#1{{%
        \centering
        \interlinepenalty \@M
2194
2195
        \normalfont
2196
        \Huge \headfont #1\par}%
2197
      \@endpart}
2198 %</book|report>
```

\@endpart \@part と \@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加します。二段組のときには、二段組に戻します。

[2016-12-13] openany のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは \LaTeX では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されています。

```
2199 %<*book|report>
2200 \def\@endpart{\vfil\newpage
2201
      \if@twoside
       \if@openleft %% added (2017/02/24)
2202
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
2203
       \else\if@openright %% added (2016/12/13)
2204
       \null\thispagestyle{empty}\newpage
2205
2206
       \fi\fi \% added (2016/12/13, 2017/02/24)
2207
2208
      \if@restonecol
2209
        \twocolumn
     \fi}
2210
2211 %</book|report>
```

■章

\chapter 章の最初のページスタイルは、全体が empty でなければ plain にします。また、\@topnum を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。

```
2212 %<*book|report>
2213 \newcommand{\chapter}{%
2214 \if@openleft\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
2215 \plainifnotempty % 元: \thispagestyle{plain}
```

```
2218
                       \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
                 2219
                         {\@omit@numberfalse\@chapter}%
                 2220
                         {\@omit@numbertrue\@schapter}}
        \@chapter 章見出しを出力します。secnumdepth が 0 以上かつ \@mainmatter が真のとき章番号を出
                   力します。
                 2222 \def\@chapter[#1]#2{%
                 2223
                       \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                         \if@mainmatter
                 2224
                 2225
                           \refstepcounter{chapter}%
                           \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                 2226
                 2227
                           \addcontentsline{toc}{chapter}%
                              {\protect\numberline
                 2228
                             {\tilde \varphi}_{if@english\thechapter\else\@chapapp\thechapter\@chapaps\fi}\
                 2229 %
                 2230
                             {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                 2231
                             #1}%
                         \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
                 2232
                 2233
                         \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
                 2234
                 2235
                       \chaptermark{#1}%
                 2236
                       \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                 2237
                       \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                 2238
                 2239
                       \if@twocolumn
                         \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
                 2240
                 2241
                 2242
                         \mbox{\colored}
                         \@afterheading
                 2243
                 2244
                       fi
\@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。\bfseries を \headfont に変えました。
                 2245 \def\@makechapterhead#1{%
                       \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                       {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                 2247
                         \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                 2248
                 2249
                           \if@mainmatter
                              \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                 2250
                              \par\nobreak
                              \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                 2252
                 2253
                           \fi
                 2254
                         \fi
                         \interlinepenalty\@M
                 2255
                 2256
                         \Huge \headfont #1\par\nobreak
                         \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                 2257
       \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                 2258 \ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{0schapter#1}}}
```

2217

\global\@topnum\z@

```
\chaptermark{#1}%
               2259
               2260
                     \if@twocolumn
               2261
                      \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
               2262
                     \else
                      \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
               2263
                     fi
               2264
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
               2265 \ensuremath{\mbox{\sc hapterhead}\#1}\%
                     \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                     {\parindent \z@ \raggedright
               2267
               2268
                      \normalfont
               2269
                      \interlinepenalty\@M
                      \Huge \headfont #1\par\nobreak
               2270
               2271
                      \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
               2272 %</book|report>
                 ■下位レベルの見出し
        \section 欧文版では \@startsection の第4引数を負にして最初の段落の字下げを禁止しています
                 が、和文版では正にして字下げするようにしています。
                   段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。
               2273 \if@twocolumn
               2274 \newcommand{\section}{\%
               2275 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                      \@startsection{section}{1}{\z@}%
               2277 %<!kiyou>
                              \{0.6\Cvs\}\{0.4\Cvs\}\%
               2278 %<kiyou>
                             {\Cvs}{0.5\Cvs}%
               2279 %
                      {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
                      {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
               2280
               2281 \else
               2282
                    \newcommand{\section}{%
               2283
                      \if@slide\clearpage\fi
               2284
                      \@startsection{section}{1}{\z@}%
                      {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
               2285
                      {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
               2286
                       {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
               2287 %
               2288
                      {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
               2289 \fi
      \subsection 同上です。
               2290 \if@twocolumn
                     2291
                       {\z0}{\ide .4\cvs \leq \z0 \fi}%
               2292
                      {\normalfont\normalsize\headfont}}
               2293
               2294 \else
```

{\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ

2295

```
2297 {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
2298 {\normalfont\large\headfont}}
2299 \fi
```

\subsubsection [2016-07-22] slide オプション指定時に \subsubsection の文字列と罫線が重なる問題に 対処しました (forum:1982)。

2300 \if@twocolumn

2301 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%

2302 ${\z0}{\ide .4\cvs \leq \z0 \fi}$ %

2303 {\normalfont\normalsize\headfont}}

2304 \else

 $2305 \qquad \verb|\newcommand{\subsubsection}{\cite{Command{\subsubsection}}} \label{lem:command} $$ \cite{Command{\subsubsection}} $$$

2306 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%

2307 {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else \z@ \fi}%

2308 {\normalfont\normalsize\headfont}}

2309 \fi

\paragraph 見出しの後ろで改行されません。

\jsParagraphMark

[2016-11-16] 従来は \paragraph の最初に出るマークを「■」に固定していましたが、このマークを変更可能にするため \jsParagraphMark というマクロに切り出しました。これで、たとえば

\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラスでは従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から \jsParagraphMark をサポートしている。 段落のマーク (\blacksquare) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

\jsJaChar は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は \jachar と同義になるが、 それ以外は何もしない。

```
2310 \newcommand\jsParagraphMark{\relax\jsJaChar{■}}
2311 \let\bxjs@org@paragraph@mark\jsParagraphMark
2312 \ifx\bxjs@paragraph@mark\@empty
```

2313 \let\jsParagraphMark\@empty

2314 \else\ifx\bxjs@paragraph@mark\@undefined\else

 ${\tt 2315} \qquad {\tt \nog\edef\jsParagraphMark\{\noexpand\jsJaChar\{\bxjs@paragraph@mark\}\}}$

2316 \fi\fi

 $2317 \ \text{let\jsJaChar\empty}$

2318 \if@twocolumn

2320 {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ

2321 %<jspf> {\normalfont\normalsize\headfont}}

2322 %<!jspf> {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}

 $2323 \ensuremath{\setminus} else$

```
{0.5\Cvs \qplus.5\Cdp \qminus.2\Cdp}%
                                2325
                                2326
                                                   {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
                                2327 %<jspf>
                                                                    {\normalfont\normalsize\headfont}}
                                2328 %<!jspf>
                                                                      {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
                                2329 \fi
  \subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
                                2330 \if@twocolumn
                                              2331
                                                   \z0}{\left(x_0\right)_{\sc -1\jsZw\fi}}
                                2332
                                                   {\normalfont\normalsize\headfont}}
                                2333
                                2334 \else
                                              {\z0}{\ide .5\cvs \quare -1\jsZw\fi}%
                                2336
                                2337
                                                   {\normalfont\normalsize\headfont}}
                                2338 \fi
                                    8.3 リスト環境
                                         第 k レベルのリストの初期化をするのが \@listk です (k = i, ii, iii, iv)。 \@listk
                                    は \leftmargin を \leftmargink に設定します。
                                   二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが, ここでは全角幅の 2 倍にし
    \leftmargini
                                     ました。
                                         [2002-05-11] 3zw に変更しました。
                                         [2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。
                                2339 \if@slide
                                2340 \setlength\leftmargini\{1\jsZw\}
                                2341 \ensuremath{\setminus} else
                                2342
                                            \if@twocolumn
                                                   \setlength\leftmargini{2\jsZw}
                                2343
                                2344
                                            \else
                                                   \setlength\leftmargini{3\jsZw}
                                2345
                                2346
                                2347 \fi
 \leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくすること
\leftmarginiii になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。
 \verb|\label{leftmarginiv}| 2348 \verb|\label{leftm
   \begin{array}{c} \texttt{leftmarginv}^{\texttt{2040}} \\ 2350 \end{array}
                                             \setlength\leftmarginii {1\jsZw}
                                             \setlength\leftmarginiii{1\jsZw}
  \setlength\leftmarginiv {1\jsZw}
                                2352 \setlength\leftmarginv \{1\jsZw\}
                                2353 \setlength\leftmarginvi \{1\jsZw\}
                                2354 \else
                                            \setlength\leftmarginii {2\jsZw}
                                2355
```

\setlength\leftmarginiii{2\jsZw}

```
2357 \setlength\leftmarginiv {2\jsZw}
2358 \setlength\leftmarginv {1\jsZw}
2359 \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
2360 \fi
\labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分
\labelwidth に変えました。
2361 \setlength \labelsep {0.5\jsZw} % .5em
2362 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
2363 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}
```

\partopsep リスト環境の前に空行がある場合, \parskip と \topsep に \partopsep を加えた値だけ 縦方向の空白ができます。0 に改変しました。

2364 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}

\@beginparpenalty リストや段落環境の前後、リスト項目間に挿入されるペナルティです。

```
\@endparpenalty 2365 \@beginparpenalty -\@lowpenalty \\@itempenalty 2366 \@endparpenalty -\@lowpenalty \\ 2367 \@itempenalty -\@lowpenalty
```

\@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます (たとえば \small の中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せるように、\@listI で \@listi のコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここでは簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてあります。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ最初と最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。

[2004-09-27] \topsep のグルー $^{+0.2}_{-0.1}$ \baselineskip を思い切って外しました。

```
2368 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
2369 \parsep \z@
2370 \topsep 0.5\baselineskip
2371 \itemsep \z@ \relax}
```

2372 \let\@listI\@listi

念のためパラメータを初期化します (実際には不要のようです)。

2373 \@listi

```
\@listii 第 2~6 レベルのリスト環境のパラメータの設定です。
```

```
\@listiii 2374 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
```

2376 \topsep \z@

 $\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\verb{\coloredge}}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\coloredge}\ensuremath}\ensurema$

\@listvi 2378 \itemsep\parsep}

2379 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii

2380 \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep

2381 \topsep \z@

2382 \parsep \z@

```
2383
      \itemsep\parsep}
2384 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
                  \labelwidth\leftmarginiv
                  \advance\labelwidth-\labelsep}
2386
2387 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
2388
                  \labelwidth\leftmarginv
                   \advance\labelwidth-\labelsep}
2389
2390 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
                  \labelwidth\leftmarginvi
2391
2392
                   \advance\labelwidth-\labelsep}
```

■enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumii, enumiv を使います。n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは LATEX 本体(ltlists.dtx 参照)で定義済み \theenumii ですが、ここでは表し方を変えています。\@arabic、\@alph、\@roman、\@Alph はそれぞ \theenumiii 和算用数字、小文字アルファベット、小文字ローマ数字、大文字アルファベットで番号を出 \theenumiv 力する命令です。

```
2393 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}
2394 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}
2395 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
2396 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
```

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付 \labelenumii きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に \labelenumiii 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。

\labelenumiv

和文の括弧で囲むための補助命令 \jsInJaParen を定義して \labelenumii でそれを用いている。

※現状の zxjatype の \inhibitglue の実装には「前後のグルーを消してしまう」という不備があって、そのため enumii の出力が異常になるという不具合があった。zxjatype を修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫(\bxjs@dust)でガードしておく。

```
2397 \def\bxjs@dust{\vrule\@width\z@\@height\z@\@depth\z@}
2398 \newcommand*{\jsInJaParen}[1]{%
2399 \bxjs@dust\jsInhibitGlue (#1) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}
2400 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
2401 \newcommand{\labelenumii}{\jsInJaParen}\theenumii}}
2402 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
2403 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
\p@enumii \p@enumn は \ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書
\p@enumiii 式です。これも第 2 レベルは和文用かっこにしました。
\p@enumiv 2404 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
2405 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii )}
2406 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

■itemize 環境

 \labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。

 $\verb|\labelitemii| 2407 \verb|\newcommand| labelitemi{ textbullet}|$

 $\verb|\label| 1408 \end{label} litemii{\end{hormal}} abelitemii{\end{hormal}}$

2409 \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered}

 $\verb|\labelitemiv|_{2410} \verb|\labelitemiv{\texttextperiodcentered}|$

■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

- 2411 \newenvironment{description}{%
- 2412 \list{}{%
- 2413 \labelwidth=\leftmargin
- 2414 \labelsep=1\jsZw
- 2415 \advance \labelwidth by -\labelsep
- 2416 \let \makelabel=\descriptionlabel\}{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\jsZw}) を入れるのもいいと思います。

2417 \newcommand*\descriptionlabel[1]{\normalfont \headfont #1\hfil}

■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは, 独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので, list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

bxjsreport クラスの abstract 環境は:

- layout=v1 の場合は jsbook + report の動作を継承する。 つまり jsbook と同じに なる。
- layout=v2 の場合は新設の jsreport の動作を継承する。つまり jsarticle (+titlapage) と同じになる。

chapterabstract jsbook の abstract 環境 (「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの)を chapterabstract と呼ぶことにする。

2418 %<*book|report>

2419 \newenvironment{chapterabstract}{\%}

 $2420 \quad \texttt{\begin{list}{}}{\%}$

2421 $\label{listparindent=1} sZw$

 $2422 \hspace{0.2in} \verb|\itemindent=| list parindent|$

```
\rightmargin=0pt
2423
        \leftmargin=5\jsZw}\item[]}{\end{list}\vspace{\baselineskip}}
2424
2425 %</book|report>
   "普通の" abstract 環境の定義。
2426 %<*article|report|slide>
2427 \newbox\@abstractbox
2428 \setminus if@titlepage
     \newenvironment{abstract}{%
2429
        \titlepage
2430
2431
        \null\vfil
        \@beginparpenalty\@lowpenalty
2432
2433
        \begin{center}%
          \headfont \abstractname
2434
2435
          \@endparpenalty\@M
2436
        \end{center}%
 BXJS クラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。
2437
        \par}%
2438
      {\par\vfil\null\endtitlepage}
2439 \else
     \newenvironment{abstract}{%
2440
        \if@twocolumn
2441
          \ifx\maketitle\relax
2442
2443
            \section*{\abstractname}%
          \else
2444
            \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2445
2446
            \begin{minipage}[b]{\textwidth}
              \small\parindent1\jsZw
2447
2448
              \begin{center}%
                {\mbox{\normalfont \abstractname\vspace}-.5em}\vspace{\z0}}%
2449
              \end{center}%
2450
              \left\{ \right\} 
                \listparindent\parindent
2452
                \itemindent \listparindent
2453
                \rightmargin \leftmargin}%
2454
2455
              \item\relax
2456
          \fi
        \else
2457
2458
2459
          \begin{center}%
2460
            2461
          \end{center}%
          \left\{ \right\} 
2462
2463
            \listparindent\parindent
2464
            \itemindent \listparindent
2465
            \rightmargin \leftmargin}%
2466
          \item\relax
        \fi}{\if@twocolumn
2467
```

```
\ifx\maketitle\relax
2468
2469
2470
           \endlist\end{minipage}\egroup
2471
         \fi
       \else
2472
         \endlist
2473
2474
       \fi}
2475 \fi
2476 %</article|report|slide>
2477 %<*jspf>
2478 \newbox\@abstractbox
2479 \newenvironment{abstract}{\%
     \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
     2481
2482
       \if@english \parindent6\jsc@mmm \else \parindent1\jsZw \fi}%
2483
2484 \quad {\end{minipage} \setminus egroup}
2485 %</jspf>
   bxjs@force@chapterabstract が真の場合は、abstract 環境を chapterabstract 環境と
 等価にする。
2486 %<*book|report>
2487 \verb|\colored] chapter abstract
     \let\abstract\chapterabstract
2489
     \let\endabstract\endchapterabstract
2490 \fi
2491 %</book|report>
 ■キーワード
```

keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。

```
2492 %<*jspf>
2493 %\newbox\@keywordsbox
2494 %\newenvironment{keywords}{%
2495 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
2496 % \begin{minipage}[b]{1570\jsc@mmm}{\sffamily Keywords:}\par
2497 % \small\parindent0\jsZw}%
2498 % {\end{minipage}\egroup}
2499 %</jspf>
```

■verse 環境

verse 詩のための verse 環境です。
2500 \newenvironment{verse}{%
2501 \let \\=\@centercr
2502 \list{}{%
2503 \itemsep \z@

```
2504 \itemindent -2\jsZw % 元: -1.5em
```

2505 \listparindent\itemindent

2506 \rightmargin \z@

2507 \advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em

2508 \item\relax}{\endlist}

■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を $1.5 \mathrm{em}$ から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

```
2509 \newenvironment{quotation}{%
```

- 2510 \list{}{%
- 2511 \listparindent\parindent
- 2512 \itemindent\listparindent
- 2513 \rightmargin \z0}%
- 2514 \item\relax}{\endlist}

■quote 環境

quote quote 環境は、段落がインデントされないことを除き、quotation 環境と同じです。

```
2515 \newenvironment{quote}%
```

2516 ${\left\langle x\right\rangle }= {\left\langle x\right\rangle }$

■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

```
\newtheorem{definition}{定義}
\newtheorem{axiom}{公理}
\newtheorem{theorem}{定理}
```

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、 $\$ な削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し、 \labelsep を 1 zw にし、括弧を全角にしました。

```
2517 \def\@begintheorem#1#2{\trivlist\labelsep=1\jsZw
```

 $2518 \qquad \texttt{\labelsep{\headfont #1\ #2}]}$

 $2519 \verb|\def|@opargbegintheorem#1#2#3{\trivlist\labelsep=1\jsZw|} \\$

2520 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2 (#3) }]}

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,book クラス でタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても,横組クラスしかありませんでしたので,従来の挙動は何も変わっていません。また,book 以外の場合のページ番号の リセットもコミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが,こちらも 片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので,従来の挙動は 何も変わらずに済みました。

2521 \newenvironment{titlepage}{%

```
2523
                \if@twocolumn
         2524
                  \@restonecoltrue\onecolumn
         2525
                 \else
                  \@restonecolfalse\newpage
         2526
                 \fi
         2527
                 \thispagestyle{empty}%
         2528
         2529
                 \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017-02-
            24
         2530
              }%
              {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
         2531
                 \if@twoside\else
         2532
                  \setcounter{page}\@ne
         2533
                fi
         2534
          ■付録
\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。
         2535 %<*!book&!report>
         2536 \newcommand{\appendix}{\par
         2537
              \setcounter{section}{0}%
              \setcounter{subsection}{0}%
         2538
         2539
              \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@@compat
              \gdef\presectionname{\appendixname}%
              \gdef\postsectionname{}%
         2541
         2542 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]
              \gdef\thesection{\presectionname\@Alph\c@section\postsectionname}%
              2544
         2545
              \gdef\@secapp{\appendixname}%
         2546
              \gdef\@secpos{}%
         2547
         2548
              \gdef\thesection{\@Alph\c@section}%
              \fi}
         2549
         2550 %</!book&!report>
         2551 %<*book|report>
         2552 \mbox{ \newcommand{\appendix}{\par}}
              \setcounter{chapter}{0}%
         2553
         2554
              \setcounter{section}{0}%
         2555
              \gdef\@chapapp{\appendixname}%
              \gdef\@chappos{}%
              \gdef\thechapter{\@Alph\c@chapter}}
         2558 %</book|report>
```

\pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24

8.4 パラメータの設定

■array と tabular 環境

2522 %<book>

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。

2559 \setlength\arraycolsep{5\p@?}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。
2560 \setlength\tabcolsep{6\p0?}

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

2561 \setlength\arrayrulewidth{.4\p0}

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 2562 \setlength\doublerulesep{2\p0}

■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

 $2563 \stlength \tabbingsep{\labelsep}$

■minipage 環境

| Compfootins minipage 環境の脚注の \skip\Compfootins は通常のページの \skip\footins と同じ働きをします。

 $2564 \skip\0mpfootins = \skip\footins$

■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

2565 \setlength\fboxsep{3\p@?}

 $2566 \verb|\setlength\fboxrule{.4\p0}|$

■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

2568 %<*book|report>

 $2569 \ensuremath{\texttt{Qaddtoreset}}\ensuremath{\texttt{equation}}\ensuremath{\texttt{chapter}}$

 $2570 \mbox{ \lower}$

2571 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}

2572 %</book|report>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

2573 % \setlength\jot{3pt}

\Ceqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\jsInhibitGlue(\theequation)\jsInhibitGlueのように和文かっこを使うことも可能です。

2574 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

```
amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。
2575 % \def\tagform@#1{\maketag@@@{(\ignorespaces#1\unskip\@@italiccorr)}}
```

8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置 (float placement specifier) です。

\ftype@TYPE フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...) でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

\@makecaption $\langle num \rangle \langle text \rangle$ キャプションを出力するマクロです。 $\langle num \rangle$ は \fnum@... の生成する番号, $\langle text \rangle$ はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

■figure 環境

```
\c@figure 図番号のカウンタです。
```

\thefigure 図番号を出力するコマンドです。

2576 %<*!book&!report>

2577 \newcounter{figure}

2578 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}

2579 %</!book&!report>

2580 %<*book|report>

2581 \newcounter{figure}[chapter]

2582 \renewcommand \thefigure

2583 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}

2584 %</book|report>

\fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが、ここでは外し\ftype@figure ました。

\ext@figure 2585 \def\fps@figure{tbp}

 $\label{eq:continuous_series} $$ \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{1} \left(\int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{1} dt \right) dt = 0. $$$

2587 \def\ext@figure{lof}

2588 \def\fnum@figure{\figurename\nobreak\thefigure}

figure *形式は段抜きのフロートです。

 $\verb|figure*2589 \land ewenvironment{figure}%|$

2590 {\@float{figure}}%

2591 {\end@float}

2592 \newenvironment{figure*}%

2593 {\@dblfloat{figure}}%

2594 {\end@dblfloat}

■table 環境

```
\c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が \thetable \thechapter{}・になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。
```

```
2595 %<*!book&!report>
2596 \newcounter{table}
2597 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
2598 %</!book&!report>
2599 %<*book|report>
2600 \newcounter{table}[chapter]
2601 \renewcommand \thetable
2602 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
2603 %</book|report>
```

\fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが、ここでは外しま\ftype@table した。

table * は段抜きのフロートです。

```
table * 2608 \newenvironment{table}%
```

2609 {\@float{table}}%
2610 {\end@float}
2611 \newenvironment{table*}%
2612 {\@dblfloat{table}}%

2613 {\@dblfloat{table}}

8.6 キャプション

\@makecaption \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。\belowcaptionskip が 0 になっ \belowcaptionskip ていましたので、キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしま うのを直しました。

```
2614 \newlength\abovecaptionskip 2615 \newlength\belowcaptionskip 2616 \setlength\abovecaptionskip{5\p@?} % 元: 10\p@ 2617 \setlength\belowcaptionskip{5\p@?} % 元: 0\p@
```

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2 cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

```
2618 %<*!jspf>
```

2619 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small}

2620 % \advance\leftskip10\jsc@mmm

```
\advance\rightskip10\jsc@mmm
2621 %
2622 %
        \vskip\abovecaptionskip
2623 %
        \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\jsZw\relax #2}%
2624 %
        \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2625 %
           #1\hskip1\jsZw\relax #2\par
        \else
2626 %
           \global \@minipagefalse
2627 %
2628 %
           \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2629 %
        \fi
        \vskip\belowcaptionskip}}
2630 %
2631 \ensuremath{\tt long\def\@makecaption\#1\#2\{\{\small\ensuremath{\tt makecaption\#1\#2}\}\} \label{thm:long}
      \advance\leftskip .0628\linewidth
2632
      \advance\rightskip .0628\linewidth
2633
      \vskip\abovecaptionskip
2634
2635
      \sbox\@tempboxa{#1\zwspace#2}%
      \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi
      #1\zwspace#2\par
2637
      \vskip\belowcaptionskip}}
2639 %</!jspf>
2640 %<*jspf>
2641 \long\def\@makecaption#1#2{%
      \vskip\abovecaptionskip
      \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
2643
      \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
2644
        {\small\sffamily
2645
           \list{#1}{%
2646
             \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
2647
2648
             \itemsep
                           \z0
2649
             \itemindent \z@
2650
             \labelsep
                          \z@
             \labelwidth 11\jsc@mmm
2651
2652
             \listparindent\z0
             \leftmargin 11\jsc@mmm}\item\relax #2\endlist}
2653
2654
      \else
        \global \@minipagefalse
2655
        \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2656
2657
      \vskip\belowcaptionskip}
2659 %</jspf>
```

9 フォントコマンド

ここでは \LaTeX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので,できるだけ \text... と \math... を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の \scr@DeclareOldFontCommand に倣い、これらの命令を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さないようにするスイッチも付けます。

\if@jsc@warnoldfontcmd \if@jsc@warnoldfontcmd はBXJS クラスでは不使用。 f@jsc@warnoldfontcmdexception \if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態 を表す。 2660 \newif\if@jsc@warnoldfontcmd 2661 \@jsc@warnoldfontcmdtrue 2662 \newif\if@jsc@warnoldfontcmdexception \jsc@DeclareOldFontCommand 2664 \newcommand*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{% \g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}% 2665 2666 \DeclareOldFontCommand{#1}{% 2667 \bxjs@oldfontcmd{#1}#2% }{% 2668 2669 \bxjs@oldfontcmd{#1}#3% 2670 }% 2671 } 2672 \DeclareRobustCommand* ${\sc Qwarnoldfontcmd}[1]{\%}$ \ClassInfo\bxjs@clsname {Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak 2674 2675The first occurrence is}% 2676 } "二文字フォント命令"の使用を許可する(警告しない)。 \allowoldfontcommands \disallowoldfontcommands "二文字フォント命令"の使用に対して警告を出す。 2677 \newcommand*{\allowoldfontcommands}{% \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue} 2679 \newcommand*{\disallowoldfontcommands}{%\@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse} 2681 \let\bxjs@oldfontcmd@list\@empty 2682 \def\bxjs@oldfontcmd#1{% \expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1} $2684 \def\bxjs@oldfontcmd@a#1#2{%}$ \if@jsc@warnoldfontcmdexception\else 2685 \global\@jsc@warnoldfontcmdfalse 2686 2687 $\int x#1\relax$ $\left| \frac{1}{t} \right|$ 2688

\jsc@warnoldfontcmd{#2}%

\fi

\fi}

```
2692 \def\bxjs@warnoldfontcmd@final{%
       2693 % \par
                 \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
                 \let\@tempa\@empty
       2695
       2696
                  \def\do##1{%
                     \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
       2697
                         \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
       2698
       2699
                  \bxjs@oldfontcmd@list
                 \ifx\@tempa\@empty\else
       2700
       2701
                     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
       2702
                       {Some old font commands were used in text:\MessageBreak
       2703
                         \space\@tempa\MessageBreak
                         You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak
       2704
                         new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak
       2705
       2706
                         new, combinable font commands. The
       2707
                         class provides\MessageBreak
                         the old font commands only for compatibility}
       2708
       2709
                 \fi}
          単純に \AtEndDocument のフックの中で \bxjs@warnoldfontcmd@final を実行した場
          合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行される
          ため捕捉できない。これに対処するため、\end{document} 中に実行される \clearpage の
          処理の直後に \bxjs....final が呼ばれるようにする。
       2710 \def\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%
                 \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}
       2712 \AtEndDocument{\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}
 \mc フォントファミリを変更します。
 \gt 2713 \jsc@DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}
 \label{localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localized-localiz
       2715 \jsc@DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
 \tt 2717 \jsc@DeclareOldFontCommand{\tt}{\normalfont\ttfamily}{\mathtt}
 \bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries
          です。
       \it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま
 \sl せん(警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape
 \sc です。
       2719 \verb|\jsc@DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mbox{\mbox{$\setminus$}}} 
       2720 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\@nomath\sl}
       2721 \jsc@DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\@nomath\sc}
\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。
```

\mit

 $2722 \end{area} \end{area}$

10 相互参照

10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合,上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \l0... というコマンドを実行するので, あらかじめ \l0chapter, \l0section, \l0figure などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \0dottedtocline コマンドを使って定義します。これは

\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\@pnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

\Otocrmarg 右マージンです。\Otocrmarg \geq \Opnumwidth とします。

\@dotsep 点の間隔です (単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが,ここでは一つずつ減らしています。

 $2724 \newcommand \pnumwidth{1.55em}$

2725 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}

2726 \newcommand\@dotsep{4.5}

2727 %<!book&!report>\setcounter{tocdepth}{2}

2728 % <book | report > \setcounter { tocdepth } { 1 }

■目次

2770

\nobreak

```
\tableofcontents 目次を生成します。
  \jsc@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)
                                                2729 \newdimen\jsc@tocl@width
                                                2730 \newcommand{\tableofcontents}{%
                                                2731 %<*book|report>
                                                2732
                                                                  \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}%
                                                                  \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
                                                                 2734
                                                                 \label{limiting} $$ \left( \frac{1}{jsC} \cdot \frac{1}{jsC} \right) = 2 \cdot \frac{1}{jsC} 
                                                2735
                                                2736
                                                                 \if@twocolumn
                                                                       \@restonecoltrue\onecolumn
                                                2737
                                                2738
                                                                       \@restonecolfalse
                                                2739
                                                2740
                                                2741
                                                                 \chapter*{\contentsname}%
                                                                 \@mkboth{\contentsname}{}%
                                                2743 %</book|report>
                                                2744 %<*!book&!report>
                                                2745
                                                                 \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%
                                                                  \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
                                                                 \ifdim\jsc@tocl@width\\@tempdima\relax\setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
                                                2747
                                                               \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
                                                2748
                                                2749
                                                                 \section*{\contentsname}%
                                                               \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
                                                2750
                                                2751 %</!book&!report>
                                                2752 \@starttoc{toc}%
                                                2753 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
                                                2754 }
                          \1@part 部の目次です。
                                                2755 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                                                               \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
                                                2757 %<!book&!report>
                                                                                                                       \addpenalty\@secpenalty
                                                2758 % < book | report >
                                                                                                                  \addpenalty{-\@highpenalty}%
                                                                        \addvspace{2.25em \@plus\p@?}%
                                                2759
                                                2760
                                                                        \begingroup
                                                2761
                                                                              \parindent \z@
                                                2762 %
                                                                              \@pnumwidth should be \@tocrmarg
                                                2763 %
                                                                              \rightskip \@pnumwidth
                                                2764
                                                                              \rightskip \@tocrmarg
                                                                             \parfillskip -\rightskip
                                                2765
                                                                              {\leavevmode
                                                2766
                                                                                    \large \headfont
                                                2767
                                                                                     \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
                                                2768
                                                                                    #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
                                                2769
```

```
\global\@nobreaktrue
          2771 % <book | report>
          2772 %<book|report>
                               \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
          2773
                 \endgroup
          2774
               \fi}
\lochapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。
             [2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by
           ts)
          2775 %<*book|report>
          2776 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
               \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
                 \addpenalty{-\@highpenalty}%
          2778
                 \addvspace{1.0em \@plus\p@?}
          2779
                 \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
          2780 %
          2781
                 \begingroup
          2782
                   \parindent\z@
                   \rightskip\@pnumwidth
          2783 %
          2784
                   \rightskip\@tocrmarg
                   \parfillskip-\rightskip
          2785
                   \leavevmode\headfont
          2786
                   \% \in \mathbb{1}_{0.5}
          2787 %
          2788
                   \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2.683\jsZw
                   \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
          2789
          2790
                   #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
                   \penalty\@highpenalty
          2791
          2792
                 \endgroup
          2793
               fi
          2794 %</book|report>
\l0section 節の目次です。
          2795 %<*!book&!report>
          2796 \newcommand*{\l@section}[2]{\%
          2797
               \ifnum \c@tocdepth >\z@
          2798
                 \addpenalty{\@secpenalty}%
          2799
                 \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
                 \begingroup
          2800
          2801
                   \parindent\z@
                   \rightskip\@pnumwidth
          2802 %
                   \rightskip\@tocrmarg
          2803
                   \parfillskip-\rightskip
          2804
                   \leavevmode\headfont
          2805
                   % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
          2806 %
                   \verb|\cline{Clnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth{\2\jsZw.}|}
          2807
          2808
                   \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
          2809
                   #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
          2810
                 \endgroup
               fi
          2811
          2812 %</!book&!report>
```

```
インデントと幅はそれぞれ 1.5em, 2.3em でしたが、1zw, 3.683zw に変えました。
                            2813 % \ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensurema
                                   [2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
                              さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので、要修正かも
     \1@subsection
                                しれません。
\1@subsubsection
                                   [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
       \1@paragraph
 \verb|\label{loss} $$\loss 2814 \%<*!book&!report>|
                            2815 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                             {\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.3em}}
                            2816 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
                            2817 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                             {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
                            2818 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
                            2819 %
                            2820 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                             {\@dottedtocline{2}{1zw}{3zw}}
                            2821 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\jsZw}{3\jsZw}}
                                                                                             {\@dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}
                            2822 % \newcommand*{\l@paragraph}
                            2823 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
                            2824 %
                            2825 \newcommand*{\l@subsection}{%
                            2826
                                                     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                                                     \cline{2}{\cline{3\jsZw}}
                            2827
                            2828 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                                     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
                            2829
                                                     \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\jsZw}}
                            2830
                            2831 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                                     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
                            2832
                                                     \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5\jsZw}}
                            2833
                            2834 \newcommand*{\losubparagraph}{%}
                                                     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2\jsZw
                            2835
                                                     \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
                            2837 %</!book&!report>
                            2838 %<*book|report>
                            2839 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                             {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
                            2840 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
                            2841 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                             {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
                            2842 % \newcommand*{\l0subparagraph} {\0dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                            2843 \newcommand*{\l@section}{%
                                                     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                            2844
                                                     \cline{1}{\cline{3.683\jsZw}}
                            2845
                            2846 \newcommand*{\l@subsection}{%
                            2847
                                                     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
                                                     \cline{2}{\cline{2}}{\cline{3.5\jsZw}}
                            2848
                            2849 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                            2850
                                                     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\jsZw
                                                     \dot{0}
                            2851
                            2852 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                                     \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\jsZw
                            2853
```

\@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5.5\jsZw}}

```
2855 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                             2856
                                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw
                             2857
                                                        \cline{5}{\cline{5}}{\cline{5}}
                             2858 %</book|report>
       | \numberline | 欧文版 LaTeX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
       \@lnumwidth すが,アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
                                に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
                                 入れておきました。
                             2859 \mbox{ newdimen}\mbox{@lnumwidth}
                             2860 \end{area} $$2860 \end{
\@dottedtocline IATFX 本体 (ltsect.dtx 参照) での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
         \jsTocLine 変えています。
                                    これを変更可能にするため、\jsTocLineというマクロに切り出しました。例えば、仮想
                                 ボディの中央・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ に変更したい場合は
                                     \label{leaders \hbox {\hss}\hfill} $$\operatorname{\hsm} \hfill} $$
                                 とします。
                             2861 \def\jsTocLine{\leaders\hbox{%
                             2862 \ \m0th \mkern \0dotsep mu\hbox{.}\mkern \0dotsep mu$}\hfill}
                             2863 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                        \vskip \z@ \@plus.2\p@?
                                        {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                             2865
                                            \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                             2866
                                          \interlinepenalty\@M
                             2867
                             2868
                                           \leavevmode
                             2869
                                          \@lnumwidth #3\relax
                                           \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                             2870
                             2871
                             2872
                                           \jsTocLine \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
                                                       \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                             2873
                                 ■図目次と表目次
 \listoffigures 図目次を出力します。
                             2874 \newcommand{\listoffigures}{%
                             2875 %<*book|report>
                             2876 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                             2877 \else\@restonecolfalse\fi
                                        \chapter*{\listfigurename}%
                             2879 \@mkboth{\listfigurename}{}%
                             2880 %</book|report>
                             2881 %<*!book&!report>
                             2882 \section*{\listfigurename}%
```

2883 \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%

```
2884 %</!book&!report>
             2885 \@starttoc{lof}%
             2886 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
             2887 }
     \l@figure 図目次の項目を出力します。
             2888 \newcommand*{\l0figure}{\0dottedtocline{1}{1\jsZw}{3.683\jsZw}}
 \listoftables 表目次を出力します。
             2889 \newcommand{\listoftables}{%
             2890 %<*book|report>
             2891 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
             2892 \else\@restonecolfalse\fi
             2893 \chapter*{\listtablename}%
             2894
                  \@mkboth{\listtablename}{}%
             2895 %</book|report>
             2896 %<*!book&!report>
             2897 \section*{\listtablename}%
             2899 %</!book&!report>
             2900 \@starttoc{lot}%
             2901 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
             2902 }
      \1@table 表目次は図目次と同じです。
             2903 \let\l@table\l@figure
              10.2 参考文献
    \bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。
             2904 \newdimen\bibindent
             2905 \setlength\bibindent{2\jsZw}
thebibliography 参考文献リストを出力します。
                [2016-07-16] LATFX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を, 文献スタイル (.bst)
               ではよく \bf がいまだに用いられることが多いため、thebibliography 環境内では例外的
               に出さないようにしました。
             2906 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
                  \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue
                  \global\let\presectionname\relax
             2908
                  \global\let\postsectionname\relax
             2910 % \article|slide> \section*{\refname}(\mboth{\refname}, \column{condition*}) }
             2911 %<*kiyou>
```

2913 \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}%

2912 \vspace{1.5\baselineskip}

2914 \vspace{0.5\baselineskip}

2915 %</kiyou>

```
2916 % \chapter *{\bibname}\@mkboth{\bibname}{}%
            2917 % <book | report > \addcontentsline \toc \{ chapter \} \\ bibname \} %
                  \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
            2919
                       {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
            2920
                        \leftmargin\labelwidth
                       \advance\leftmargin\labelsep
            2921
                       \@openbib@code
            2922
            2923
                       \usecounter{enumiv}%
                       \let\p@enumiv\@empty
            2924
                       \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
            2925
            2926 %<kiyou>
                         \small
            2927
                  \sloppy
                  \clubpenalty4000
            2928
                  \@clubpenalty\clubpenalty
            2929
            2930
                  \widowpenalty4000%
            2931
                  \sfcode`\.\@m}
            2932
                 {\def\@noitemerr
            2933
                   {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
            2934
                  \endlist}
    \newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。
            2935 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}
\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによっ
              て変更されます。
            2936 \let\@openbib@code\@empty
   \@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 [] を全角 [] に変え, 余
             分なスペースが入らないように \jsInhibitGlue ではさみました。とりあえずコメントア
              ウトしておきますので,必要に応じて生かしてください。
            2937 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}
       \cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが, コンマとかっこを和文
      \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので、必
      \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \jsInhibitGlue で取ってい
              ますので、オリジナル同様、Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。
            2938 % \def\@citex[#1]#2{\leavevmode
            2939 %
                   \let\@citea\@empty
            2940 %
                   2941 %
                     {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
            2942 %
                      \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
            2943 %
                      \ifOfilesw\immediate\write\Cauxout{\string\citation{\Cciteb}}\fi
                      \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
            2944 %
            2945 %
                       \G@refundefinedtrue
            2946 %
                       \@latex@warning
            2947 %
                         {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
                       {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}}{#1}}
            2948 %
            2949 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \jsInhibitGlue}
```

引用番号を上ツキの 1) のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に \unskip を付けて先行のスペース (~ も)を帳消しにしています。

10.3 索引

theindex $2\sim3$ 段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

```
2954 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境
        \if@twocolumn
2955
2956
          \onecolumn\@restonecolfalse
2957
        \else
          \clearpage\@restonecoltrue
2958
2959
2960
        \columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw
        \ifx\multicols\@undefined
2962 % <book | report >
                         \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
                         \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2963 %<book|report>
2964 %<!book&!report>
                           \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
                           \twocolumn[\section*{\indexname}]%
2965 %<!book&!report>
2966
2967
          \ifdim\textwidth<\fullwidth
            \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
2968
2969
            \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
2970
            \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
2971 %<book|report>
                           \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
2972 % < book | report >
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2973 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2974 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
2975
          \else
2976 %<book|report>
                           \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
2977 % < book | report >
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2978 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2979 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
2980
          \fi
2981
        \fi
2982 % <book | report >
                       \@mkboth{\indexname}{}%
2983 %<!book&!report>
                         \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
        \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
2984
        \parindent\z@
2985
        \parskip\z@ \@plus .3\p@?\relax
2986
2987
        \let\item\@idxitem
2988
        \raggedright
        \footnotesize\narrowbaselines
2989
```

```
2990
     }{
2991
        \ifx\multicols\@undefined
2992
          \if@restonecol\onecolumn\fi
        \else
2993
          \end{multicols}
2994
2995
        \fi
2996
        \clearpage
2997
     }
```

\@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。

\subitem 2998 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % 元 40pt \subsubitem $^{2999} \mbox{ newcommand{\subitem}{\didxitem \hspace*{2\jsZw}} % <math display="inline">\vec{\pi}^{2} \mbox{ 20pt}$ 3000 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\jsZw}} % 元 30pt

\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。

 $3001 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@? \eqnus5\p@? \eqnus3\p@?\relax}$

\seename 索引の\see,\seealso コマンドで出力されるものです。デフォルトはそれぞれ see, see also \alsoname という英語ですが、ここではとりあえず両方とも「→」に変えました。⇒ (\$\Rightarrow\$) などでもいいでしょう。

> 3002 \newcommand\seename{\if@english see\else \rightarrow \fi} 3003 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else \rightarrow \fi}

10.4 脚注

\footnote 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため, \footnotemark \inhibitglue を入れることにします。pLATFX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は, このパッチが不要なのであてません。

> パッチの必要性は「\pltx@foot@penalty が未定義か」で行う。\inhibitglue の代わ りに \jsInhibitGlue を使う。

```
3004 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined
     \let\footnotes@ve=\footnote
     \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}
     \let\footnotemarks@ve=\footnotemark
     \def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve}
3008
3009 \fi
```

\@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 * を付けています。「注 1」の形式に するには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenext と合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい pTpX では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐた め、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました (Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 pIATeX の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。pIATeX の日付が2016/04/17より新しい場合は、このパッチが不要なのであてません。

pTFX 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

\thefootnote 脚注番号に*印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは*印も脚注番号も付 きません。

> [2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しま した。

> [2016-10-08] TODO: 脚注番号が newtxtext や newpxtext の使用時におかしくなってし まいます。これらのパッケージは内部で \thefootnote を再定義していますので、気になる 場合はパッケージを読み込むときに defaultsups オプションを付けてください (qa:57284, qa:57287).

 $3010 \end{10} \end{10} $$3010 \end{10} arabic\end{10} arabic\end$ 「注 1」の形式にするには次のようにしてください。

3011 % \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@ 注\kern0.1\jsZw\@arabic\c@footnote\fi}

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

3012 \renewcommand{\footnoterule}{%

3013 \kern-2.6\p0? \kern-.4\p0

3014 \hrule width .4\columnwidth

3015 \kern 2.6\p@?}

\c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。

3016 %<book|report>\@addtoreset{footnote}{chapter}

\@footnotetext 脚注で \verb が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, TeX and TUG NEWS, Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

> [2016-08-25] コミュニティ版 pLATFX の「閉じ括弧類の直後に\footnotetext が続く場 合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。

[2016-09-08] コミュニティ版 pIAT_EX のバグ修正に追随しました。

[2016-11-29] 古い pIATFX で使用された場合を考慮してコードを改良。

[2018-03-11] \next などいくつかの内部命令を \jsc@... 付きのユニークな名前にしま した。

3017 \long\def\@footnotetext{%

\insert\footins\bgroup 3018

3019 \normalfont\footnotesize

3020 \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty

\splittopskip\footnotesep 3021

\splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM 3022

\hsize\columnwidth \@parboxrestore 3023

3024 \protected@edef\@currentlabel{%

```
3025
                                                \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
3026
                                   }%
3027
                                   \color@begingroup
                                            \@makefntext{%
3028
                                                      \rule\z@\footnotesep\ignorespaces}%
3029
                                            \futurelet\jsc@next\jsc@fo@t}
3030
3031 \ensuremath{\verb|lef||} if cat \ensuremath{\ensuremath{lef||} if cat \ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{lef||} if cat \ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensu
                                                                                                                                                               \else \let\jsc@next\jsc@f@t\fi \jsc@next}
3033 \def\jsc@f@@t{\bgroup\aftergroup\jsc@@foot\let\jsc@next}
3034 \det jsc@f@t#1{#1\jsc@@foot}
3035 \verb|\def|| jsc@@foot{\@finalstrut|| strutbox|| color@endgroup|| egroup||}
                          \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined\else
3036
                                    \ifhmode\null\fi
3037
                                    \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
3038
3039
                                            \penalty\pltx@foot@penalty
3040
                                            \pltx@foot@penalty\z@
                                   \fi
3041
                          fi
3042
```

\@makefntext 実際に脚注を出力する命令です。**\@makefnmark** は脚注の番号を出力する命令です。ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

```
3043 \newcommand\@makefntext[1]{%
3044 \advance\leftskip 3\jsZw
3045 \parindent 1\jsZw
3046 \noindent
3047 \llap{\@makefnmark\hskip0.3\jsZw}#1}
```

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext[0]{...} とすれば番号を付けない 脚注になります。ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので,工夫が必要です

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```
3048 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
3049 %
        \begingroup
3050 %
           \lim 1>\z0
             \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax
3051 %
             \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
3052 %
3053 %
           \else
3054 %
             \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%
3055 %
           \fi
3056 %
        \endgroup
3057 %
        \@footnotetext}
```

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

\jsInhibitGlueAtParTop 「段落頭の括弧の空き補正」の処理を \jsInhibitGlueAtParTop という命令にして、これ を再定義可能にした。

3058 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

\everyparhook 全ての段落の冒頭で実行されるフック。これの初期値を先述の \jsInhibitGlueAtParTop とする。

- ${\tt 3059 \setminus def \setminus every parhook \{ \setminus jsInhibitGlueAtParTop \}}$
- 3060 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@@compat
- 3061 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\everypar{\everyparhook}}
- 3062\fi

[2016-07-18] \inhibitglue の発行対象を \inhibitxspcode が 2 に設定されているものすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で \@tempa を使っていたのがよくなかったので、プレフィックスを付けて \jsc@tempa にしました (forum:2085)。

[2017-02-13] \jsc@tempa は実はテンポラリではなく「この処理専用のユニーク制御綴」である必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので、専用の命令 \jsc@ig@temp に置き換えました (Issue #54)。

次の \@inhibitglue は JS クラスでの \jsInhibitGlueAtParTop の実装である。エンジンが (u)platex の場合はこれを採用する。

```
3063 \ifx j\jsEngine
```

 $3064 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{0}}}$

3065 \futurelet\@let@token\@@inhibitglue}

 $3066 \setminus begingroup$

 $3067 \left| \text{GDEF=} \right|$

 $3068 \verb|\let\CATCODE=\catcode|$

3069 \let\ENDGROUP=\endgroup

3070 \CATCODE`k=12

3071 \CATCODE`a=12

3072 \CATCODE`n=12

3073 \CATCODE \ j=12

3074 \CATCODE`i=12

3075 \CATCODE`c=12

3076 \CATCODE h=12

3077 \CATCODE`r=12

 $3078 \CATCODE\t=12$

```
3079 \CATCODE`e=12
3080 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
3081 \ENDGROUP
3082 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{$0$}}\mbox{\mbox{$0$}}}
              \expandafter\expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@tc
3083
3084 \verb|\expandafter\expandafter| when the constant of the co
              \def\jsc@ig@temp{#1}%
3085
3086
              \ifx\jsc@ig@temp\@empty
                  3087
3088
                       \inhibitglue
3089
                  \fi
             \fi}
3090
3091 \fi
         ここからしばらく「(本物の) \everypar に追加した \everyparhook を保持する」ため
    のパッチ処理が続く。これは、everyparhook=compat の場合にのみ実行する。
3092 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@@compat
         これだけではいけないようです。あちこちに \everypar を初期化するコマンドが隠され
    ていました。
         まず、環境の直後の段落です。
        [2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に追随して \clubpenalty のリセット
    を追加しました。
3093 \def\@doendpe{%
             \@endpetrue
3094
3095
              \def\par{%
                  \@restorepar\clubpenalty\@clubpenalty\everypar\ok}\par\@endpefalse}%
3096
3097
              \everypar{{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\dendpefalse\everyparhook}}
         [2017-08-31] minipage 環境にも対策します。
3098 \def\@setminipage{%
             \@minipagetrue
             \everypar{\@minipagefalse\everypar{\everyparhook}}%
3100
3101 }
         \item 命令の直後です。
3102 \def\@item[#1]{%
3103
             \if@noparitem
3104
                  \@donoparitem
3105
             \else
                   \if@inlabel
3106
                       \indent \par
3107
3108
                  \fi
                  \ifhmode
3109
                       \unskip\unskip \par
3110
3111
                  \if@newlist
3112
```

```
\if@nobreak
3113
3114
                                       \@nbitem
3115
                                \else
3116
                                       \addpenalty\@beginparpenalty
3117
                                       \addvspace\@topsep
                                       \addvspace{-\parskip}%
3118
                                \fi
3119
                         \else
3120
                                \addpenalty\@itempenalty
3121
3122
                                \addvspace\itemsep
3123
                         \global\@inlabeltrue
3124
3125
                   \fi
                   \everypar{%
3126
3127
                         \@minipagefalse
                         \global\@newlistfalse
3128
3129
                          \if@inlabel
                                \global\@inlabelfalse
3130
                                {\sc}^{\sc}
3131
                                   \ifvoid\z@
3132
3133
                                          \kern-\itemindent
                                   fi}%
3134
                                \box\@labels
3135
                                \perboldrel{penalty}z0
3136
                         \fi
3137
3138
                         \if@nobreak
                                \@nobreakfalse
3139
3140
                                \clubpenalty \@M
3141
                                \clubpenalty \@clubpenalty
3142
3143
                                \everypar{\everyparhook}%
3144
                         \fi
                         \everyparhook}%
3145
3146
                   \if@noitemarg
                         \@noitemargfalse
3147
                         \if@nmbrlist
3148
                                \refstepcounter\@listctr
3149
                         \fi
3150
3151
                   \fi
                    \label{label} $$\ \end{0.05} $$ \shox(\end{0.05} $$\ \end{0.05} 
3152
                    \global\setbox\@labels\hbox{%
3153
                          \unhbox\@labels
3154
                         \hskip \itemindent
3155
                         \hskip -\labelwidth
3156
3157
                         \hskip -\labelsep
3158
                         \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
3159
                                \box\@tempboxa
3160
                                \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
3161
```

```
\hskip \labelsep}%
3163
     \ignorespaces}
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \section 類の直後に 2回, 前者が 3回目以
 降に実行されます。
3165 \def\@afterheading{%
     \@nobreaktrue
3166
3167
     \everypar{%
3168
       \if@nobreak
3169
         \@nobreakfalse
         \clubpenalty \@M
3170
3171
         \if@afterindent \else
           {\setbox\z@\lastbox}%
3172
3173
         \fi
       \else
3174
         \clubpenalty \@clubpenalty
3175
         \everypar{\everyparhook}%
3176
       \fi\everyparhook}}
3177
```

「\everyparhook 用のパッチ処理」はここまで。

3178 \fi

\fi

3162

\@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの pIATEX 2_{ε} は段落の頭にグルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず,不統一でした。そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし,ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので,また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

※luatexja を読みこんだ場合に lltjcore.sty によって上書きされるのを防ぐため遅延させる。

```
3179 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@@none\else
3180 \text{ } AtEndOfPackage{%}
3181 \def\@gnewline #1{%}
3182
      \ifvmode
        \@nolnerr
3183
3184
        \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
3185
3186
        \jsInhibitGlue \ignorespaces
3187
      \fi}
3188 }
3189 \fi
```

12 いろいろなロゴ

IATeX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は jslogo パッケージに移転しました。後方互換のため, jsclasses ではデフォルトでこれを読み込みます。nojslogo オプションが指定されている場合は読み込みません。

BXJS クラスでも jslogo オプション指定の場合に jslogo パッケージを読み込むように した。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。

※ \小、\上小 の制御綴は定義しない。

```
3190 \if@jslogo
3191 \IfFileExists{jslogo.sty}{%
3192 \RequirePackage{jslogo}%
3193 }{%
3194 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3195 {The package 'jslogo' is not installed.\MessageBreak
3196 It is included in the recent release of\MessageBreak
3197 the 'jsclasses' bundle}
3198 }
3199 \fi
```

13 amsmath との衝突の回避

\ltx@ifnextchar \ProvidesFile

amsmath パッケージでは行列中で \@ifnextchar を再定義していますが、これが \LaTeX の \ProvidesFile で悪さをする例が FTeX で報告されています。これを避けるための tDB さんのフィックスを挿入しておきます。副作用がありましたらお知らせください。

この現象については私の TeX 掲示板 4273~, 16058~ で議論がありました。なお, AMS 関係のパッケージを読み込む際に psamsfonts オプションを与えても回避できます (Thanks: しっぽ愛好家さん)。

[2016-11-19] 本家の ltclass.dtx 2004/01/28 v1.1g で修正されているのでコメントアウトしました。

```
3200 %\let\ltx@ifnextchar\@ifnextchar
3201 %\def\ProvidesFile#1{%
3202 % \begingroup
3203 %
         \catcode`\ 10 %
3204 %
         \ifnum \endlinechar<256 %
           \ifnum \endlinechar>\m@ne
3205 %
             \catcode\endlinechar 10 %
3206 %
           \fi
3207 %
         \fi
3208 %
3209 %
         \@makeother\/%
```

```
3210 % \@makeother\&%
3211 % \ltx@ifnextchar[{\@providesfile{#1}}{\@providesfile{#1}[]}}
```

14 初期設定

■いろいろな語

```
\prepartname
  \postpartname 3212 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
\prechaptername ^{3213} \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
              3214 % chook | report > \newcommand { \prechaptername } { \if@english Chapter ~ \else 第\fi}
\postchaptername _{3215} %<book|report>\newcommand{\postchaptername}{\if@english\else 章\fi}
\presectionname 3216 \newcommand{\presectionname}{}% 第
\postsectionname ^{3217} \newcommand{\postsectionname}{}% 節
  \contentsname
\listfigurename 3218 \newcommand{\contentsname}{\if@english Contents\else 目次\fi}
 3220 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
       \refname
       \bibname 3221 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
     \indexname 3222 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}
              3223 \mbox{ newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}
    \figurename
     3225 %<jspf>\newcommand{\figurename}{Fig.~}
              3226 %<!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi}
              3227 %<jspf>\newcommand{\tablename}{Table~}
  \appendixname
  \abstractname 3228 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
              3229 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
              3230 %<!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}
```

■今日の日付 I♣TEX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \和暦 と書いてください。

環境変数 SOURCE_DATE_EPOCH / FORCE_SOURCE_DATE が設定されている場合は"今日"が過去・未来の日付になる可能性がある。BXJS クラスでは、和暦の扱いは bxwareki パッケージに任せる。

※ 2.0 版より、完全に bxwareki に任せる。

^{3231 \@}onlypreamble\bxjs@decl@Seireki@cmds

```
3232 \ensuremath{\setminus} \texttt{@tempswafalse}
                      3233 \if p\jsEngine \@tempswatrue \fi
                      3234 \in n\ (Otempswatrue \fi
                      3235 \bxjs@cond\if@tempswa\fi{%
                      3236 % 欧文 8bitTeX の場合
                      3237 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
                      3238 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
                            \def\西暦{\jsSeirekitrue}%
                            \def\和暦{\jsSeirekifalse\bxjs@wareki@used}}
                      3240
                      3241 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
                      3242 \def\Wareki{\jsSeirekifalse\bxjs@wareki@used}
                      3243 \def\bxjs@if@use@seireki{\bxjs@cond\ifjsSeireki\fi}
                      3244 \def\bxjs@iai{\noexpand~}
                      3245 }{%
                      3246 \newif\if 西暦 \西暦 true
                      3247 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
                            \def\西暦{\西暦 true}%
                            \def\和暦{\西暦 false\bxjs@wareki@used}}
                      3250 \def\Seireki{\西暦 true}
                      3251 \def\Wareki{\西暦 false\bxjs@wareki@used}
                      3252 \def\bxjs@if@use@seireki{\bxjs@cond\if 西暦\fi}
                      3253 \let\bxjs@iai\@empty
                      3254 }
                      3255 \bxjs@decl@Seireki@cmds
                      3256 \let\bxjs@unxp\@firstofone \let\bxjs@onxp\@firstofone
                      3257 \bxjs@test@engine\unexpanded{%
                            \let\bxjs@unxp\unexpanded \def\bxjs@onxp{\unexpanded\expandafter}}
\ifbxjs@bxwareki@avail bxwareki パッケージが使用できるか。
                      3259 \newif\ifbxjs@bxwareki@avail
                      3260 \IfFileExists{bxwareki.sty}{%
                      3261
                            \RequirePackage{bxwareki}[]%
                            \bxjs@bxwareki@availtrue}{}
     \bxjs@wareki@used 和暦が非対応の場合に警告を出す。
                      3263 \ifbxjs@bxwareki@avail \let\bxjs@wareki@used\@empty
                      3264 \else
                      3265
                            \bxjs@robust@def\bxjs@wareki@used{%
                              \global\let\bxjs@wareki@used\@empty
                      3266
                      3267
                              \ClassWarning\bxjs@clsname
                               {Wareki mode is not supported, since\MessageBreak
                      3268
                      3269
                                'bxwareki' is unavailable, found}}
                            \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                      3270
                      3271
                              \let\bxjs@wareki@used\@empty}
                      3272 \fi
               \jayear 和暦における年の表記(元号 + 年数)。
```

\heisei 年数を表す整数レジスタで、元号が「平成」である場合にのみ定義される。

```
3273 \ifbxjs@bxwareki@avail
      3274
            \let\jayear\warekiyear
            \def\bxjs@tmpa{H}\ifx\bxjs@tmpa\warekigengoinitial
              \newcount\heisei \heisei=\value{warekiyear}
      3276
      3277
        bxwareki が使えない場合は西暦表示にする。
      3278 \else
            \edef\jayear{\the\year \bxjs@iai}
      3279
      3280 \fi
\today 英語、西暦、和暦で場合分けをする。
      3281 \left| bxjs@next\right| 
      3282 \ifbxjs@bxwareki@avail \ifx\warekigengo\@empty\else
            \def\bxjs@next{\bxjs@onxp{\warekitoday}}
      3284 \fi\fi
      3285 \edef\bxjs@today{%
            \if@english
      3286
      3287
              \ifcase\month\or
      3288
                January\or February\or March\or April\or May\or June\or
                July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
      3289
                \space\number\day, \number\year
      3290
      3291
            \else
              \ifx\bxjs@next\relax \expandafter\@firstoftwo
      3292
              \else \noexpand\bxjs@if@use@seireki
      3293
              \fi {%
      3294
                \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
      3295
      3296
                \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
                \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
      3297
      3298
              }{\bxjs@next}%
            \fi}
      3299
      3300 \ \text{let} \ \text{bxjs@today}
```

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.ldf)が読み込まれた場合に影響を受けないようにする。

```
3301 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%

3302 \ifx\bbl@jpn@maybekansuji\@undefined\else

3303 \bxjs@decl@Seireki@cmds

3304 \g@addto@macro\datejapanese{%

3305 \let\today\bxjs@today}%

3306 \fi}
```

■ハイフネーション例外 T_{EX} のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

3307 \hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-script}

■ページ設定 ページ設定の初期化です。

- 3308 %<slide>\pagestyle{empty}%
- 3309 %<article|report>\pagestyle{plain}%
- $3310 \mbox{\sc k}\pagestyle{headings}\mbox{\sc k}$
- 3311 \pagenumbering{arabic}
- $3312 \setminus if@twocolumn$
- 3313 \twocolumn
- 3314 \sloppy
- 3315 \flushbottom
- 3316 \else
- 3317 \onecolumn
- 3318 \raggedbottom
- 3319 **\fi**
- 3320 %<*slide>
- 3321 \renewcommand\familydefault{\sfdefault}
- 3322 \raggedright
- 3323 %</slide>

■BXJS 独自の追加処理 彎

フックを実行する。

3324 \bxjs@pre@jadriver@hook

和文ドライバのファイルを読み込む。

 $3325 \verb|\input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}|$

おしまい。

3326 %</class>

以上です。

付録 A 和文ドライバの仕様 湾

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、 ★印を付けたものは"書込"が許されるものである。

• \jsDocClass [文字トークンの let] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一致 する (\if で判定可能)。

\jsArticle bxjsarticle クラス

\jsBook bxjsbook クラス

\jsReport bxjsreport クラス

\jsSlide bxjsslide クラス

- \jsEngine [文字トークンの let] 使用されているエンジンの種別。(\if で判定 可能)。
 - p pdfT_FX (DVI モードも含む)
 - 1 Lua T_{FX} (")
 - x X7TFX
 - j pT_FX または upT_FX
 - n 以上の何れでもない
- \ifjsWithupTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが upTpX であるか。
- \ifjsWitheTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが ε -TeX 拡張であるか。
- \ifjsInPdfMode [スイッチ] 使用されているエンジンが (pdfT_EX・LuaT_EX の) PDF モードであるか。
- \jsUnusualPtSize [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、 11pt、12pt のいずれでもない場合の \@ptsize の値。(\@ptsize 自体があまり有用でないと思われる。)
- \jsScale [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対する スケール。クラスオプション scale で指定される。(既定値は 0.924715。)
- \jsJaFont [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション jafont で指定された値。
- \jsJaParam [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まってなくて、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション japaram で指定された値。
- \jsInhibitGlue [マクロ] \inhibitglue という命令が定義されていればそれを 実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで \inhibitglue を用いている箇所 は全て \jsInhibitGlue に置き換えられている。従って、\inhibitglue は未定義 でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- \jsInhibitGlueAtParTop [マクロ] ★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- \jsZw [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで zw 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際に

用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に \jsScale \times (フォントサイズ) であると定められている(フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に \jsScale の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- \jsFontSizeChanged [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- \jsResetDimen [マクロ]★ 上記 \jsFontSizeChanged の中で呼び出される、ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

3327 %<*drv>

付録 B 和文ドライバ: minimal 🕾

jadriver の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、standard ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ(xeCJK や $LuaT_EX$ -ja 等)を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、 $(u)pT_EX$ エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

B.1 補助マクロ

3328 %<*minimal>

3329 %% このファイルは日本語文字を含みます

\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand。

3330 \def\DeclareJaTextFontCommand#1#2{%

3331 \DeclareRobustCommand#1[1]{%

3332 \relax

3333 \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi

3334 {#2##1}}%

3335 }

\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。

 $3336 \ensuremath{\texttt{VeclareJaMathFontCommand\#1\#2}\{\%}$

 $\tt 3337 \quad \backslash DeclareRobustCommand \#1[1]\{\%\}$

3338 \relax

3339 \ifmmode\else \non@alpherr{#1\space}\fi

3340 \nfss@text{\fontfamily\familydefault

3341 \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax

3342 #2##1}%

```
3343 }%
                 3344 }
\bxjs@if@sf@default \familydefault の定義が "\sfdefault" である場合に引数のコードを実行する。
                 3345 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
                 3346 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
                 3347 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
                      \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
                      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                 3349
                        \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
                 3350
                 3351 }
   \jsInverseScale \jsScale の逆数。
                  ※\CS=\jsInverseScale\CS は \bxjs@invscale\CS\jsScale よりも精度が劣るが処理
                 3352 \@tempdima\p@ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                 3353 \edef\jsInverseScale{\strip@pt\@tempdima}
    \jsLetHeadChar \jsLetHeadChar\CS{(トークン列)}: トークン列の先頭の文字を抽出し、\CS をその文
                  字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。
                   ※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は \CS は \relax に等置される。
                   ※文字トークンは"\the-文字列"のカテゴリコードをもつ。
                   ※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位
                  バイトの場合は1文字分のバイト列(のトークン列)を抽出する。この場合は元のカテゴリ
                   コードが保持される。
                 3354 \ensuremath{\mbox{def\jsLetHeadChar}\#1\#2\%}
                      \begingroup
                 3355
                 3356
                        \escapechar=`\\ %
                        \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
                 3357
                        \bxjs@let@hchar@exp#2}%
                 3358
                 3359
                      \endgroup
                      \let#1\bxjs@g@tmpa}
                 3360
                 3361 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
                      \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
                 3362
                 3363 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
                      \bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi{% 波括弧
                 3364
                        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                 3365
                      }{\bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi{% 空白
                 3366
                        \bxjs@let@hchar@out\let\space%
                 3367
                      }{\bxjs@cond\if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi{% バックスラッシュ
                 3368
                        \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
                 3369
                      }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}}
                 3370
                 3371 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
                      \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
                 3373 \def\bxjs@let@hchar@exp@c#1#2\@nil{%
                 3374 %\message{<#1#2>}%
```

3375 \bxjs@cond\if#1\@backslashchar\fi{% 制御綴

```
3376
        \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
3377
          \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3378
        }{%else
          \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
3379
3380
        }%
3381
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@chr#1%
3382
3383
3384 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3386 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
      \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
3387
      \toks@\bgroup}% skip to right brace
 UTF-8 のバイト列を扱うコード。
3389 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
3390 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
3391 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
3392 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
3393 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
3394 \verb|\let\bxjs@let@hchar@chr@ue@a\bxjs@let@hchar@chr\\
3395 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
      \@tempcnta=`#1\relax
3397 %\message{\the\@tempcnta}%
      \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
3399
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
3400
3401
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
3402
3403
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
3404
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
3405
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
3407
3408
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3409
      }}}}}
3410
3411 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3413 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}
3415 \ensuremath{ \mbox{def\bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{\% } }
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}
3417 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%}
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3#4}}}
```

B.2 (u)pTFX 用の設定

 $3419 \ifx j\jsEngine$

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラス で除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ \jsLetHeadChar を和文文字トークンに対応させる。

```
3420 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1#2{%
3421 \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#2\relax#1#2}
3422 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3#4{%
3423 %\message{(\meaning#3:\meaning#4)}%
3424 \bxjs@cond\if#1k\fi{%
3425 \bxjs@let@hchar@out\def{{#4}}%
3426 }{%else
3427 \bxjs@let@hchar@chr@ue#3#4%
3428 }}
3429 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@pp
```

■エンジン依存の定義 最初にエンジン(pT_EX か upT_EX か)に依存する定義を行う。 \ifjsWithupTeX は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが upT_EX であるかを表す。

\jsc@JYn および \jsc@JTn は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを表す。

```
3430 \edgf\sc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi} \\ 3431 \edgf\sc@JTn{\ifjsWithupTeX JT2\else JT1\fi} \\ 3432 \edgf\sc@pfx@{\ifjsWithupTeX u\fi} \\
```

3443 \def\bxjs@declarefontshape{%

\bxjs@declarefontshape は標準の和文フォント宣言である。後で \bxjs@scale を求めるため一旦マクロにしておく。\bxjs@sizereference は全角幅を測定する時に参照するフォント

まず upT_{EX} の場合の定義を示す。 JS クラスの $\operatorname{uplatex}$ オプション指定時の定義と同じである。

```
3433 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
3434 \ifjsWithupTeX
3435 \def\bxjs@declarefontshape{%
3436 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-h}{}%
3437 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-h}{}%
3438 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-v}{}%
3439 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-v}{}%
3440 }
3441 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}

pTEX の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じである。
3442 \else
```

```
3447 \end{T1} gt {m}{n} <-> s*[\bxjs@scale] tgoth10}{} % \end{T1} for $t \in \mathbb{R}^{n} \end{T1} for $t 
3448 }
3449 \def\bxjs@sizereference{jis}
3450 \fi
                   既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。
3451 \def\bxjs@next#1/#2/#3/#4/#5\relax{%
3452 \def\bxjs@tmpb{#5}
3453 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@tmpb{10}%
3454 \ensuremath{\setminus} else
3455 \expandafter\expandafter\bxjs@next
3456 \expandafter\string\the\jfont\relax
3457 \fi
3458 \@for\bxjs@tmpa:={\jsc@JYn/mc/m/n,\jsc@JYn/gt/m/n,%
3459
                                                                                                  \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
                               {\expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/10\endcsname=\@undefined
3460
3461
                                    \expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/\bxjs@tmpb\endcsname=\@undefined}
```

■和文フォントスケールの補正 実は、 pT_EX の標準的な和文フォント(JFM のこと、例えば jis)では、指定された \jsScale(この値を s とする)をそのまま使って定義すると期待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1 zw の大きさが指定されたサイズではなく既にスケール(この値を f とする;jis では 0.962216 倍)が掛けられた値になっているからである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ \bxjs@scale に保存する。

```
3462 \begingroup
3463 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
     \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
     3466 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
3467
    \ifdim\wd\z@=10pt
3468
       \global\let\bxjs@scale\jsScale
    \else
3470 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
       \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
3471
3472
       \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
       \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
3473
       \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
3474
3475
    \fi
3476 \endgroup
3477 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}
```

■和文フォント関連定義 \bxjs@scale が決まったので先に保存した標準和文フォント宣言を実行する。

```
3478 \bxjs@declarefontshape
```

フォント代替の明示的定義。

```
3482 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} f(t) $$ (->ssub*gt/m/n) $$ (substituting the properties of the p
3483 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{s1}} <-> sub*gt/m/n}{}
3485 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{}} and $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{}} and $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{}} and $$ \ensuremath{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{} and $$ \ensuremath{\mbox{$1$}{c-}sub*gt/m/n}{} and $$ \ensuremath{\mbox{
3486 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3487 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c}}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} for $$\ape{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{
3488 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {n}{<->ssub*mc/bx/n}{}
3489 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{$1$}} for
3490 \ensuremath{\texttt{Nord}} f(b) $$ \ensuremath{\texttt{Shape}} \xrightarrow{\texttt{Ssub*mc/bx/n}} $$
3491 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3492 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{it}} <-> ssub*gt/bx/n}{}
3493 \end{areFontShape{\jsc@JYn}{gt}{b}{sl}{<->ssub*gt/bx/n}{}}
3494 \ensuremath{\texttt{DeclareFontShape}} \ensuremath{\texttt{Shape}} \ensuremath{\texttt{In}} \ensuremath{\texttt{In}} \ensuremath{\texttt{Shape}} \ensuremat
3495 \end{areFontShape{\jsc0JTn}{mc}{m}{s1}{<->ssub*mc/m/n}{}}
3496 \end{areFontShape} \gray \gra
3497 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}} f(t) $$ (->ssub*gt/m/n}{} $$
3499 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3501 \ensuremath{\texttt{Normalize}} \ensuremath{\texttt{Soll}} \ensuremath{\texttt{Soll
3503 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {cost} $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} $$
3504 \end{areFontShape{\jsc@JTn}{mc}{b}{it}{<->ssub*mc/bx/n}{}}
3505 \end{areFontShape{\jsc@JTn}{mc}{b}{sl}{<->ssub*mc/bx/n}{}} \label{fig:b}{sl}{<->ssub*mc/bx/n}{}
3506 \ensuremath{\mbox{\sc 0JTn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}}
3507 \end{areFontShape{\jsc@JTn}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{}}
3508 \end{areFontShape{\jsc@JTn}{gt}{b}{s1}{<->ssub*gt/bx/n}{}}
                            欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
           関係の定義を行う。
              ※ 2020-02-02 の NFSS の改修に対する jsclasses の対策を取り入れた。
3509 \ensuremath{\mbox{\sc 0}}\ensuremath{\mbox{\sc 0}}\ensuremath{\m
                                                          {\jsc@needsp@tchfalse}{\jsc@needsp@tchtrue}
3510
3511 \ifjsc@needsp@tch
                                                                                                                                                                                                                                   % --- for 2020-02-02 or older BEGIN
3512 \ifx\@rmfamilyhook\@undefined % old
3513 \DeclareRobustCommand\rmfamily
                                             {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
3514
                                                    \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3515
3516 \DeclareRobustCommand\sffamily
                                             {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
3517
                                                    \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3518
3519 \DeclareRobustCommand\ttfamily
                                             {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
3520
                                                    \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3521
3522 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                           \ifx\mweights@init\@undefined\else % mweights.sty is loaded
3523
                                                          % my definitions above should have been overwritten, recover it!
3524
                                                          % \selectfont is executed twice but I don't care about speed...
3525
                                                           \expandafter\g@addto@macro\csname rmfamily \endcsname
3526
```

```
{\kanjifamily\mcdefault\selectfont}%
3527
3528
        \expandafter\g@addto@macro\csname sffamily \endcsname
3529
          {\kanjifamily\gtdefault\selectfont}%
        \expandafter\g@addto@macro\csname ttfamily \endcsname
3530
          {\kanjifamily\gtdefault\selectfont}%
3531
     \fi}
3532
                                   % 2020-02-02
3533 \else
3534 \verb|\g@addto@macro\\| @rmfamilyhook
      {\prepare@family@series@update@kanji{mc}\mcdefault}
3536 \g@addto@macro\@sffamilyhook
      {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3538 \g@addto@macro\@ttfamilyhook
      {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3540 \fi
3541 \else % --- for 2020-02-02 or older END & for 2020-10-01 BEGIN
3542 \AddToHook{rmfamily}%
      {\prepare@family@series@update@kanji{mc}\mcdefault}
3544 \AddToHook{sffamily}%
      {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3546 \AddToHook{ttfamily}%
      {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
         % --- for 2020-10-01 END
3548 \fi
3549 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\Qundefined
3550 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3551 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3552 \fi
3553 \bxjs@if@sf@default{%
     \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
   念のため。
3555 \setminus selectiont
   \bxjs@parse@qh の処理は pTFX 系では不要になるので無効化する(つまり
 \jsSetQHLength は \setlength と等価になる)。
3556 \def\bxjs@parse@qh#1{\let\bxjs@tmpb\relax}
3557 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
3558 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
 ■パラメタの設定
3559 \prebreakpenalty\jis"2147=10000
3560 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
3561 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
3562 \inhibitxspcode`!=1
3563 \in \overline{\mp}=2
3564 \times -+=3
3565 \times \%=3
   "80~"FF の範囲の \spcode を 3 に変更。
3566 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{\%
```

\xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne} \jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。 3568 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue \jsResetDimen は空のままでよい。 ■組方向依存の処理 組方向判定の if-トークン(\if?dir)は pTpX 以外では未定義である ため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に!をエスケープ 文字に使う。 3569 \begingroup 3570 \catcode \!=0 \bxjs@ptex@dir 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。 3571 \gdef\bxjs@ptex@dir{% 3572 !iftdir t% 3573 !else!ifydir y% 3574 !else ?% 3575 !fi!fi} 新版の pTFX で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。 ※現在の pIATrX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、\@makefnmark の定義 が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。 3576% 古い \@makefnmark の定義 !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}% !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}} 3580 \ifx\@makefnmark\bxjs@tmpa $3581 \ \end{ark} \$!ifydir \hbox{}\hbox{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\hbox{}% 3583 !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi} 3584 \fi エスケープ文字の変更はここまで。 3585 \endgroup ■minijs パッケージのブロック やっておく。 3586 \Onamedef{verOminijs.sty}{} B.3 pdfT_EX 用の処理

```
3587 \else\ifx p\jsEngine
3588 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@ue
3589 \@onlypreamble\bxjs@cjk@loaded
3590 \def\bxjs@cjk@loaded{%
3591 \def\@footnotemark{%
3592 \leavevmode
3593 \ifhmode
```

```
\edef\@x@sf{\the\spacefactor}%
                    3594
                              \ifdim\lastkern>\z@\ifdim\lastkern<5sp\relax
                    3595
                    3596
                                 \unkern\unkern
                                 \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
                    3597
                    3598
                              \nobreak
                    3599
                            \fi
                    3600
                    3601
                            \@makefnmark
                            \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
                    3602
                    3603
                            \relax}%
                          \let\bxjs@cjk@loaded\relax
                    3604
                    3605 }
                    3606 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                          \@ifpackageloaded{CJK}{%
                    3607
                    3608
                            \bxjs@cjk@loaded
                    3609
                          }{}%
                    3610 }
                      B.4 X<sub>TF</sub>X 用の処理
                    3611 \else\ifx x\jsEngine
                        \bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を
                      適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。
                    3612 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
                          \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
                    3613
                          \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
                    3614
                    3615
                            \bxjs@let@hchar@chr@xe
                         }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
                    3616
                    3617 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
                    3618
                          \lccode`0=`#1\relax
                          \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}
                    3619
 \bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。
                    3620 \@onlypreamble\bxjs@do@precisetext
                    3621 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\Qundefined\else
                          \def\bxjs@do@precisetext{%
                    3623
                            \XeTeXgenerateactualtext=\@ne}
                    3624\fi
\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。
                    3625 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
                    3626 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
                          \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
                    3627
                          3628
                            \jsSimpleJaSetup
                    3629
                            \ClassInfo\bxjs@clsname
                    3630
                             {'\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
                    3631
                          \fi\fi}
                    3632
```

```
\jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。
              3633 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
                    \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
              3634
                    \XeTeXlinebreakskip=Opt plus 1pt minus 0.1pt\relax
              3635
                    \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}
                B.5
                     後処理(エンジン共通)
              3637 \fi\fi\fi
                  simplejasetup オプションの処理。
              3638 \verb|\ifx\bxjs@do@simplejasetup\@undefined\else|
                    \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                      \ifbxjs@simplejasetup
              3640
              3641
                        \bxjs@do@simplejasetup
              3642
                      \fi}
              3643 \fi
                  precisetext オプションの処理。
              3644 \ifbxjs@precisetext
                    \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
              3645
              3646
                      \ClassWarning\bxjs@clsname
                       {The current engine does not support the \MessageBreak
              3647
              3648
                        'precise-text' option\@gobble}
              3649
                    \else
              3650
                      \bxjs@do@precisetext
                    \fi
              3652 \fi
                ■段落頭でのグルー挿入禁止 本体開始時において \everyparhook を検査して、"結局何
                もしない"ことになっている場合は、副作用を完全に無くすために \everyparhook を空に
                する。
              3653 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                    \ifx\jsInhibitGlueAtParTop\@empty
                      \def\bxjs@tmpa{\jsInhibitGlueAtParTop}%
              3655
              3656
                      \ifx\everyparhook\bxjs@tmpa
                        \let\everyparhook\@empty
              3657
                      \fi
              3658
                    \fi}
              3659
                  everyparhook=modern の場合の、\everyparhook の有効化の実装。
                ※本体開始時ではなく最初から有効化していることに注意。
              3660 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@@modern
                まず \everypar を "乗っ取る" 処理を行う。
                    \let\bxjs@everypar\everypar
              3661
```

そして本物の \everypar では、最後で常に \everyparhook が実行されるようにする。

3662

\newtoks\everypar
\everypar\bxjs@everypar

3664 \bxjs@everypar{\the\expandafter\everypar\everyparhook}% 3665 \fi

■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が true であり、かつ fancyhdr が使用された場合に以下の対策を行う。

- デフォルトの書式設定に含まれる"二文字フォント命令"を除去する。
- bxjsbook において、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に変える。

3666 \ifbxjs@fancyhdr

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実行の間で実行されるべき。

3667 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr

3668 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{%

ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、"二文字フォント命令" を除去したものに置き換える。

※和文なので \sl は無い方がよいはず。

- 3669 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\rightmark}\strut}%
- 3670 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\rightmark}\strut}%
- $3671 \ \footnote{1} \ \footnote{1}$
- $3672 \ \footnote{1}{0} \footnote{1}{0} \ \foot$
- $3673 $$ \ \foncyolh\bxjs@tmpa \global\let\foncyolh\bxjs@tmpb \fi$
- $3674 $$ \ \f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi$
- $3675 $$ \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\leftmark}\strut}$% $$$
- 3676 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\leftmark}\strut}%
- $3677 \verb| \fCncyelh\bxjsQtmpa \global\let\fCncyelh\bxjsQtmpb \fi \\$
- ${\tt 3678} \qquad {\tt \f@ncyerh\bxjs@tmpa\ \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb\ \fine and the property of the property of$
- 3680 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- 3681 \def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}%
- $3682 \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}%$
- $3683 \ \footnote{10cm} \global\et\footnote{10cm} \global\et\$
- 3684 \ifx\f@ncyocf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyocf\bxjs@tmpb \fi

\fullwidth が(定義済で)\textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に合わせる。

- 3685 \ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth
- 3686 \setlength{\Otempdima}{\fullwidth-\textwidth}%
- 3687 \edef\bxjs@tmpa{\noexpand\fancyhfoffset[EL,OR]{\the\@tempdima}%
- 3688 }\bxjs@tmpa
- 3689 \fi\fi
- 3690 \PackageInfo\bxjs@clsname
- 3691 {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}}

 $\bxjs@pagestyle@hook$ $\pagestyle \land O フックの本体$ 。

3692 \def\bxjs@pagestyle@hook{%

3693 \@ifpackageloaded{fancyhdr}{%

```
\bxjs@adjust@fancyhdr
           3694
                   \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax
           3695
           3696
              \pagestyle にフックを入れ込む。
           3697 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle
           3698 \def\pagestyle{%
                \bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}
              begin-document フック。
             ※これ以降に fancyhdr が読み込まれることはあり得ない。
           3700 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                \bxjs@pagestyle@hook
                \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
             ■和文空白命令
           3703 \ \ ifbxjs@jaspace@cmd
 \jaenspace 半角幅の水平空き。
           3704 \ \def \jaenspace{\hskip.5\jsZw\relax}
\jathinspace 和欧文間空白を入れるユーザ命令。
             ※ minimal ではダミー定義。
                \def\jathinspace{\hskip\z@skip}
        \_ 全角空白文字 1 つからなる名前の制御綴。\zwspace と等価になる。
           3706 \ \def\ \{\zwspace}
   \jaspace jlreq クラスと互換の命令。
                 \DeclareRobustCommand*{\jaspace}[1]{%
           3707
           3708
                  \expandafter\ifx\csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname\relax
                    \ClassError\bxjs@clsname
           3709
                     {Unknown jaspace: #1}{\@eha}%
           3710
           3711
           3712
                    \csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname
           3713
                  \fi}
           3714
                 \def\bxjs@jaspace@@zenkaku{\hskip 1\jsZw\relax}
                 \def\bxjs@jaspace@@nibu{\hskip .5\jsZw\relax}
                 \def\bxjs@jaspace@@shibu{\hskip .25\jsZw\relax}
           3716
           3717 \fi
              終わり。
           3718 \fi
              以上で終わり。
           3719 %</minimal>
```

付録 C 和文ドライバ: standard 🕸

標準のドライバ。

- \rmfamily/\sffamily/\ttfamily での和文ファミリ連動
- \mcfamily/\gtfamily
- \textmc/\textgt
- \zw
- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \setxkanjiskip/\getxkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing
- $\bullet \ \ \verb|\autoxspacing| \ \ \verb|\autoxspacing| \\$

■和文フォント指定の扱い

C.1 準備

まず minimal ドライバを読み込む。

3720 %<*standard>

3721 %% このファイルは日本語文字を含みます

3722 \input{bxjsja-minimal.def}

simplejasetup は standard では無効になる。

3723 \bxjs@simplejasetupfalse

C.2 和文ドライバパラメタ

japaram の値を key-value リストとして解釈する。keyval のファミリは bxjsStd とする。

\ifbxjs@jp@jismmiv 2004JIS 字形を優先させるか。

3724 \newif\ifbxjs@jp@jismmiv

jis2004 オプションの処理。

 $3725 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@true}\bxjs@jp@jismmivtrue| \\$

 $3726 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@false}\bxjs@jp@jismmivfalse| \\$

 $3728 \qquad \texttt{\bxjs@set@keyval{jis2004}{\#1}{}}$

\ifbxjs@jp@units 和文用単位(zw、zh、(true)Q、(true)H)を使えるようにするか。 3729 \newif\ifbxjs@jp@units

units オプションの処理。

```
3730 \let\bxjs@kv@units@true\bxjs@jp@unitstrue
                                                                                      3731 \let\bxjs@kv@units@false\bxjs@jp@unitsfalse
                                                                                      3732 \define@key{bxjsStd}{units}[true]{%
                                                                                                           \bxjs@set@keyval{units}{#1}{}}
                                \bxjs@jp@font フォントパッケージの追加オプション。
                                                                                      3734 \let\bxjs@jp@font\@empty
                                                                                                      font オプションの処理。
                                                                                      3735 \define@key{bxjsStd}{font}{%
                                                                                      3736 \edef\bxjs@jp@font{#1}}
\ifbxjs@jp@strong@cmd \strong 命令を補填するか。
                                                                                      3737 \newif\ifbxjs@jp@strong@cmd \bxjs@jp@strong@cmdtrue
                                                                                                      strong-cmd オプションの処理。
                                                                                      3738 \let\bxjs@kv@strongcmd@true\bxjs@jp@strong@cmdtrue
                                                                                      3739 \let\bxjs@kv@strongcmd@false\bxjs@jp@strong@cmdfalse
                                                                                      3740 \end{true} {\tt true} {\tt 
                                                                                                      実際の japaram の値を適用する。
                                                                                      3741 \ensuremath{$\def\bxjs@next\#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsStd}{\#1}}}
                                                                                      3742 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}
```

C.3 共通処理 (1)

■jis2004 パラメタ jis2004 パラメタが有効の場合は、グローバルオプションに jis2004 を追加する。

※otf や luatexja-preset 等のパッケージがこのオプションを利用する。

```
3743 \verb|\@onlypreamble\bxjs@apply@mmiv|\\
```

 $3744 \def\bxjs@apply@mmiv{%}$

 $3745 \qquad \verb|\g@addto@macro|\gClassoptionslist{,jis2004}|$

3746 % \@ifpackagewith 判定への対策

3747 \PassOptionsToPackage{jis2004}{otf}

3748 \global\let\bxjs@apply@mmiv\relax}

3749 \ifbxjs@jp@jismmiv \bxjs@apply@mmiv \fi

■和文用単位のサポート エンジンが (u)pTrX の場合は units を無効にする。

 $3750 \if j\jsEngine$

3751 \bxjs@jp@unitsfalse

3752 \fi

units パラメタが有効の場合は、bxcalc パッケージの \usepTeXunits 命令を実行して和文用単位を有効化する。

 $3753 \ \texttt{ifbxjs@jp@units}$

3755 \RequirePackage{bxcalc}[2018/01/28]%v1.0a

3756 \ifx\usepTeXunits\@undefined

```
\PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
               3757
               3758
                          {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
               3759
                           the package 'bxcalc' is too old}%
                         \bxjs@jp@unitsfalse
               3760
                       \else \usepTeXunits
               3761
                       \fi
               3762
                     }{%else
               3763
               3764
                       \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
                        {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
               3765
                         the package 'bxcalc' is unavailable}%
               3766
                       \bxjs@jp@unitsfalse
               3767
                     }
               3768
               3769 \fi
                   bxcalc で和文用単位をサポートした場合は、\bxjs@parse@qh の処理は不要になるので
                 無効化する。
               3770 \ifbxjs@jp@units
               3771 \def\bxjs@parse@qh#1{\left\langle bxjs@tmpb\right\rangle }
               3772 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
               3773 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
               3774\fi
\bxjs@let@lenexpr \bxjs@let@lenexpr\CS{(長さ式\)}: 長さ式に bxcalc の展開を適用した結果のトーク
                 ン列を \CS に代入する。
               3775 \ifbxjs@jp@units
                     \def\bxjs@let@lenexpr#1#2{%
                       \edef#1{#2}%
               3777
               3778
                       \expandafter\CUXParseExpr\expandafter#1\expandafter{#1}}
               3779 \else
                    \def\bxjs@let@lenexpr{\edef}
               3780
               3781 \fi
                 ■\strong 命令の補填
         \strong fontspec で提供される \strong 命令と strongenv 環境を全てのエンジンで使えるよう
                にする。
       strongenv
                 ※
               3782 \ifbxjs@jp@strong@cmd\jsAtEndOfClass{%
                     \ifx\strong\@undefined\ifx\strongenv\@undefined
               3783
               3784
                       \DeclareRobustCommand{\strongenv}{\bxjs@strong@font}%
               3785
                       \DeclareTextFontCommand{\strong}{\strongenv}%
                 fontspec と互換の \strongfontdeclare 命令も提供する。ただし、BXJS での \strong
                 は多段階には対応しないので、引数のコンマ区切りリストのうちの先頭の項目だけが意味を
                 もつ。既定の設定は \bfseries (太字) である。
                 ※\strongfontdeclare は試験的機能とする。
                       \@ifdefinable{\strongfontdeclare}{\bxjs@protected\def\strongfontdeclare#1{%
               3786
                         \bxjs@strong@font@declare@a#1,\@nil}}%
               3787
```

```
3788 \def\bxjs@strong@font@declare@a#1,#2\@nil{\def\bxjs@strong@font{#1}}%
```

3789 \def\bxjs@strong@font{\bfseries}%

3790 \fi\fi

3791 }\fi

 $3792 \ifjsWitheTeX$

使える場合は、「\dimexpr 外部寸法表記\relax」の形式(これは内部値なので単位として 使える)で各命令定義する。

 \j Q \j Q と \j H はともに $0.25\,\mathrm{mm}$ に等しい。

\iH3793 \@tempdima=0.25mm

3794 \protected\edef\jQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

3795 $\left(\int H \right) Q$

\trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。

\trueH3796 \ifjsc@mag

3797 \@tempdimb=\jsBaseFontSize\relax

3798 \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\@tempdimb}%

3799 \@tempdima=2.5mm

3800 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa

3801 \protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

3802 \@tempdima=10pt

3803 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa

3805 \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\p@

3806 \fi

3807 \let\trueH\trueQ

\ascQ \ascQ は\trueQ を和文スケール値で割った値。例えば、\fontsize{12\ascQ}{16\trueH} \ascpt とすると、和文が 12Q になる。

同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。

 $3808 \qquad \verb|\dtempdima| trueQ \ \verb|\bxjs@invscale| @tempdima| jsScale|$

 $3809 \quad \verb|\protected| edef| ascQ{\dimexpr\\the| Otempdima| relax}$

3810 \@tempdima\bxjs@truept \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale

 $3811 \quad \verb|\protected|\edef|\ascpt{\dimexpr\the}| @tempdima|\relax|}$

3812 \fi

\jafontsize \jafontsize{ \langle フォントサイズ \rangle }{ \langle 行送り \rangle }: 和文フォント規準で、すなわち、1 zw が \langle フォントサイズ \rangle に等しくなるようにフォントサイズを指定する。この命令の引数では、 \mathbb{Q}/\mathbb{H} の単位が使用できる。

 $3813 \def \jafontsize#1#2{%}$

3814 \begingroup

3815 \bxjs@jafontsize@a{#1}%

3816 \@tempdimb\jsInverseScale\@tempdima

3817 \bxjs@jafontsize@a{#2}%

```
3819
                                                                            \noexpand\fontsize{\the\@tempdimb}{\the\@tempdima}}%
                                                       3820
                                                                    \endgroup\bxjs@g@tmpa}
                                                       3821 \def\bxjs@jafontsize@a#1{%
                                                                    \bxjs@parse@qh{#1}%
                                                       3822
                                                                    \ifx\bxjs@tmpb\relax \def\bxjs@tmpb{#1}\fi
                                                       3823
                                                                    \@defaultunits\@tempdima\bxjs@tmpb pt\relax\@nnil}
                                                       3824
                                                               続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)
                       \bxjs@kanjiskip 和文間空白の量を表すテキスト。
                                                       3825 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}
                           \setkanjiskip 和文間空白の量を設定する。
                                                       3826 \newcommand*\setkanjiskip[1]{%
                                                                    \bxjs@let@lenexpr\bxjs@kanjiskip{#1}%
                                                       3827
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip}
                           \getkanjiskip 和文間空白の量を表すテキストに展開する。
                                                       3829 \newcommand*\getkanjiskip{%
                                                                   \bxjs@kanjiskip}
  \ifbxjs@kanjiskip@enabled 和文間空白の挿入が有効か。ただし pTFX では自身の \(no)autospacing での制御を用い
                                                           るのでこの変数は常に真とする。
                                                       3831 \newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
        \bxjs@enable@kanjiskip 和文間空白の挿入を有効/無効にする。(pTFX 以外)
      \verb|\bxjs@disable@kanjiskip|| 3832 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@kanjiskip|| \%
                                                                    \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
                                                       3834
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip}
                                                       3835 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%
                                                                    \bxjs@kanjiskip@enabledfalse
                                                       3837
                                                                    \bxjs@reset@kanjiskip}
          \bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。
                                                       3838 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%
                                                                    \ifbxjs@kanjiskip@enabled
                                                       3839
                                                       3840
                                                                        \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@kanjiskip}%
                                                                    \else \@tempskipa\z@
                                                       3841
                                                       3842
                                                                   \fi
                                                       3843
                                                                   \bxjs@apply@kanjiskip}
                     \bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。
                         \setxkanjiskip3844 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}
                         \label{eq:command*setxkanjiskip} \end{substitute} $$ \end{substitute} $$ \operatorname{setxkanjiskip}[1]_{\%} $$
                                                       3846
                                                                   \bxjs@let@lenexpr\bxjs@xkanjiskip{#1}%
\verb|\ifbxjs@xkanjiskip@enabled|_{3847}
                                                                    \bxjs@reset@xkanjiskip}
      \verb|\bxjs@enable@xkanjiskip| 3848 \verb|\newcommand*| getxkanjiskip{% | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848 | 1848
                                                                   \bxjs@xkanjiskip}
    \bxjs@disable@xkanjiskip ^{3849}
        \bxjs@reset@xkanjiskip
                                                                                                                                             135
```

3818

\xdef\bxjs@g@tmpa{%

```
3850 \mbox{\ensuremath{\mbox{newif}\sc}@enabled} \mbox{\ensuremath{\mbox{bxjs}@xkanjiskip@enabledtrue}} \label{true}
3851 \bxjs@robust@def\bxjs@enable@xkanjiskip{%
      \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
      \bxjs@reset@xkanjiskip}
3853
3854 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%
      \bxjs@xkanjiskip@enabledfalse
      \bxjs@reset@xkanjiskip}
3856
3857 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%
      \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
3858
        \setlength{\Otempskipa}{\bxjsOxkanjiskip}%
3859
      \else \@tempskipa\z@
3860
3861
      \bxjs@apply@xkanjiskip}
    \jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追随するように
 する。
3863 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
      \bxjs@reset@kanjiskip
      \bxjs@reset@xkanjiskip}
3866 \let\bxjs@apply@kanjiskip\relax
3867 \let\bxjs@apply@xkanjiskip\relax
```

■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォント の"プリセット"の指定として用いる。プリセットの値は、 T_{EX} Live の kanji-configupdmap コマンドで使う"ファミリ"と同じにすることを想定する。特別な値として、auto は kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を"調整"して、その結果を \bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は "非埋込 (noEmbed)" の設定が禁止される。この禁止の場合も含 め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。

```
3868 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont
3869 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%
3870
     \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
        \bxjs@get@kanjiEmbed
3871
3872
        \ifx\bxjs@jaEmbed\relax
3873
          \let\bxjs@tmpa\@empty
3874
          \let\bxjs@tmpa\bxjs@jaEmbed
3875
          \ifx\bxjs@jaVariant\bxjs@@hziv
3876
3877
            \bxjs@apply@mmiv
3878
          \fi
        \fi
3879
3880
      \else
        3881
3882
      \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3883
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3884
         {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
3885
```

```
3886
                              not available on the current situation}%
                    3887
                            \let\bxjs@tmpa\@empty
                    3888
                          \fi\fi
                    3889 }
                    3890 \def\bxjs@@auto{auto}
                    3891 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}
                    3892 \def\bxjs@@hziv{-04}
       \bxjs@jaEmbed
                     現在の updmap の jaEmbed・jaVariant パラメタの値。\bxjs@get@kanjiEmbed により実
                     際の設定値が取得されてここに設定される。
     \bxjs@jaVariant
                      ※古い版の updmap では kanjiEmbed · kanjiVariant であった。
                    3893 \let\bxjs@jaEmbed\relax
                    3894 \let\bxjs@jaVariant\relax
\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の jaEmbed jaVariant パラメタの値を取得する。
                    3895 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
                    3896 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
                          \begingroup\setbox\z@=\hbox{%
                    3897
                    3898
                            \global\let\bxjs@tmpdo\@empty
                            \def\bxjs@next##1##2##3{%
                    3899
                    3900
                              \def##1####1##3 ####2\@nil####3\@nnil{%
                                \ifx$####1$\gdef##2{####2}\fi}%
                    3901
                    3902
                              \g@addto@macro\bxjs@tmpdo{%
                                \expandafter##1\bxjs@tmpa\@nil##3 \@nil\@nnil}}%
                    3903
                            \bxjs@next\bxjs@tmpdo@a\bxjs@g@tmpa{kanjiEmbed}%
                    3904
                            \bxjs@next\bxjs@tmpdo@b\bxjs@g@tmpa{jaEmbed}%
                    3905
                            \bxjs@next\bxjs@tmpdo@c\bxjs@g@tmpb{kanjiVariant}%
                    3906
                            \bxjs@next\bxjs@tmpdo@d\bxjs@g@tmpb{jaVariant}%
                    3907
                    3908 %
                    3909
                            \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
                            \global\let\bxjs@g@tmpb\relax
                    3910
                    3911
                            \endlinechar\m@ne
                    3912
                            \let\do\@makeother\dospecials
                    3913
                            \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
                            \let\bxjs@tmpa\@empty
                    3914
                            \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
                    3915
                    3916
                            \ifeof\@inputcheck\else
                              \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                    3917
                              \closein\@inputcheck
                    3918
                            \fi
                    3919
                    3920
                            \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
                              \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
                    3921
                    3922
                              \@tempswatrue
                              \loop\if@tempswa
                    3923
                    3924
                                \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                    3925
                                \bxjs@tmpdo
                    3926
                                \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
                              \repeat
                    3927
                            \fi
                    3928
```

```
3929
                            }\endgroup
                       3930
                             \let\bxjs@jaEmbed\bxjs@g@tmpa
                             \let\bxjs@jaVariant\bxjs@g@tmpb
                       3932 }
\bxjs@resolve@jafont@paren jafont パラメタ値内の()を解決する。\bxjs@resolve@jafont@paren\CS で、\CS の内
                         容中の (...) を \bxjs@jafont@paren{...} に置き換える。
                       3933 \@onlypreamble\bxjs@resolve@jafont@paren
                       3934 \def\bxjs@resolve@jafont@paren#1{%
                       3935
                             \def\bxjs@tmpb{\let#1}%
                             \expandafter\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1\@nil()\@nil\@nnil#1}
                       3936
                       3937 \verb|\colored] a font@paren@a
                       3938 \def\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1(#2)#3\@nil#4\@nnil#5{%
                            \ifx\relax#4\relax \bxjs@tmpb#5%
                       3939
                       3940
                             \else
                              \edef\bxjs@tmpa{#1\bxjs@jafont@paren{#2}#3}%
                              \bxjs@tmpb\bxjs@tmpa
                       3942
                       3943
                            \fi}
                         ■和文として出力 「欧文扱い」となっている文字を和文として出力するための機能。
                 \jachar \jachar{(文字)}: 和文文字として出力する。
                       3944 \newcommand*\jachar[1]{%
                       3945
                            \begingroup
                         \jsLetHeadChar で先頭の"文字"を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。
                               \jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
                              \ifx\bxjs@tmpa\relax
                       3947
                                \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                       3948
                       3949
                                  {Illegal argument given to \string\jachar}%
                               \else
                       3950
                       3951
                                \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
                               \fi
                       3952
                       3953
                             \endgroup}
                         ∖jsJaChar を \jachar と等価にする。
                       3954 \let\jsJaChar\jachar
                         下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。
                       3955 \let\bxjs@jachar\@firstofone
                         ■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、
                         hyperref 側の処理は無効にしておく。
                       3956 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}
\bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。
                       3957 \Conlypreamble\bxjsCfixChyperrefCunicode
                       3958 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%
```

```
3960
                                                                             \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
                                                                                 \KV@Hyp@unicode{##1}%
                                                               3961
                                                                                 \def\KV@Hyp@unicode####1{%
                                                               3962
                                                                                      \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
                                                               3963
                                                                                            \csname if####1\endcsname\else
                                                               3964
                                                                                           \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                                                               3965
                                                               3966
                                                                                           {Blcoked hyperref option 'unicode=####1'}%
                                                                                      \fi
                                                               3967
                                                                                 }%
                                                               3968
                                                                            }%
                                                               3969
                                                               3970 }
           \jsCheckHyperrefUnicode 「hyperref の unicode オプションの値を検証する」ための本体開始時のフック。
                                                               3971 \@onlypreamble\jsCheckHyperrefUnicode
                                                               3972 \let\jsCheckHyperrefUnicode\@empty
                                                               3973 \verb|\g@addto@macro|\bxjs@begin@document@hook{\jsCheckHyperrefUnicode}|
\bxjs@check@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を本体開始時に検証する。
                                                               3974 \@onlypreamble\bxjs@check@hyperref@unicode
                                                               3975 \def\bxjs@check@hyperref@unicode#1{%
                                                                             \g@addto@macro\jsCheckHyperrefUnicode{%
                                                               3976
                                                               3977
                                                                                 \@tempswafalse
                                                               3978
                                                                                 \begingroup
                                                                                      \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\endcsname\relax
                                                               3979
                                                                                           \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                               3980
                                                                                      \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\expandafter\endcsname
                                                               3981
                                                               3982
                                                                                               \csname if#1\endcsname
                                                               3983
                                                                                           \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                               3984
                                                                                 \endgroup
                                                                                 \if@tempswa\else
                                                               3985
                                                               3986
                                                                                      \ClassError\bxjs@clsname
                                                                                        {The value of hyperref 'unicode' key is not suitable\MessageBreak
                                                               3987
                                                               3988
                                                                                          for the present engine (must be #1)}%
                                                                                        {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath}\amb}\amb}\amb}}}}}}}}}}}}}
                                                               3989
                                                               3990
                                                                                 fi}
                 \bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。
                                                               3991 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
                                                               3992 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special@a
                                                                   LATeX カーネルの新フック管理が導入済かを調べる。未導入の古い版である場合。
                                                               3993 \ifbxjs@old@hook@system
                                                               3994 \def\bxjs@urgent@special#1{%
                                                                             \AtBeginDvi{\special{#1}}%
                                                               3995
                                                                             \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                               3996
                                                                                 \@ifpackageloaded{atbegshi}{%
                                                               3997
                                                               3998
                                                                                      \begingroup
                                                                                           \toks\z@{\special{#1}}%
                                                               3999
```

\PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%

3959

```
\toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
4000
            \xdef\AtBegShi@HookFirst{\the\toks@\the\toks\tw@}%
4001
4002
         \endgroup
4003
       }{}%
     }%
4004
4005 }
 導入済の場合。
 ※自分が先行する必要がある対象のパッケージを適宜追加する。
 ※pxjahyper パッケージの処理と合わせる。
4006 \else
4007
     \def\bxjs@urgent@special#1{%
       \bxjs@urgent@special@a
4008
       \AddToHook{shipout/firstpage}[pxjahyper/enc]{\special{#1}}}
4009
     \def\bxjs@urgent@special@a{%
4010
       \DeclareHookRule{shipout/firstpage}{pxjahyper/enc}{<}{hyperref}%
4011
       \global\let\bxjs@urgent@special@a\relax}
4012
4013 \fi
 C.4 pT<sub>E</sub>X 用設定
4014 \if j\jsEngine
 ■共通命令の実装
4015 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
    \kanjiskip\@tempskipa}
4017 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \xkanjiskip\@tempskipa}
   \jaJaChar のサブマクロ。
4019 \def\bxjs@jachar#1{%
4020 \bxjs@jachar@a#1....\@nil}
4021 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5}\mbox{@nil}{\%}
 引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしてそれをそのまま出力する。
4022 \ifx.#2#1%
 引数が複数トークンの場合は、UTF-8 のバイト列であると見なし、そのスカラー値を
 \@tempcnta に代入する。
4023
     \left( x, \#3 \right)
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
4024
       \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
4025
       \bxjs@jachar@b
4026
     \left\langle x\right\rangle = 1.00
4027
4028
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
4029
       \advance\@tempcnta`#3 \advance\@tempcnta-"E2080
4030
4031
       \bxjs@jachar@b
```

4032

\else

```
\@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
4033
4034
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
4035
       \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
       \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
4036
4037
       \bxjs@jachar@b
     \fi\fi\fi}
4038
 符号値が \@tempcnta の和文文字を出力する処理。
4039 \ifjsWithupTeX
    \def\bxjs@jachar@b{\kchar\@tempcnta}
4041 \else
     \def\bxjs@jachar@b{%
4042
       \ifx\bxUInt\@undefined\else
4043
4044
         \bxUInt{\@tempcnta}%
4045
       fi
4046 \fi
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
4047 \ifbxjs@jaspace@cmd
4048 \def\jathinspace{\hskip\xkanjiskip}
4049 \fi
 ■jis2004 パラメタ pxchfon と pxbabel では 2004JIS を指定するオプションの名が
 prefer2004jis である。
4050 \ifbxjs@jp@jismmiv
     \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxchfon}
     \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxbabel}
4053 \fi
 ■和文フォント指定の扱い pTFX は既定で kanji-config-updmap の設定に従うため、
 \isJaFont が auto の場合は何もする必要がない。無指定でも auto でもない場合は、
 \jsJaFont をオプションにして pxchfon パッケージを読み込む。ここで、和文ドライバパ
 ラメタ font が指定されいる場合は、その値を pxchfon のオプションに追加する。
4054 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
4055 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
4056 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
     \let\bxjs@tmpa\@empty
4058 \else\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
    \def\bxjs@tmpa{noembed}
4059
4060 \fi\fi
4061 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4062 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4063 \ifx\bxjs@tmpa\empty\else
     \edef\bxjs@next{%
4064
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{pxchfon}[2010/05/12]% v0.5
    }\bxjs@next
4066
4067\fi
```

```
■otf パッケージ対策 インストールされている otf パッケージが scale オプションに対
 応している場合は scale=(\jsScale の値) を事前に otf に渡す。
 ※scale 対応は 1.7b6 版 [2013/11/17] から。
 ※ otf.sty の中に「\RequirePackage{keyval}」の行が存在するかにより判定している。
 (もっといい方法はないのか……。)
4068 \begingroup
     \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
4069
4070
     \catcode`\|=0 \catcode`\\=12
      |def|bxjs@tmpdo#1|@nil{%
4071
4072
       |bxjs@tmpdo@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
4073
      |def|bxjs@tmpdo@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
4074
       |ifx$#1$|bxjs@tmpdo@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
     |catcode`|\=0 \catcode`\|=12
4075
     \def\bxjs@tmpdo@b#1keyval#2\@nnil{%
4076
       \fx$#2$\else
4077
         \xdef\bxjs@g@tmpa{%
4078
           \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
4079
4080
       \fi}
4081 \ensuremath{\mbox{\sc ofirstofone}}\%
     \catcode10=12 \endlinechar\m@ne
4082
4083
     \let\do\@makeother \dospecials \catcode32=10
     \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
4084
4085
     \@tempswatrue
     \loop\if@tempswa
4086
       \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
4087
4088
       \if@tempswa
         \read\@inputcheck to\bxjs@next
4089
         \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@next\@nil
4090
4091
     \repeat
4092
4093
     \closein\@inputcheck
4094 \endgroup}
4095 \bxjs@g@tmpa
 ■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。
4096 \ \
4097 \bxjs@check@hyperref@unicode{false}
 暫定的なナニカ。
     \ifjsWithupTeX\ifbxjs@old@hook@system\else
4098
       \IfFileExists{pxjahyper-uni.def}{%
4099
         \AddToHook{package/after/hyperref}{\input{pxjahyper-uni.def}}
4100
       }{}
4101
     \fi\fi
4102
4103 \fi
   tounicode special 命令を出力する。
```

```
4104 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
4105
       \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
4106
     \IfFileExists{pxjahyper-enc.sty}{\@tempswatrue}{\@tempswafalse}
     \if@tempswa
4107
       \RequirePackage{pxjahyper-enc}[2020/10/05]%v0.6
4108
       \ifbxjs@bigcode\else \suppressbigcode \fi
4109
4110
4111
     \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
4112
     \left| \right| 
4113
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
4114
     \else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex
4115
       \ifbxjs@bigcode
4116
         \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
4117
         \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
4118
4119
         \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
4120
         \PassOptionsToPackage{nobigcode}{pxjahyper}
4121
4122
       \fi
     \fi\fi\fi
4123
     \let\bxToUnicodeSpecialDone=t
4125
4126 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で有効とする。 すなわち enable jfam=false
 以外の場合は @enablejfam を真にする。
4127 \ifx f\bxjs@enablejfam\else
4128 \@enablejfamtrue
4129 \fi
   実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
4130 \if@enablejfam
     4131
     \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
     4133
     \jfam\symmincho
4134
4135
     \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
     \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4136
       \ifx\reDeclareMathAlphabet\@undefined\else
4137
         \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\@mathrm}{\@mathrm}{\
4138
         \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathbf}}%
4139
4140
         \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\@mathsf}{\@mathsf}}
4141
       fi
4142 \fi
```

C.5 pdfTFX 用設定:CJK + bxcjkjatype

 $4143 \le p \le p$

```
■bxcjkjatype パッケージの読込 \jsJaFont が指定されている場合は、その値を bxcjkjatype のオプション(プリセット指定)に渡す。(auto ならば \bxjs@get@kanjiEmbed を実行する。) スケール値 (\jsScale) の反映は bxcjkjatype の側で行われる。
```

```
※ Pandoc モードでは autotilde を指定しない。
```

```
4144 \bxjs@adjust@jafont{f}
4145 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
4146 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
```

4147 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}

 $4148 \edgh{\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{\whole}}}$

4149 \def\bxjs@tmpb{pandoc}\ifx\bxjs@tmpb\bxjs@jadriver\else

4150 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{autotilde}}

4151 \fi

4152 \edef\bxjs@next{%

 $\label{localized-local} $$153 \quad \end{RequirePackage[bxjs@tmpa]{bxcjkjatype}[2013/10/15]\% v0.2c.} $$$

4154 }\bxjs@next

 $4155 \slashed$ \bxjs@cjk@loaded

■hyperref 対策 bxcjkjatype 使用時は unicode にするべき。

※取りあえず固定はしない。

4156 \ifbxjs@hyperref@enc

4157 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}

4158 \fi

\hypersetup 命令で(CJK* 環境に入れなくても)日本語文字を含む文書情報を設定できるようにするための細工。

※ bxcjkjatype を whole 付きで使っていることが前提。

※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがその場で展開されてしまう」ため困難である。

```
4159 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
```

4160 \begingroup

4161 \CJK@input{UTF8.bdg}

4162 \endgroup

 $4163 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{\%}$

4164 \@nameuse{CJK@UTF8Binding}%

4165 }

4166 \fi

~ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。

```
4167 \verb|\limins| typeHyperrefPatchDone\\ @undefined
```

 $4168 \verb|\g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%}|$

4169 \ifx~\bxjs@@CJKtilde

4170 \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace

4172 \let~\@empty

4173 \fi

4174 }

```
4175 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
4176 \def\bxjs@@tildecmd{~}
4177 \def\bxjs@LetUnexpandableSpace#1{%
     \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
       \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
     \fi}
4180
4181 \fi
 ■共通命令の実装
4182 \neq 182 
4183 \newskip\jsXKanjiSkip
4184 \ifx\CJKecglue\Qundefined
     \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
4186 \fi
4187 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4188 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4189 \texttt{\protected\def\bxjs@CJKglue\{\hskip\jsKanjiSkip\}}
4190 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
     \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
4192
4193 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4194 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4195 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4196 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \jsXKanjiSkip\@tempskipa
     \let\CJKecglue\bxjs@CJKecglue}
   \jachar のサブマクロの実装。
4199 \def\bxjs@jachar#1{%
4200 \CJKforced{#1}}
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
4201 \ifbxjs@jaspace@cmd
4202 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
4203 \fi
 ■和文数式ファミリ CJK パッケージは(恐らく)数式文字として CJK 文字をサポートし
 ていない。従って @enablejfam は常に偽になる。
4204 \ifx t\bxjs@enablejfam
     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
      {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak
4206
4207
       CJK package does not support Japanese math}
4208 \fi
```

C.6 X₃T_EX 用設定: xeCJK + zxjatype

 $4209 \le x \le x$

■zxjatype パッケージの読込 スケール値(\jsScale)の反映は zxjatype の側で行われる。

```
4210 \RequirePackage{zxjatype}
4211 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
4212 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
4213 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
4214 \ifx\zxJaFamilyName\@undefined
4215 \ClassError\bxjs@clsname
4216 {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc
4217 \fi
```

- ■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして zxjafont を読み込む。非指定の場合は原ノ味フォントを使用する。
- ※ 2.0 版より既定を IPAex から原ノ味に変更。

```
4218 \bxjs@adjust@jafont{f}
```

- 4219 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
- $4220 \verb|\bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa|$
- 4221 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
- 4222 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
- 4223 \setCJKmainfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf]{HaranoAjiMincho-Regular.otf}
- 4224 \setCJKsansfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf]{HaranoAjiGothic-Medium.otf}
- 4225 \else
- 4226 \edef\bxjs@next{%
- 4227 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{zxjafont}[2013/01/28]% v0.2a
- 4228 }\bxjs@next
- 4229 \fi
 - ■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

 $X_{\Xi}T_{\Xi}X$ の場合は、xdvipdfmx が UTF-8 \rightarrow UTF-16 の変換を行う機能を持っているため、本来は special 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、xhyperref での方針としては、x $\Xi}T_{\Xi}X$ の場合にもパッケージ側で文字コード変換を行う方が望ましいと考えている。実際、x unicode を無効にしていると警告が出て強制的に有効化される。一方で、過去(x35125 まで)の x dvipdfmx では、文字列を UTF-16 に変換した状態で与えるのは不正と見なしていて警告が発生する。

これを踏まえて、ここでは、「 $X_{\overline{1}}T_{\overline{1}}X$ のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を 既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

 $4230 \leftarrow XeTeXversion \times (0.99992) > m@ne$

- 4231 \ifbxjs@hyperref@enc
- 4232 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
- 4233 \fi
- 4234 \fi
 - ■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも(少なくとも現

```
従って、\jsInhibitGlueAtParTop は結局何もしないことにする。
         強制改行直後のグルー禁止処理、のような怪しげな何か。
4235 \AtEndOfPackage{%
4236 \def\@gnewline #1{%}
             \ifvmode \@nolnerr
4237
4238
                  \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
4239
                   \nobreak \hskip-1sp\hskip1sp\relax
4240
4241
                   \ignorespaces
            \fi}
4242
4243 }
    ■共通命令の実装
4244 \newskip\jsKanjiSkip
4245 \newskip\jsXKanjiSkip
4246 \ifx\CJKecglue\Qundefined
4247 \quad \def\CJKtilde\{\CJK@global\def~\{\CJKecglue\ignorespaces\}\}
4248 \fi
4249 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4250 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4251 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
4252 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
4253
              \jsKanjiSkip\@tempskipa
              \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
4254
4255 \verb|\lambda| let \verb|\lambda| spacing \verb|\lambda| space of the constraint of the c
4256 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4257 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4258 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
             \jsXKanjiSkip\@tempskipa
              \xeCJKsetup{CJKecglue={\bxjs@CJKecglue}}}
         \mcfamily、\gtfamily は本来は zxjatype の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的
   にここで定義する。
4261 \ifx\mcfamily\@undefined
              \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
             \protected\def\gtfamily{\CJKsfdefault}}
4263
4264 \fi
         \jachar のサブマクロの実装。
4265 \def\bxjs@jachar#1{%
             \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
4266
         \jathinspace の実装。
4268 \ifbxjs@jaspace@cmd
4269 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
4270 \fi
```

状の) xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近い

ものが得られるらしい。

■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で無効とする。すなわち enable jfam=true の場合にのみ @enablejfam を真にする。

4271 \ifx t\bxjs@enablejfam

4272 \@enablejfamtrue 4273 \fi

実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。

※ FIXME: 要検討。

4274 \if@enablejfam

4275 \xeCJKsetup{CJKmath=true}

4276 \fi

C.7 LuaT_FX 用設定: LuaT_FX-ja

4277 \else\if l\jsEngine

■LuaTFX-ja パッケージの読込 luatexja とともに luatexja-fontspec パッケージを読 み込む。

luatexja は自前の \zw(これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す) を定義する ので、\zw の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく \jsZw であることに注意が必要。

※ 1.0b 版から「graphics パッケージに pdftex オプションを渡す」処理を行っていたが、 1.4 版で廃止された。

 $4278 \left| \text{Qundefined} \right|$

4279 \RequirePackage{luatexja}

4280 \edef\bxjs@next{%

\noexpand\RequirePackage[scale=\jsScale]{luatexja-fontspec}[2015/08/26]%

4282 }\bxjs@next

フォント代替の明示的定義。

 $4283 \ensuremath{\mbox{\sc M}} \{it\} \{<-> ssub*mc/m/n\} \{\}$

 $4284 \ensuremath{\mbox{\mbox{1}}{mc}{m}{s1}{<->ssub*mc/m/n}{}}$

 $4285 \ensuremath{\mbox{\mbox{\sim}} \{mc}_{m}\ensuremath{\mbox{\mbox{\sim}}} \ensuremath{\mbox{\sim}} \e$

 $4286 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JY3\} \{gt\} \{m\} \{it\} \{<-> ssub*gt/m/n\} \{\}$

 $4287 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{m\}\{sl\}\{\->ssub*gt/m/n\}\{\}$

 $4288 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{\mbox

 $4289 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \fill \fill$

 $4290 \ensuremath{\mbox{\sc lareFontShape{JY3}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{{}}} \\$

4291 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}

4292 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{b}{n}{<->ssub*mc/bx/n}{}

4293 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{b}{it}{<->ssub*mc/bx/n}{}

 $4294 \ensuremath{\texttt{NeclareFontShape{JY3}{mc}{b}{sl}{<->ssub*mc/bx/n}{}}$

 $4295 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{b\}\{n\}\{<->ssub*gt/bx/n\}\{\}$

 $4296 \ensuremath{\mbox{\sc lareFontShape{JY3}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}{}} \\$

4297 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{b}{s1}{<->ssub*gt/bx/n}{}

 $4298 \ensuremath{\mbox{\mbox{\sim}} \{mc}{m}{it}{<->} ssub*mc/m/n}{}$

 $4299 \verb|\DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{}{}$

```
4300 \end{areFontShape} \label{localize} $$4300 \end{areFontShape} \label{localize} $$4300 \end{areFontShape} $$13}_{mc}_{m}(s) = \end{areFontShape} $$13}_{mc}_{mc}(s) = \end{areFontShape} $$13}_{mc}_{mc}
4301 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{m\}\{it\}\{<->ssub*gt/m/n\}\{\}
4302 \ensuremath{\mbox{\sc hape}{JT3}{gt}{m}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}}
4303 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4304 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{bx}{s1}{<->ssub*gt/m/n}{}
4305 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{jt\} \{bx\} \{it\} \{<-> ssub*gt/m/n\} \{\}
4306 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt} \{bx\} \{sl\} \{<-> ssub*gt/m/n\} \{\} \}
4307 \end{areFontShape} \{JT3\} \{mc\} \{b\} \{n\} \{<->ssub*mc/bx/n\} \{\}
4308 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4309 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{b}{sl}{<->ssub*mc/bx/n}{}
4310 \ensuremath{\mbox{\sc hape}{JT3}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}}
4311 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT3}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}} \\
4312 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT3}{gt}{b}{sl}{<-}ssub*gt/bx/n}{{}}}
        ■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして
        luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は原ノ味フォントを指定する(luatexja-
        preset は読み込まない)。
        ※ 2.0 版より既定を IPAex から原ノ味に変更。
4313 \bxjs@adjust@jafont{t}
4314 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
4315 \def\bxjs@tmpa{noembed}
4316 \fi
4317 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
4318 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4319 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4320 \ifx\bxjs@tmpa\empty
4321
                             \defaultjfontfeatures{ Kerning=Off }
                            \setmainjfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf,JFM=ujis]{HaranoAjiMincho-
                   Regular.otf}
4323 \setsansjfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf,JFM=ujis]{HaranoAjiGothic-
                   Medium.otf}
4324 \else
                            \edef\bxjs@next{%
                                        \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{luatexja-preset}%
4326
4327 }\bxjs@next
4328 \fi
                   欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
        関係の定義を行う。
4329 \c 4329
4330 \DeclareRobustCommand\rmfamily
4331
                               {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
                                    \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
4332
4333 \DeclareRobustCommand\sffamily
                              {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
                                   \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
4335
4336 \DeclareRobustCommand\ttfamily
```

{\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt

```
4338
                      \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
               4339 }
               4340 \lceil \frac{1}{1}
               4341 \unless\ifx\@ltj@match@familytrue\@undefined
                     \@ltj@match@familytrue
               4342
               4343 \fi
               4344 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                     \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}
                     \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
               4346
               4347
                     \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\mathsf}{\mathsf}}%
               4348 \bxjs@if@sf@default{%
                     \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
                 ■和文パラメタの設定
               4350%次の3つは既定値の通り
               4351 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`',10000}}
               4352 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={\ ",10000}}
               4353 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`",10000}}
               4354 \ltjsetparameter{jaxspmode={\ '!,1}}
               4355 \ltjsetparameter{jaxspmode={`\,\tau},2}}
               4356 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
               4357 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}
                 ■段落頭でのグルー挿入禁止 基本的に現状の ltjs* クラスの処理に合わせる。
                 ※\jsInhibitGlueAtParTop は使わない。
\ltjfakeparbegin 現在の LuaTFX-ja で定義されているマクロで、段落中で段落冒頭用の処理を発動する。未
                 定義である場合にに備えて同等のものを用意する。
               4358 \ifx\ltjfakeparbegin\@undefined
                     \protected\def\ltjfakeparbegin{%
               4359
                       \ifhmode
               4360
               4361
                         \relax\directlua{%
               4362
                           luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
               4363
                       fi
               4364 \fi
                   ltjs* クラスの定義と同等になるようにパッチを当てる。
               4365 \verb|\unless| if num \verb|\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@@none| \\
               4366 \begingroup
                     \let\%\@percentchar \def\@#1{[[\detokenize{#1}]]}
               4367
               4368
                     \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{}\fi}}
                     \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@@compat
               4369
                       \label{lem:condition} $$ \end{$\everypar(\everyparhook)\fi} i} \
               4370
                     \directlua{
               4371
               4372
                       local function patchcmd(cs, code, from, to)
                         tex.sprint(code:gsub(from:gsub("\%W", "\%\%0"), "\%0"..to)
               4373
               4374
                           :gsub("macro:", \@\gdef..cs, 1):gsub("->", "{", 1).."}")
```

4375

end

```
patchcmd(\@\@xsect, [[\meaning\@xsect]],
4376
4377
         \@{\hskip-\@tempskipa}, \@\ltjfakeparbegin)
4378
       patchcmd(\@\@item, [[\meaning\@item]],
         \bxjs@tmpa, \@\ltjfakeparbegin)}
4379
4380 \endgroup
4381 \fi
 ■hyperref 対策 unicode にするべき。
 ※ 1.6c 版より、固定ではなく既定設定+検証に切り替えた。
4382 \ifbxjs@hyperref@enc
     \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
     \bxjs@check@hyperref@unicode{true}
4384
4385 \fi
 ■共通命令の実装
4386 \protected\def\autospacing{%
     \ltjsetparameter{autospacing=true}}
4388 \protected\def\noautospacing{%
     \ltjsetparameter{autospacing=false}}
4390 \protected\def\autoxspacing{%}
     \ltjsetparameter{autoxspacing=true}}
4392 \protected\def\noautoxspacing{%
     \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}
4394 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}
4396 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}
   \jachar のサブマクロの実装。
4398 \def\bxjs@jachar#1{%
     \ltjjachar`#1\relax}
   \jathinspace の実装。
4400 \ifbxjs@jaspace@cmd
     \protected\def\jathinspace{%
       \hskip\ltjgetparameter{xkanjiskip}\relax}
4402
4403 \fi
 ■和文数式ファミリ LuaTpX-ja では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要
 な設定は済んでいる。従って @enablejfam は常に真になる。
4404 \ifx f\bxjs@enablejfam
     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
      {You cannot use 'enablejfam=false', since the\MessageBreak
4406
       LuaTeX-ja always provides Japanese math families}
4407
4408 \fi
```

C.8 共通処理 (2)

4409 fififi

■共通命令の実装

■和文空白命令

4427 \fi

* 非数式中では \jathinspace と等価になるように再定義する。※数式中では従来通り (\: と等価)。

```
4418 \ifbxjs@jaspace@cmd
     \bxjs@protected\def\bxjs@choice@jathinspace{%
        \relax\ifmmode \mskip\medmuskip
4420
4421
        \else \jathinspace\ignorespaces
4422
        \fi}
4423
     \jsAtEndOfClass{%
        \ifjsWitheTeX \let\>\bxjs@choice@jathinspace
4424
4425
        \else \def\>{\protect\bxjs@choice@jathinspace}%
4426
        \fi}
```

■和文・和欧文間空白の初期値

```
4428 \setkanjiskip{0pt plus.1\jsZw minus.01\jsZw}
4429 \ifx\jsDocClass\jsSlide \setxkanjiskip{0.1em}
4430 \else \setxkanjiskip{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}
4431 \fi
以上で終わり。
4432 %</standard>
```

付録 D 和文ドライバ: modern 🥞

```
モダーンな設定。
standard ドライバの設定を引き継ぐ。
4433 %<*modern>
4434 \input{bxjsja-standard.def}
```

D.1 フォント設定

```
T1 エンコーディングに変更する。
```

```
※以下のコードは \usepackage [T1] {fontenc} と同等。
```

- 4435 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0
- $4436 \encodingdefault{T1}%$
- $4437 \in \{t1enc.def\}\%$
- 4438 \fontencoding\encodingdefault\selectfont
- 4439 \fi

基本フォントを Latin Modern フォントファミリに変更する。

- ※以下は \usepackage [noamth] {lmodern} と同じ。ユーザは後で lmodern を好きなオプションを付けて読み込むことができる。
- 4440 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z@
- 4441 \renewcommand{\rmdefault}{lmr}
- 4442 \renewcommand{\sfdefault}{lmss}
- $4443 \mbox{ } \mbox{lmtt}{\mbox{lmtt}}$
- 4444 \fi

大型演算子用の数式フォントの設定。

- ※amsfonts パッケージと同等にする。
- 4445 \DeclareFontShape $\{OMX\}\{cmex\}\{m\}\{n\}\{n\}\}$
- 4446 <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%
- 4447 <8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%
- $4448 \exp \text{andafter} \operatorname{OMX/cmex/m/n/10} \operatorname{csname} \operatorname{CMX/cmex/m/n/10}$

amsmath 読込時に上書きされるのを防ぐ。

 $4449 \def\cmex@opt{10}$

D.2 fixltx2e 読込

- ※fixltx2e 廃止前の IATFX カーネルの場合。
- $4450\ \verb|\ifx\OIncludeInRelease\Oundefined|$
- 4451 \RequirePackage{fixltx2e}
- 4452 **\fi**

D.3 和文カテゴリコード

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。 4453 \RequirePackage{bxjscjkcat}

D.4 完了

おしまい。

4454 %</modern>

付録E 和文ドライバ:pandoc 🕸

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

「Pandoc モード」で使用される和文ドライバ。standard ドライバの機能を継承するが、 「Pandoc の既定の latex テンプレート」が使われることを前提として、それと BXJS の設定 を整合させるための措置を加えている。

E.1 準備

```
4455 %<*pandoc>
4456 \input{bxjsja-standard.def}
    bxjspandoc パッケージを読み込む。
4457 \RequirePackage{bxjspandoc}
    \varepsilon-T<sub>F</sub>X ではない場合に警告を出す。
 ※近い将来に \varepsilon-TFX 拡張を必須にする予定。
4458 \ \text{ifjsWitheTeX} \
```

\ClassWarningNoLine\bxjs@clsname 4460 {!!!!!!!! WARNING !!!!!!!\MessageBreak This engine does not support e-TeX extension!\MessageBreak 4462 Some feature might not work properly} 4463 \fi

\bxjs@endpreamble@hook etoolbox の \AtEndPreamble で実行される BXJS クラス用のフック。

 $% \varepsilon$ -T_FX 以外では無効になる。(将来 pandoc の外に出す可能性あり。)

4464 \@onlypreamble\bxjs@endpreamble@hook

4465 \let\bxjs@endpreamble@hook\@empty

パッケージ読込。

4466 \RequirePackage{iftex}[2013/04/04]% v0.2

4467 \ifjsWitheTeX

\RequirePackage{etoolbox}[2010/08/21]% v2.0 4468

\AtEndPreamble{\bxjs@endpreamble@hook}

4470 \RequirePackage{filehook}[2011/10/12]% v0.5d

4471 \fi

E.2 和文ドライバパラメタ

keyval のファミリは bxjsPan とする。

\ifbxjs@jp@fix@strong 重要要素を補正するか。

 $4472 \verb|\newif\\| if bxjs@jp@fix@strong \bxjs@jp@fix@strongtrue \\$

fix-strong オプションの処理。

4473 \let\bxjs@kv@fixstrong@true\bxjs@jp@fix@strongtrue

```
4474 \verb|\let\bxjs@kv@fixstrong@false\bxjs@jp@fix@strongfalse|
                       4475 \define@key{bxjsPan}{fix-strong}[true]{%
                            \bxjs@set@keyval{fixstrong}{#1}{}}
       \ifbxjs@jp@fix@code インラインコード要素を補正するか。
                       4477 \newif\ifbxjs@jp@fix@code \bxjs@jp@fix@codetrue
                          fix-code オプションの処理。
                       4478 \let\bxjs@kv@fixcode@true\bxjs@jp@fix@codetrue
                       4479 \let\bxjs@kv@fixcode@false\bxjs@jp@fix@codefalse
                       4480 \define@key{bxjsPan}{fix-code}[true]{%
                            \bxjs@set@keyval{fixcode}{#1}{}}
          \bxjs@jp@strong 重要要素に適用される書体変更の種類。
                       4482 \chardef\bxjs@jp@strong=0
                          strong オプションの処理。
                       4483 \def\bxjs@kv@strong@bold{\chardef\bxjs@jp@strong=0 }
                       4484 \def\bxjs@kv@strong@sans{\chardef\bxjs@jp@strong=1 }
                       4485 \def\bxjs@kv@strong@boldsans{\chardef\bxjs@jp@strong=2 }
                       4486 \define@key{bxjsPan}{strong}{%
                            \bxjs@set@keyval{strong}{#1}{}}
      \ifbxjs@jp@or@indent プレアンブルでのレイアウト上書きを許可するか。既定値は真。
 クラスで pandoc+ が指定された場合、内部和文パラメタ plus が和文ドライバに渡され
                         る。この場合、レイアウト上書きを禁止する。
                         ※_plus は必ずパラメタ列の先頭にあるので、個別のパラメタ設定の方が常に優先される。
                       4491 \define@key{bxjsPan}{_plus}[]{%
                       4492 \bxjs@jp@or@indentfalse
                       4493 \bxjs@jp@or@secnumdepthfalse
                           \bxjs@jp@or@block@headingfalse}
                           レイアウト上書き許可オプション (or-indent · or-secnumdepth · or-block-heading)
                       4495 \let\bxjs@kv@orindent@true\bxjs@jp@or@indenttrue
                       4496 \verb|\let\bxjs@kv@orindent@false\bxjs@jp@or@indentfalse|
                       4497 \define@key{bxjsPan}{or-indent}[true]{%
                            \bxjs@set@keyval{orindent}{#1}{}}
                       4499 \verb|\let\bxjs@kv@orsecnumdepth@true\bxjs@jp@or@secnumdepthtrue| \\
                       4500 \let\bxjs@kv@orsecnumdepth@false\bxjs@jp@or@secnumdepthfalse
                       4501 \define@key{bxjsPan}{or-secnumdepth}[true]{%
                            \bxjs@set@keyval{orsecnumdepth}{#1}{}}
                       4503 \let\bxjs@kv@orblockheading@true\bxjs@jp@or@block@headingtrue
                       4504 \verb|\let\bxjs@kv@orblockheading@false\bxjs@jp@or@block@headingfalse| \\
                       4505 \define@key{bxjsPan}{or-block-heading}[true]{%
```

```
4506 \bxjs@set@keyval{blockheading}{#1}{}}
実際の japaram の値を適用する。
4507 \def\bxjs@next#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsPan}{#1}}
```

 $4508 \verb|\expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}|$

E.3 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに"option clash"の検査をスキップする。この時に何らかのコードを実行させることができる。

\bxjs@set@dupload@proc

- 4509 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc
- 4510 \def\bxjs@set@dupload@proc#1{%
- 4511 \expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname bxjs@dlp/#1\endcsname}
- 4512 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a
- $4513 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@set@dupload@proc@a#1{\%}}}$
- 4514 \@onlypreamble#1\def#1##1}
- 4515 \def\bxjs@unset@dupload@proc#1{%
- 4516 \expandafter\let\csname bxjs@dlp/#1\endcsname\@undefined}

\@if@ptions \@if@ptions の再定義。

- $4517 \verb|\@onlypreamble\bxjs@org@if@ptions|$
- $4518 \verb|\let\bxjs@org@if@ptions\ledo| 4518 \verb|\l$
- $4519 \verb|\conlypreamble\bxjs@org@reset@ptions|\\$
- 4520 \let\bxjs@org@reset@ptions\relax
- 4521 \def\@if@ptions#1#2#3{%
- 4522 \let\bxjs@next\@secondoftwo
- 4523 \def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currext}%
- 4524 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
- 4526 \let\bxjs@next\@firstoftwo \fi
- 4527 \fi
- $4528 $$ \bxjs@next\bxjs@do@dupload@proc\bxjs@org@if@ptions{#1}{#2}{#3}}$
- 4529 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
- 4530 \let\@if@ptions\bxjs@org@if@ptions}
- $4531 \verb|\@onlypreamble\bxjs@do@dupload@proc|$
- $4532 \ensuremath{\mbox{\sc do@dupload@proc#1#2#3}}\%$
- 4533 \ifx\bxjs@org@reset@ptions\relax
- 4534 \let\bxjs@org@reset@ptions\@reset@ptions
- 4535 \fi
- $4536 \qquad \texttt{\bxjs@csletcs{bxjs@next}{bxjs@dlp/\#2.\#1}\%}$
- 4537 \def\@reset@ptions{%
- 4538 \let\@reset@ptions\bxjs@org@reset@ptions
- 4539 \@reset@ptions

4540 \bxjs@next{#3}}%

4541 \@firstoftwo}

E.4 lang 変数

lang=ja という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐための対策を行う。

\bxjs@polyglossia@options Polyglossia のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。

4542 \let\bxjs@polyglossia@options\relax

\bxjs@babel@options Babel のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。
4543 \let\bxjs@babel@options\relax

- ■Polyglossia について つまり X¬T¬X · LuaT¬X の場合。
- ※この場合 etoolbox が使用可能になっている。
- $4544 \in x\$ x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>0

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

- 4545 \pandocSkipLoadPackage{polyglossia}
- 4546 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
- 4547 \bxjs@unset@dupload@proc{polyglossia.sty}%
- 4548 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4549 {Package polyglossia is required}%
- 4550 \def\bxjs@polyglossia@options{#1}%

polyglossia の読込が指示された場合、直後に \setmainlanguage が実行されることを 想定して、フック用の \setmainlanguage を定義する。

- ※先に \setmainlanguage 以外が実行された場合はエラーになる。
- 14551 \newcommand*\setmainlanguage[2][]{%

もし、言語名が空の \setmainlanguage{} が実行された場合は、lang=ja が指定されたと見なす。

- 4552 \ifblank{##2}{%
- 4553 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4554 {Main language is invalid, thus the fallback\MessageBreak
- 4555 definitions will be employed}%
- 4556 \bxjs@pandoc@polyglossia@ja

言語名が japanese だった場合も同様。

- $4557 \qquad {\ifstrequal{\#2}{japanese}{\%}}$
- 4558 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4559 {Main language is japanese, thus the fallback\MessageBreak
- 4560 definitions will be employed}%
- 4561 \bxjs@pandoc@polyglossia@ja

言語名が非空ならば、本来の polyglossia の処理を実行する。

```
4562
       }{%else
         \ClassWarning\bxjs@clsname
4563
          {Main language is valid (##2),\MessageBreak
4564
           thus polyglossia will be loaded}%
4565
4566
         \csundef{ver@polyglossia.sty}%
         \edef\bxjs@next{%
4567
           \noexpand\RequirePackage[\bxjs@polyglossia@options]{polyglossia}[]%
4568
         }\bxjs@next
4569
4570
         \setmainlanguage[##1]{##2}%
4571
       }}}
   プレアンブルで polyglossia の読込が指示されなかった場合、Polyglossia と連携する
 パッケージの誤動作を防ぐため、読込済マークを外す。
4572 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%
     \ifx\bxjs@polyglossia@options\relax
4574
       \csundef{ver@polyglossia.sty}%
4575
     fi
```

\bxjs@pandoc@polyglossia@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。この場合は Polyglossia の処理を無 効化するためにダミーの定義を行う。その時点でダミーの \setotherlanguage(s) を定義

> ※現在では Polyglossia の日本語用の定義ファイル(gloss-japanese.ldf)が存在するの で、本来なら普通に処理できるはずであるが、現状の定義ファイルはアレなので回避したい。

```
4576 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@polyglossia@ja
4577 \def\bxjs@pandoc@polyglossia@ja{%
     \renewcommand*\setmainlanguage[2][]{}%
4578
     \newcommand*\setotherlanguage[2][]{%
4579
4580
       \left\{ \#2\right\} 
         \cslet{##2}\@empty \cslet{end##2}\@empty
4581
         \cslet{text##2}\@firstofone}}%
4582
     \newcommand*\setotherlanguages[2][]{%
4583
4584
       \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}%
4585
```

Polyglossiaの読込済マークは外れるようにしておく。

\let\bxjs@polyglossia@options\relax}% 4586

4587\fi

■Babel について X¬T¬X 以外の場合。

※ Pandoc 2.6 版において、LuaT_FX で用いられる多言語パッケージが Polyglossia から Babelに変更された。

4588 \if x\jsEngine\else

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

4589 \pandocSkipLoadPackage{babel}

4590 \bxjs@set@dupload@proc{babel.sty}{%

```
\ClassWarning\bxjs@clsname
                                                4592
                                                                {Package babel is required}%
                                                4593
                                                    パッケージオプションに言語名が空の main= があるかを調べる。ある場合は lang=ja 対策
                                                     を実行する。
                                                    ※\bxjs@babel@options には main= を除いたオプション列を格納する。
                                                              \@tempswafalse \let\bxjs@babel@options\@empty
                                                4595
                                                              \def\bxjs@tmpb{main=}%
                                                              \@for\bxjs@tmpa:=#1\do{%
                                                4596
                                                                  \verb|\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb| \end{|c|} $$ \
                                                4597
                                                4598
                                                                  \else \edef\bxjs@babel@options{\bxjs@babel@options,\bxjs@tmpa}%
                                                                  fi}%
                                                4599
                                                             \if@tempswa
                                                4600
                                                                  \ClassWarning\bxjs@clsname
                                                4601
                                                                     {Main language is invalid, so fallback\MessageBreak
                                                4602
                                                4603
                                                                       definitions will be employed}%
                                                4604
                                                                  \bxjs@pandoc@polyglossia@ja
                                                    ない場合は、本来の babel の処理を実行する。
                                                4605
                                                4606
                                                                  \ClassWarning\bxjs@clsname
                                                                     {Main language is valid, \MessageBreak
                                                4607
                                                                       thus babel will be loaded}%
                                                4608
                                                                  \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                                                4609
                                                4610
                                                                  \RequirePackage[#1]{babel}[]%
                                                             fi
                                                4611
                                                         プレアンブルで babel の読込が指示されなかった場合、読込済マークを外す。
                                                4612 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%
                                                             \ifx\bxjs@babel@options\relax
                                                                  \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                                                4614
                                                4615
                                                             fi
\bxjs@pandoc@babel@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。
                                                4616 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@babel@ja
                                                4617 \def\bxjs@pandoc@babel@ja{%
                                                4618
                                                              \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
                                                4619
                                                              \edef\bxjs@next{%
                                                                  \noexpand\RequirePackage[\bxjs@babel@options,english]{babel}[]%
                                                4620
                                                             }\bxjs@next
                                                4621
                                                4622
                                                              \if j\jsEngine
                                                                  \RequirePackage[main=japanese]{pxbabel}[]%
                                                4623
                                                4624
                                                                  \RequirePackage{bxorigcapt}[]%
                                                4625
                                                4626
                                                             \fi}
                                                        lang 対策はこれで終わり。
                                                4627\fi
```

\bxjs@unset@dupload@proc{babel.sty}%

4591

E.5 geometry 変数

geometry を "再度読み込んだ"場合に、そのパラメタで \setpagelayout* が呼ばれるようにする。

```
4628 \bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{% 4629 \setpagelayout*{#1}}
```

E.6 CJKmainfont 変数

LuaT_EX (+ LuaTeX-ja) の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```
4630 \if 1\jsEngine
4631 \pandocSkipLoadPackage{xeCJK}
4632 \providecommand*{\setCJKmainfont}{\setmainjfont}
4633 \fi
```

E.7 Option clash 対策

```
xeCJK パッケージについて。
```

※xeCJK はクラス内で既に読み込まれているので、space は(意図通りに)無効になる。

```
※ v2.8~v2.9.2 の間。
4634 \if x\jsEngine
```

 $4635 \qquad \texttt{\expandafter} \\ \texttt{\$

4636 ,space}

4637 \fi

E.8 レイアウト上書き禁止

レイアウト上書き禁止の実装は etoolbox の機能を使う。

```
4638 \ifjsWitheTeX
4639 \@onlypreamble\bxjs@info@or@ban
4640 \def\bxjs@info@or@ban#1{%
4641 \PackageInfo\bxjs@clsname
4642 \{Freeze layout on '#1',\MessageBreak detected}}
```

■indent について indent 変数を指定しない場合に「段落表現形式をインデント方式に変更する」動作を抑止する。

```
4643 \unless\ifbxjs@jp@or@indent
4644 \bxjs@info@or@ban{indent}
```

parskip がある場合はそれを読み込もうとするため、parskip の読込をブロックする。

```
4645 \IfFileExists{parskip.sty}{\%}
```

4646 \pandocSkipLoadPackage{parskip}%

parskip がない場合はパラメタを変更しようとするため、該当のパラメタを復帰させる。

```
4647
     }{%else
        \eappto\bxjs@endpreamble@hook{%
4648
          \parindent=\the\parindent\relax
4649
4650
          \parskip=\the\parskip\relax}}
4651 \fi
4652 %
4653 % \paragraph{secnumdepth について}
4654 % |secnumdepth| の値を決めるのは numbersections 変数
4655 % (|-N|/|--number-sections| オプションに連動する)
4656% や secnumdepth 変数であるが、何れにしても |secnumdepth|
4657% の値は書き換えられる。
4658% そのため、|secnumdepth| を復帰させる。
4659 \ifbxjs@jp@or@secnumdepth\else
4660
     \bxjs@info@or@ban{secnumdepth}
      \eappto\bxjs@endpreamble@hook{%
        \c@secnumdepth=\the\c@secnumdepth\relax}
4662
4663 \fi
4664 %
4665 % \paragraph{block-heading について}
4666 \ifbxjs@jp@or@block@heading\else
     \let\bxjs@frozen@paragraph\paragraph
     \let\bxjs@frozen@subparagraph\subparagraph
4668
4669
     \bxjs@info@or@ban{block-heading}
     \appto\bxjs@endpreamble@hook{%
4670
4671
      \let\oldparagraph\@undefined
     \let\paragraph\bxjs@frozen@paragraph
     \let\subparagraph\bxjs@frozen@subparagraph}
4674 \fi
4675 \fi
```

E.9 paragraph のマーク

BXJS クラスでは \paragraph の見出しの前に \jsParagraphMark で指定したマークが付加され、既定ではこれは "■"である。しかし、この規定は \paragraph が本来のレイアウトを保っている、すなわち「行内見出しである」「節番号が付かない」ことが前提になっていると考えられる。Pandoc はこの規定を変更することがある(特に既定で \paragraphを別行見出しに再定義する)ため、変更された場合は \jsParagraphMark の既定値を空にする。

Pandoc がプレアンブルで行う再定義の結果を調べるため、begin-document フックを利用する。

 $4676 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\%}$

4677 \@tempswafalse

まず、マーク変更が必要かを調べる。\oldparagraph という制御綴が定義済の場合、Pandocが \paragraph の様式を変更したということなので、マーク変更が必要である。

```
4678
     \ifx\oldparagraph\@undefined\else
4679
       \@tempswatrue
4680
 \paragraph が番号付きの場合は、マーク変更が必要である。
     \ifnum\c@secnumdepth>3
4682
      \@tempswatrue
4683
     \fi
 「マーク変更が必要」である場合、\jsParagraphMark が既定値のままであれば空に変更
 する。
     \if@tempswa\ifx\jsParagraphMark\bxjs@org@paragraph@mark
4684
4685
      \let\jsParagraphMark\@empty
```

E.10 全角空白文字

\fi\fi}

4686

```
4687 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>\z@
4688 \catcode"3000=\active
4689 \begingroup \catcode`\!=7
4690 \protected\gdef!!!!3000{\zwspace}
4691 \endgroup
4692 \else\ifx\DeclareUnicodeCharacter\@undefined\else
4693 \DeclareUnicodeCharacter{3000}{\bxjs@zsp@char}
4694 \bxjs@protected\def\bxjs@zsp@char{\zwspace}
4695 \fi\fi
```

E.11 hyperref 対策

```
hyperref の unicode オプションの固定を行う。
4696 \if j\jsEngine
4697 \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
4698 \else
4699 \bxjs@fix@hyperref@unicode{true}
4700 \fi
```

E.12 Pandoc 要素に対する和文用の補正

■重要要素 重要 (Strong) 要素に対する IATEX 出力は \textbf となるが、代わりに \strong を使いたいため、\textbf を書き換えてしまう (うわぁ)。

```
4701 \ifbxjs@jp@fix@strong\ifbxjs@jp@strong@cmd
4702 \let\orgtextbf\textbf
4703 \DeclareRobustCommand\bxjstextbf[1]{%
4704 \begingroup
4705 \let\textbf\orgtextbf
4706 \strong{#1}%
4707 \endgroup}%
4708 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
```

```
4709
       \let\textbf\bxjstextbf}
4710 \fi\fi
   \strong の書体を設定する。
4711 \jsAtEndOfClass{%
    \ifx\strongfontdeclare\@undefined\else
       \ifcase\bxjs@jp@strong
       \or \strongfontdeclare{\sffamily}%
4714
       \or \strongfontdeclare{\sffamily\bfseries}%
4715
       \fi
4716
4717
     \fi}
 ■インラインコード要素 インラインコード (Code) 要素に対する IATEX 出力は \texttt
 となる。\texttt の両端に欧文ゴーストが入るようにする。
4718 \ifbxjs@jp@fix@code
     \chardef\bxjs@eghost@c=23
     \ifx j\jsEngine \xspcode\bxjs@eghost@c=3
4720
4721
     \else\ifx l\jsEngine \ltjsetparameter{alxspmode={\bxjs@eghost@c,3}}
4722
     \else\ifx x\jsEngine %no-op
     \else \let\bxjs@eghost@c\@undefined
4723
     \fi\fi\fi
4724
4725
     \ifx\bxjs@eghost@c\@undefined\else
       \font\bxjs@eghost@f=ec-lmr10 at 1.23456pt
4726
4727
       \def\bxjs@pan@eghost{\bgroup\bxjs@eghost@f\bxjs@eghost@c\egroup}
       \let\orgtexttt\texttt
4728
4729
       \DeclareRobustCommand\bxjstexttt[1]{%
         \ifmmode \nfss@text{\ttfamily #1}%
4730
4731
         \else
           \ifvmode \leavevmode \fi
           \bxjs@pan@eghost\null
4733
           \begingroup \ttfamily #1\endgroup
4734
4735
           \null\bxjs@pan@eghost
         \fi}
4736
       \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4737
4738
         \let\texttt\bxjstexttt}
  さらに \verb の外側にも欧文ゴーストが入るようにする。
 ※bxjaghost の実装を参考にした。
       \expandafter\def\expandafter\verb\expandafter{%
4739
4740
         \expandafter\bxjs@pan@eghost\verb}
4741
       \g@addto@macro\verb@egroup{\bxjs@pan@eghost}
    \fi
4742
4743 \fi
```

E.13 ifPDFTeX スイッチ

Pandoc モードでは Pandoc の既定テンプレートを(無理やり)(u)p T_EX に対応させることを目的にしている。

旧版のテンプレートではifxetex とifluatex パッケージを読み込んだ上で「 $X_{\Xi}T_{E}X$ でも $LuaT_{E}X$ でもないものは $pdfT_{E}X$ 」という前提の動作をしていた。よって、 $(u)pT_{E}X$ に対応させる際には「 $pdfT_{F}X$ 用の処理が実行される」ことを前提にすればよかった。

ところが、Pandoc の 2.12 版ではiftex パッケージが導入されて「pdf T_EX の判定を直接 \ifPDFTeX で行う」ように改修された。このため、 $(u)pT_EX$ での実行でどのコードが実行されるかを予期することが困難になってしまった。

これに対処するため、「文書ファイルのプレアンブル実行中に限って \ifPDFTeX が(実際 とは異なり)真になるようにする」という細工を施すことで、従来通り「pdfTeX 用の処理 が実行される」前提が維持されるようにする。

4744 \if j\jsEngine

\bxjs@check@frontier \bxjs@check@frontier\CS は現在のパッケージ読込ネストレベルが丁度 1 であるときにのみ \CS を実行する。

- 4745 \def\bxjs@check@frontier{%
- 4746 \expandafter\bxjs@check@frontier@a\@currnamestack\noindent...\@nil}
- $4747 \quad \texttt{\def\bxjs@check@frontier@a\#1\#2\#3\#4\#5\@nil\#6\{\%, 0\})} \\$
- 4748 \ifx\noindent#4#6\fi}

\bxjs@unforge@ifPDFTeX \ifPDFTeX を偽(正しい値)にする。

- 4749 \@onlypreamble\bxjs@unforge@ifPDFTeX
- $4750 $$ \def\bxjs@unforge@ifPDFTeX{\global\bxjs@csletcs\{ifPDFTeX\}\{iffalse\}\} $$$

\bxjs@forge@ifPDFTeX \ifPDFTeX を真(偽装した値)にする。

- 4751 \@onlypreamble\bxjs@forge@ifPDFTeX
- $4752 $$ \def\bxjs@forge@ifPDFTeX{\global\bxjs@csletcs{ifPDFTeX}{iftrue}} $$

\bxjs@unload@forge@ifPDFTeX \ifPDFTeX に対する細工を無効化する。

- 4753 \def\bxjs@unload@forge@ifPDFTeX{%
- 4754 \bxjs@unforge@ifPDFTeX
- 4755 \global\let\bxjs@check@frontier\@gobble}

プレアンブル開始時は \ifPDFTeX は真で、終了時に偽装を無効化する。filehook のフックで「パッケージ読込中は偽装を解除する」ことを実現している。

- 4756 \jsAtEndOfClass{\bxjs@forge@ifPDFTeX}
- 4757 \ifjsWitheTeX
- 4758 \AtBeginOfEveryFile{\bxjs@check@frontier\bxjs@unforge@ifPDFTeX}%
- 4759 \AtEndOfEveryFile{\bxjs@check@frontier\bxjs@forge@ifPDFTeX}%
- 4760 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{\bxjs@unload@forge@ifPDFTeX}
- 4761 \else
- $\tt 4762 $$ \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\bxjs@unload@forge@ifPDFTeX}$$
- 4763 \fi
- 4764 \fi

E.14 完了

おしまい。

4765 %</pandoc>

和文ドライバ実装はここまで。

4766 %</drv>

付録 F 補助パッケージー覧 湾

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込んで利用することもできる。

• bxjscompat: ムニャムニャムニャ。

• bxjscjkcat: modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

• bxjspandoc: Pandoc 用のナニカ。

4767 %<*anc>

付録 G 補助パッケージ: bxjscompat 🕾

ムニャムニャムニャ……。

G.1 準備

4768 %<*compat>

4769 \def\bxac@pkgname{bxjscompat}

\bxjx@engine エンジンの種別。

4770 \let\bxac@engine=n

 $4771 \ensuremath{\mbox{\sc 0do#1#2}}\$

4772 \edef\bxac@tmpa{\string#1}%

4773 \edef\bxac@tmpb{\meaning#1}%

4774 \ifx\bxac@tmpa\bxac@tmpb #2\fi}

4775 \bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}

 $4776 \verb|\bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=1}|$

\bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの終わりまで実行を遅延する。

 $4777 \verb|\ifx\jsAtEndOfClass\@undefined|$

4778 \let\bxac@delayed@if@bxjs\@firstofone

 $4779 \verb|\else \let\bxac@delayed@if@bxjs\jsAtEndOfClass|$

 $4780\; \backslash \texttt{fi}$

\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。

\RevokeOldLuaTeXBehavior4781 \newif\ifbxac@in@old@behavior

4782 \let\ImposeOldLuaTeXBehavior\relax

4783 \let\RevokeOldLuaTeXBehavior\relax

G.2 X_{TF}X 部分

```
4784 \ifx x\bxac@engine
                                                                        XFTFX 文字クラスのムニャムニャ。
                                                              4785 \@onlypreamble\bxac@adjust@charclass
                                                              4786 \bxac@delayed@if@bxjs{%
                                                                             \@ifpackageloaded{xeCJK}{}{\%else
                                                              4787
                                                              4788
                                                                                   \ifx\xe@alloc@intercharclass\@undefined\else
                                                              4789
                                                                                             \ifnum\xe@alloc@intercharclass=\z@
                                                                                        \PackageInfo\bxac@pkgname
                                                              4790
                                                              4791
                                                                                             {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%
                                                                                        \InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%
                                                              4792
                                                              4793
                                                                                             \xe@alloc@intercharclass=3
                                                                                             \PackageWarning\bxac@pkgname
                                                              4795
                                                                                                  {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
                                                              4796
                                                                                                     \@gobble}%
                                                              4797
                                                                                        }%
                                                              4798
                                                              4799
                                                                                   \fi\fi
                                                              4800
                                                                                   \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z@
                                                              4801
                                                                                        \PackageInfo\bxac@pkgname
                                                              4802
                                                                                             {Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%
                                                                                        \ensuremath{\texttt{Qfor\bxac@x:=}}
                                                              4803
                                                              4804
                                                                                             3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
                                                                                             3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
                                                              4805
                                                              4806
                                                                                             30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
                                                              4807
                                                                                             31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
                                                              4808
                                                                                        }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
                                                              4809
                                                                                  \fi
                                                              4810
                                                              4811
                                                                            }%
                                                              4812 }
                                                                  以上。
                                                              4813 \fi
                                                                                 LuaTEX 部分
                                                                  G.3
                                                              4814 \ifx 1\bxac@engine
                                                                        ムニャムニャ。
                                                              4815 \unless\ifnum\luatexversion<80 \ifnum\luatexversion<85
                                                                             \chardef\pdftexversion=200
                                                                             \def\pdftexrevision{0}
                                                                            \let\pdftexbanner\luatexbanner
                                                              4818
                                                              4819 \fi\fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4820 \verb|\logingroup| expandafter \verb|\expandafter| expandafter \verb|\expandafter| expandafter \verb|\expandafter| expandafter| expandafter \verb|\expandafter| expandafter| expandafter \verb|\expandafter| expandafter| expandafter| expandafter expandafter| expandafter
```

 $4821 \exp \text{andafter} \$ output mode \endcsname \relax \else

```
4822 \def\bxac@ob@list{%
4823
      \do{\let}\pdfoutput{\outputmode}%
      \do{\let}\pdfpagewidth{\pagewidth}%
4824
      \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
4825
      \do{\protected\edef}\pdfhorigin{{\pdfvariable horigin}}%
4826
      \do{\protected\edef}\pdfvorigin{{\pdfvariable vorigin}}}
4827
4828 \def\bxac@ob@do#1#2{\begingroup}
      \expandafter\bxac@ob@do@a\csname bxac@\string#2\endcsname{#1}#2}
4830 \end{def} \bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup}
      \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
4831
      \else \let#3#1\relax \let#1\@undefined
4832
4833
4834 \texttt{\protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior\{\%\})}
     \unless\ifbxac@in@old@behavior
4835
        \bxac@in@old@behaviortrue
4836
4837
        \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
      \fi}
4838
4839 \protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%
4840
     \ifbxac@in@old@behavior
        \bxac@in@old@behaviorfalse
4841
        \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
     \fi}
4843
4844 \fi
   漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニャムニャ。
      \ifnum\luatexversion>64 \directlua{
4845
        local function range(cs, ce, cc, ff)
4846
4847
          if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
4848
            local setcc = tex.setcatcode
            for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
4849
4850
4851
        end
        range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
4852
4853
        range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
        range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
4854
        range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
4855
        range(0xACOO, 0xD7A3, 11, false)
4856
        range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
4857
        range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
4858
        range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
4859
4860
        range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
4861
        range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
        range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)
4862
        range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
4863
4864
        range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
4865
     }\fi
   以上。
4866 \fi
```

G.4 完了

おしまい。

4867 %</compat>

付録 H 補助パッケージ: bxjscjkcat 🕾

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

H.1 準備

```
4868 %<*cjkcat>
            4869 \def\bxjx@pkgname{bxjscjkcat}
            4870 \newcount\bxjx@cnta
            4871 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo
            4872 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@a
            4873 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@b
\bxjx@engine エンジンの種別。
            4874 \let\bxjx@engine=n
            4875 \def\bxjx@tmpdo#1#2{%}
            4876
                  \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
                  \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
                  \ifx\bxjx@tmpa\bxjx@tmpb #2\fi}
            4879 \bxjx@tmpdo\kanjiskip{\let\bxjx@engine=j}
            4880 \bxjx@tmpdo\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
            4881 \verb|\bxjx@tmpdo\XeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}|
            4882 \bxjx@tmpdo\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
            4883 \bxjx@tmpdo\luatexversion{\let\bxjx@engine=1}
                それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを
              検査する。
            4884 \def\bxjx@tmpdo#1#2{%
                  \if#1\bxjx@engine
            4885
                    \ensuremath{\tt @ifpackageloaded{\#2}{}}{\ensuremath{\tt welse}}
            4886
            4887
                       \PackageError\bxjx@pkgname
                        {Package '#2' must be loaded}%
            4888
                        {Package loading is aborted.\MessageBreak\@ehc}%
            4889
                       \endinput}
            4890
                  fi
            4891
            4892 \bxjx@tmpdo{p}{bxcjkjatype}
            4893 \t x \t mpdo{x} \t xeCJK}
            4894 \bxjx@tmpdo{1}{luatexja}
                古い LATEX の場合、\TextOrMath は fixltx2e パッケージで提供される。
            4895 \verb|\frac{1}{1} extOrMath\\ @undefined
            4896 \RequirePackage{fixltx2e}
```

H.2 和文カテゴリコードの設定

upIdTeX の場合、和文カテゴリコードの設定を LuaTeX-ja と(ほぼ)等価なものに変更する。

```
※ LuaT<sub>F</sub>X-ja との相違点: A830、A960、1B000。
4898 \if u\bxjx@engine
4899 \@for\bxjx@tmpa:={%
4900 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
4901 0700,0750,0780,07C0,0800,0840,0860,08A0,0900,0980,%
4902 OAOO, OA80, OBOO, OB80, OCOO, OC80, ODOO, OD80, OEOO, OE80, %
4903 OFOO, 1000, 10A0, 1200, 1380, 13A0, 1400, 1680, 16A0, 1700, %
4904 1720, 1740, 1760, 1780, 1800, 18B0, 1900, 1950, 1980, 19E0, %
4905 1A00, 1A20, 1AB0, 1B00, 1B80, 1BC0, 1C00, 1C50, 1C80, 1CC0, %
4906 1CDO,1D00,1D80,1DCO,1E00,1F00,2440,27C0,27F0,2800,%
4907 2A00,2C00,2C60,2C80,2D00,2D30,2D80,2DE0,2E00,4DC0,%
4908 A4D0, A500, A640, A6A0, A700, A720, A800, A830, A840, A880, %
4909 A8EO, A900, A930, A980, A9EO, AA00, AA60, AA80, AAEO, AB00, %
4910 AB30, AB70, ABC0, D800, DB80, DC00, E000, FB00, FB50, FE00, %
4911 FE70, FFF0, %
4912 10000,10080,10100,10140,10190,101D0,10280,102A0,%
4913 102E0, 10300, 10330, 10350, 10380, 103A0, 10400, 10450, %
4914 10480,104B0,10500,10530,10600,10800,10840,10860,%
4915 10880, 108E0, 10900, 10920, 10980, 109A0, 10A00, 10A60, %
4916 10A80,10AC0,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,%
4917 10E60,11000,11080,110D0,11100,11150,11180,111E0,%
4918 11200,11280,112B0,11300,11400,11480,11580,11600,%
4919 11660,11680,11700,118A0,11A00,11A50,11AC0,11C00,%
4920 11C70,11D00,12000,12400,12480,13000,14400,16800,%
4921 16A40,16AD0,16B00,16F00,1BC00,1BCA0,1D000,1D100,%
4922 1D200,1D300,1D360,1D400,1D800,1E000,1E800,1E900,%
4923 1EE00, 1F000, 1F030, 1F0A0, 1F300, 1F600, 1F650, 1F680, %
4924 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,E0100,F0000,100000,%
4925 00C0%
4926 }\do{%
4927 \@tempcnta="\bxjx@tmpa\relax
4928\ensuremath{\verb|@tempcntb||} advance\ensuremath{\verb|@tempcntb||} m@ne
4929 \chardef\bxjx@tmpb\kcatcode\@tempcntb
4930 \kcatcode\@tempcnta=15 \kcatcode\@tempcntb\bxjx@tmpb}
4931 \fi
```

H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

「特定 CJK 曖昧文字」について、和文・欧文扱いを制御できるようにする。ここで「特定 CJK 曖昧文字」とは以下に該当する文字の集合を指す:

- Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるギリシャ文字・キリル文字。
- Latin-1 の上位部分と JIS X 0208 に共通して含まれる文字 (LuaT_EX-ja の定める "範囲 8")。

\bxjx@grkcyr@list 「特定 CJK 曖昧文字」に関する情報をもつ \do-リスト。各項目の形式は以下の通り: \do{\Unicode 符号値\}{\対象 fontenc\}}{\(テキスト LICR\)}{\(数式 LICR\)} ※数式で使わない文字は \(数式 LICR\) を空にする。

```
4932 \@onlypreamble\bxjx@grkcyr@list
4933 \def\bxjx@grkcyr@list{%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. ALPHA
4934 \do{0391}{LGR}{\text{LGR}}{A}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. BETA
4935 \do{0392}{LGR}{\text{LGR}}{\text{B}}%
4936 \do{0393}{LGR}{\text{cmma}}{\text{cmma}}{
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. GAMMA
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. DELTA
4937 \do{0394}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Delta}}
4938 \do{0395}{LGR}{\textEpsilon}{E}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. EPSILON
4939 \do{0396}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Z}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. ZETA
4940 \do{0397}{LGR}{\text{textEta}{H}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. ETA
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. THETA
4941 \do{0398}{LGR}{\text{Theta}}
4942 \do{0399}{LGR}{\text{textIota}{I}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. IOTA
4943 \do{039A}{LGR}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. KAPPA
4944 \do{039B}{LGR}{\text{Lambda}}{\Lambda}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. LAMDA
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. MU
4945 \do{039C}\{LGR}{\text{LGR}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. NU
4946 \do{039D}{LGR}{\text{N}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. XI
4947 \do{039E}{LGR}{\text{xi}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. OMICRON
4948 \do{039F}{LGR}{\text{cmicron}}{0}%
4949 \do{03A0}{LGR}{\text{textPi}}{Pi}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. PI
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. RHO
4950 \do{03A1}{LGR}{\text{textRho}}{P}%
4951 \do{03A3}{LGR}{\text{xtSigma}}{\text{sigma}}
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. SIGMA
4952 \do{03A4}{LGR}{\text{T}}\%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. TAU
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. UPSILON
4953 \do{03A5}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Upsilon}}
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. PHI
4954 \do{03A6}{LGR}{\text{hi}}%
4955 \do{03A7}{LGR}{\text{LCR}}{X}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. CHI
4956 \do{03A8}{LGR}{\text{textPsi}}{\text{Psi}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. PSI
4957 \do{03A9}{LGR}{\text{cmega}}{\Omega}
                                                                                                                                                                                                           % GR. C. L. OMEGA
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. ALPHA
4958 \do{03B1}{LGR}{\text{\colored}} \do{03B1}{LGR}{\colored} \do{03B1}{\colored} \do{03
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. BETA
4959 \do{03B2}{LGR}{\text{textbeta}}{\text{beta}}
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. GAMMA
4960 \do{03B3}{LGR}{\text{xtgamma}}{\text{gamma}}
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. DELTA
4961 \do{03B4}{LGR}{\text{\colored}} \delta{\colored} \delt
4962 \do{03B5}{LGR}{\textepsilon}{\epsilon}%  % GR. S. L. EPSILON
4963 \do{03B6}{LGR}{\text{textzeta}}{\text{zeta}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. ZETA
4964 \do{03B7}{LGR}{\text{texteta}}{\text{ca}}
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. ETA
4965 \do{03B8}{LGR}{\text{texttheta}}{\text{theta}}
                                                                                                                                                                                                          % GR. S. L. THETA
4966 \do{03B9}{LGR}{\text{textiota}}{\iota}
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. IOTA
4967 \do{03BA}{LGR}{\text{xtkappa}}{\text{xappa}}
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. KAPPA
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. LAMDA
4968 \do{03BB}{LGR}{\text{lambda}}{\lambda}
4969 \do{03BC}{LGR}{\text{mu}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. MU
4970 \do{03BD}{LGR}{\text{nu}}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. NU
4971 \do{03BE}{LGR}{\text{textxi}}{xi}%
                                                                                                                                                                                                           % GR. S. L. XI
```

 $4972 \do{03BF}{LGR}{\text{textomicron}}{o}%$

% GR. S. L. OMICRON

```
4973 \do{03C0}{LGR}{\text{textpi}}{\pi}
                                                % GR. S. L. PI
4974 \do{03C1}{LGR}{\text{textrho}}{\n}
                                                % GR. S. L. RHO
4975 \do{03C2}{LGR}{\text{sigma}}% % GR. S. L. FINAL SIGMA  
4976 \do{03C3}{LGR}{\text{textsigma}}{\text{sigma}}%
                                                % GR. S. L. SIGMA
4977 \do{03C4}{LGR}{\texttau}{\tau}%
                                                % GR. S. L. TAU
4978 \do{03C5}{LGR}{\textupsilon}{\upsilon}%
                                              % GR. S. L. UPSILON
                                                % GR. S. L. PHI
4979 \do{03C6}{LGR}{\textphi}{\phi}%
4980 \do{03C7}{LGR}{\text{textchi}}{\chi}%
                                                % GR. S. L. CHI
                                                % GR. S. L. PSI
4981 \do{03C8}{LGR}{\text{textpsi}}{\psi}%
4982 \do{03C9}{LGR}{\text{cmega}}{\text{cmega}}%
                                                % GR. S. L. OMEGA
                                                % CY. C. L. IO
4983 \do{0401}{T2A}{\CYRYO}{}%
                                                % CY. C. L. A
4984 \do{0410}{T2A}{\CYRA}{}%
                                                % CY. C. L. BE
4985 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%
                                                % CY. C. L. VE
4986 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%
4987 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}%
                                                % CY. C. L. GHE
4988 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%
                                                % CY. C. L. DE
4989 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%
                                                % CY. C. L. IE
4990 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%
                                                % CY. C. L. ZHE
4991 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%
                                                % CY. C. L. ZE
4992 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%
                                                % CY. C. L. I
4993 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%
                                                % CY. C. L. SHORT I
                                                % CY. C. L. KA
4994 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%
4995 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%
                                                % CY. C. L. EL
                                                % CY. C. L. EM
4996 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%
                                                % CY. C. L. EN
4997 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%
4998 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%
                                                % CY. C. L. O
                                                % CY. C. L. PE
4999 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%
5000 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%
                                                % CY. C. L. ER
5001 \do{0421}{T2A}{CYRS}{}%
                                                % CY. C. L. ES
                                                % CY. C. L. TE
5002 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%
                                                % CY. C. L. U
5003 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%
5004 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%
                                                % CY. C. L. EF
5005 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%
                                                % CY. C. L. HA
5006 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%
                                                % CY. C. L. TSE
                                                % CY. C. L. CHE
5007 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%
5008 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%
                                                % CY. C. L. SHA
                                                % CY. C. L. SHCHA
5009 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%
                                                % CY. C. L. HARD SIGN
5010 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%
5011 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%
                                                % CY. C. L. YERU
5012 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}%
                                                % CY. C. L. SOFT SIGN
5013 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%
                                                % CY. C. L. E
5014 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}%
                                                % CY. C. L. YU
                                                % CY. C. L. YA
5015 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%
5016 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%
                                                % CY. S. L. A
5017 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%
                                                % CY. S. L. BE
                                                % CY. S. L. VE
5018 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}%
5019 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%
                                                % CY. S. L. GHE
                                                % CY. S. L. DE
5020 \do{0434}{T2A}{\cyrd}{}%
5021 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%
                                                % CY. S. L. IE
```

```
% CY. S. L. ZHE
               5022 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%
               5023 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%
                                                             % CY. S. L. ZE
               5024 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%
                                                             % CY. S. L. I
               5025 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%
                                                             % CY. S. L. SHORT I
                                                             % CY. S. L. KA
               5026 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%
                                                             % CY. S. L. EL
               5027 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%
               5028 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%
                                                             % CY. S. L. EM
               5029 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%
                                                             % CY. S. L. EN
                                                             % CY. S. L. O
               5030 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%
                                                             % CY. S. L. PE
               5031 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%
                                                             % CY. S. L. ER
               5032 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%
                                                             % CY. S. L. ES
               5033 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%
               5034 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%
                                                             % CY. S. L. TE
                                                             % CY. S. L. U
               5035 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%
               5036 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%
                                                             % CY. S. L. EF
               5037 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%
                                                             % CY. S. L. HA
               5038 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%
                                                             % CY. S. L. TSE
                                                             % CY. S. L. CHE
               5039 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%
               5040 \do{0448}{T2A}{\cyrsh}{}%
                                                             % CY. S. L. SHA
               5041 \do{0449}{T2A}{\cyrshch}{}%
                                                             % CY. S. L. SHCHA
               5042 \do{044A}{T2A}{\cyrhrdsn}{}%
                                                             % CY. S. L. HARD SIGN
                                                             % CY. S. L. YERU
               5043 \do{044B}{T2A}{\cyrery}{}%
                                                             % CY. S. L. SOFT SIGN
               5044 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}%
                                                             % CY. S. L. E
               5045 \do{044D}{T2A}{\cyrerev}{}%
                                                             % CY. S. L. YU
               5046 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%
               5047 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%
                                                             % CY. S. L. YA
                                                             % CY. S. L. IO
               5048 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%
               5049 \do{00A7}{TS1}{\textsection}{\mathsection}% SECTION SYMBOL
               5050 \do{00A8}{TS1}{\text{textasciidieresis}}{}\%
                                                              % DIAERESIS
               5051 \do{00B0}{TS1}{\textsc{SIGN}}
                                                             % PLUS-MINUS SIGN
               5052 \do{00B1}{TS1}{\text{textpm}}{\pm}%
               5053 \do{00B4}{TS1}{\text{textasciiacute}}
                                                             % ACUTE ACCENT
               5054 \do{00B6}{TS1}{\textsuperscript{\mathparagraph}% PILCROW SIGN}
               5055 \do{00D7}{TS1}{\text{texttimes}}{\text{times}}
                                                             % MULTIPLICATION SIGN
               5056 \do{00F7}{TS1}{\text{textdiv}}{\text{div}}%
                                                             % DIVISION SIGN
               5057 }
    \mathdegree 面倒なので補っておく。
               5058 \providecommand*{\mathdegree}{{}^{\circ}}
\ifbxjx@gcc@cjk 〔スイッチ〕「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにするか。
               5059 \newif\ifbxjx@gcc@cjk
    \greekasCJK 〔公開命令〕「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにする。
               5060 \newcommand*\greekasCJK{%
               5061 \bxjx@gcc@cjktrue}
```

\nogreekasCJK [公開命令]「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

5062 \newcommand*\nogreekasCJK{%

5063 \bxjx@gcc@cjkfalse}

\bxjx@fake@grk \bxjx@fake@grk{⟨出力文字⟩}{⟨基準文字⟩}: ラテン文字で代用される数式ギリシャ文字の出力を行う。⟨基準文字⟩(mathchardefの制御綴)の数式クラスと数式ファミリを引き継いで、⟨出力文字⟩(ASCII 文字トークン)の文字コードの数式文字を出力する。例えば、\Piの意味が \mathchar"7005 である場合、\bxjx@fake@grk{B}{\Pi} は \mathchar"7042を実行する。

※フォントパッケージ使用時の再定義を考慮して、〈基準文字〉が mathchardef であるかを 検査し、そうでない場合はフォールバックとして単に〈出力文字〉を実行する。

```
5064 \def\bxjx@tmpdo#1\relax{%
      \def\bxjx@fake@grk##1##2{%
        \expandafter\bxjx@fake@grk@a\meaning##2#1\@nil{##1}{##2}}%
5066
      \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@nil##3##4{%
5067
        \ifx\\##1\\%
5068
5069
          \bxjx@cnta##4\divide\bxjx@cnta\@cclvi
5070
          \multiply\bxjx@cnta\@cclvi \advance\bxjx@cnta`##3\relax
5071
          \mathchar\bxjx@cnta
        \else ##3\fi}
5073 }\expandafter\bxjx@tmpdo\string\mathchar\relax
```

■pdfTFX・upTFX の場合

 $5074 \in p\$ u\bxjx@engine1\fi\if u\bxjx@engine1\fi>0

• \[bxjx@KC/〈符号値〉]: その文字が「特定曖昧 CJK 文字」に該当する場合に定義済 になる。

まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。

※「既定 UTF-8 化」後の LATEX においても、必ず「inputenc が明示的に読み込まれた」 状態になる。

```
5075 \@ifpackageloaded{inputenc}{}{%else

5076 \RequirePackage[utf8]{inputenc}}

5077 \def\bxjx@tmpa{utf8}

5078 \ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname

5079 \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname

5080 {Input encoding changed to utf8}%

5081 \inputencoding{utf8}%
```

 $\operatorname{up}T_{\mathbf{E}}X$ の場合に、「特定曖昧 CJK 文字」を含むブロックの和文カテゴリコードを変更する。

```
5083 \if u\bxjx@engine
5084 \kcatcode"0370=15
5085 \kcatcode"0400=15
5086 \kcatcode"0500=15
5087 \fi
```

各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。

```
5088 \def\bxjx@tmpdo#1{%
5089
    \@tempcnta="#1\relax
    \expandafter\bxjx@tmpdo@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}
5091 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%
 引数 = \[ bx jx@KC/(符号値) \] \{(符号値) \} \{(fontenc)\} \{(LICR)\} \} \{(数式 LICR)\} \}
   "数式中の動作"を決定する。(数式 LICR) が空(数式非対応) なら警告を出す。
    \ifx\\#5\\%
5092
      \def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%
5093
 〈数式 LICR〉 が英字である場合は \bxjx@fake@grk で出力する。大文字なら \Pi、小文字
 なら \pi を基準文字にする。
    \else\ifcat A\noexpand#5%
      \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
5096
        {\ifnum\uccode`#5=`#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%
 それ以外は〈数式 LICR〉をそのまま実行する。
5097
    \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
    \fi\fi
5098
    \def\bxjx@tmpb{\bxjx@tmpdo@b{#1}{#2}{#3}{#4}}%
5099
    \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}
 以降はエンジン種別で分岐する。upTFX の場合。
5101 \if u\bxjx@engine
5102 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%
 引数 = \[ bxjx@KC/\langle 符号値 \rangle ] \{\langle 符号値 \rangle \} \{\langle fontenc \rangle \} \{\langle LICR \rangle \} \{\langle 数式中の動作 \rangle \}
   当該の Unicode 文字の動作は「テキストでは (LICR)、数式では (数式中の動作)」となる。
 LICR は現在エンコーディングで有効な定義がある場合はそれが実行されるはずである。(つ
 まり、現在が LGR である場合はギリシャ文字は常に欧文扱いになる。) それ以外の場合は
 LICR を \bxjx@ja@or@not に帰着させる。この際に、和文用の定義として当該の kchardef
 を使用し、その制御綴として \[bxjx@KC/...] を流用している。
    \kchardef#1=\@tempcnta
    5104
    \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
 pdfTFX の場合も処理はほとんど同じ。ただし、和文用の定義として \UTF{(符号値)}を使う
 (\UTF は bxcjkjatype の命令)。\[bxjx@KC/...] は使わないが定義済にする必要がある。
5106 \else\if p\bxjx@engine
5107 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%
    \mathchardef#1=\@tempcnta
    5109
    \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
5111 \fi\fi
 以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。
```

\bxjx@DeclareUnicodeCharacter \bxjx@DeclareUnicodeCharacter を改変して、「特定 CJK 曖昧文字」の場合に再定義を 抑止したもの。

5112 \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list

- 5113 \@onlypreamble\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter
- 5114 \let\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter\DeclareUnicodeCharacter
- 5115 \@onlypreamble\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
- 5116 \def\bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2{%
- 5117 \count@="#1\relax
- 5118 \expandafter\ifx\csname bxjx@KC/\the\count@\endcsname\relax
- 5119 \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
- 5120 \else
- 5121 \wlog{\space\space skipped defining Unicode char U+#1}%
- 5122 \fi}

\bxjx@ja@or@not \bxjx@ja@or@not{<和文用定義}}{<対象 fontenc}}{<LICR}: \[no]greekasCJK の状態に応じて和文または欧文で文字を出力する。

 $5123 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjx@ja@or@not#1#2#3{\%}}$

\greekasCJK の場合は、無条件に 〈和文用定義〉 を実行する。

5124 \ifbxjx@gcc@cjk #1%

\nogreekasCJK の場合は、対象のエンコーディングに変更して LICR を実行するが、その エンコーディングが未定義の場合は(フォールバックとして)和文用定義を使う。

- 5125 \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%
- 5126 \else \UseTextSymbol{#2}{#3}%
- 5127 \fi\fi}

\DeclareFontEncoding@ \DeclareFontEncoding@ にパッチを当てて、\DeclareFontEncoding の実行中だけ改変 後の \DeclareUnicodeCharacter が使われるようにする。

- 5128 \begingroup
- $5129 \verb|\toks@\expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}$
- 5130 \xdef\next{\def\noexpand\DeclareFontEncoding@##1##2##3{%
- 5131 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd
- 5132 \the\toks@
- 5134 \endgroup\next
- $5135 \ensuremath{\mbox{\sc bxjx@swap@DUC@cmd}}\xspace \xspace \xspac$
- 5136 \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter
- 5137 \let\DeclareUnicodeCharacter\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
- 5138 \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa
- 5139 \let\bxjx@tmpa\relax}

以上。

■X∃TEX・LuaTEX の場合

 $5140 \leq ifnum0 if x\bxjx@engine1\fi\if 1\bxjx@engine1\fi>0$

各文字について、数式中の動作を定義する。

- 5141 \def\bxjx@tmpdo#1{%
- 5142 \bxjx@cnta="#1\relax
- 5143 \begingroup
- 5144 \lccode`~=\bxjx@cnta

```
5145
     \lowercase{\endgroup
5146
       \bxjx@tmpdo@a{~}}{#1}}
5147 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%
 〈数式 LICR〉が空なら何もしない。空でない場合、upIATFX の場合と同じ方法で"数式中の
 動作"を決定し、当該の文字を math active にしてその動作を設定する。
     \ifx\\#5\\\let\bxjx@tmpa\relax
     \else\ifcat A\noexpand#5%
5149
5150
       \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
         {\ifnum\uccode`#5=`#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%
5151
5152
     \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
     \fi\fi
5154
     \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
       \mathcode\bxjx@cnta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
5155
5156
 「Unicode な数式」の設定が行われているかを(簡易的に)検査して、そうでない場合にの
 み、以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。
5157 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
5158 \verb|\ifx\bxjx@tmpa\pi \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list \fi
   次に、テキストにおいて「特定 CJK 曖昧文字」の扱いが \[no]greekasCJK で切り替わる
 ようにする。
   LuaT<sub>F</sub>X の場合は、LuaT<sub>F</sub>X-ja の jacharrange の設定を変更する。
 ※ "範囲 2" がギリシャ・キリル文字、"範囲 8" が Latin-1 の記号。
5159 \if l\bxjx@engine
    \protected\def\greekasCJK{%
5160
5161
       \bxjx@gcc@cjktrue
       \ltjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}}
5162
     \protected\def\nogreekasCJK{%
5163
5164
       \bxjx@gcc@cjkfalse
       \ltjsetparameter{jacharrange={-2, -8}}}
5165
5166 \fi
   X¬T¬X の場合、xeCJK は X¬T¬X の文字クラス定義を参照しているので、対象文字の文字
 クラスを変更する。
5167 \if x\bxjx@engine
     \let\bxjx@gcc@cjk@list\@empty
5168
     \def\do#1#2#3#4{%
5169
       \edef\bxjx@gcc@cjk@list{\bxjx@gcc@cjk@list
5170
5171
         \noexpand\XeTeXcharclass"#1\bxjx@cnta}}
     \bxjx@grkcyr@list
     \protected\def\greekasCJK{%
5173
5174
       \bxjx@gcc@cjktrue
5175
       \bxjx@cnta=\@ne \bxjx@gcc@cjk@list}
     \protected\def\nogreekasCJK{%
5176
       \bxjx@gcc@cjkfalse
       \bxjx@cnta=\z@ \bxjx@gcc@cjk@list}
5178
```

5179 \fi

以上。

5180 \fi\fi

H.4 初期設定

「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

5181 \nogreekasCJK

H.5 完了

おしまい。

5182 %</cjkcat>

付録 I 補助パッケージ: bxjspandoc 🕾

Pandoc の IATEX 用標準テンプレートをより幸せに使うための設定。BXJS クラスの pandoc ドライバのコードの中の、"汎用的"に使える部分を切り出したもの。つまり現在の pandoc ドライバはこのパッケージを読みこむ。

%テンプレートの T_{EX} コードより前に読み込む必要があるため、専ら文書クラス内での読込に限られる。

I.1 準備

5183 %<*ancpandoc>

5184 %% このファイルは日本語文字を含みます.

5185 \def\bxjsp@pkgname{bxjscjkcat}

\bxjsp@engine エンジンの種別。

5186 \let\bxjsp@engine=n

5187 \@onlypreamble\bxjsp@do

5188 \def\bxjsp@do#1#2{%

5189 \edef\bxjsp@tmpa{\string#1}%

 $5190 \qquad \texttt{\edef\bxjsp@tmpb{\meaning\#1}\%}$

5191 \ifx\bxjsp@tmpa\bxjsp@tmpb #2\fi}

 $5192 \verb|\bxjsp@do\kanjiskip{\let\bxjsp@engine=j}|$

5193 \bxjsp@do\XeTeXversion{\let\bxjsp@engine=x}

 $5194 \verb|\bxjsp@do\pdftexversion{\let\bxjsp@engine=p}|$

5195 \bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=l}

1.2 パッケージオプション

english オプションが指定されている場合、\ldots の調整を抑止する。

※つまり、「グローバルの english オプション」が指定されている場合も抑止の対象になる。BXJS クラスの英語モードを想定しているが、それ以外の場合でも、一般的な LATEX の

```
習慣として、グローバルの english は「その文書の基底言語が英語である」ことを示す。
```

5196 \newif\ifbxjsp@english

5197 \DeclareOption{english}{\bxjsp@englishtrue}

オプション定義はおしまい。

5198 \ProcessOptions*

I.3 パッケージ読込の阻止

\pandocSkipLoadFile \pandocSkipLoadFile{\(\nabla \) アイル名\\}: 特定のファイルを(\@filewithoptions の処理に関して)読込済であるとマークする。

 $5199 \verb|\conlypreamble\pandocSkipLoadFile|$

 $5200 \mbox{ } \mbox{newcommand*} \mbox{pandocSkipLoadFile[1]{} } \mbox{\footnote{Minimals}}$

5201 \expandafter\bxjsp@skip@load@file@a\csname ver@#1\endcsname{#1}}

5202 \def\bxjsp@skip@load@file@a#1#2{%

 $5203 \left| \frac{1}{x}\right|$

5204 \def#1{2001/01/01}%

5205 \PackageInfo\bxjsp@pkgname

5206 {File '#2' marked as loaded\@gobble}%

5207 \fi}

\pandocSkipLoadPackage \pandocSkipLoadPackage{⟨パッケージ名⟩}: \pandocSkipLoadFile の機能を用いて パッケージの読込を阻止する。

 $5208 \verb|\Qonlypreamble\pandocSkipLoadPackage|$

5209 \newcommand*\pandocSkipLoadPackage[1]{%

5210 \pandocSkipLoadFile{#1.sty}}

L4 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは fixltx2e パッケージを読み込むが、最近(2015 年版以降)の \LaTeX ではこれで警告が出る。これを抑止する。

IATeX カーネルが新しい場合は fixltx2e を読込済にする。

 $5211 \verb|\ifx\OIncludeInRelease\Oundefined\else|$

5212 \pandocSkipLoadPackage{fixltx2e}

5213 \fi

I.5 cmap パッケージ

エンジンが (u)pI $\!\!$ FT $\!\!$ EX のときに cmap パッケージが読み込まれるのを阻止する。(実際は警告が出るだけで無害であるが。)

5214 \if j\bxjsp@engine

5215 \pandocSkipLoadPackage{cmap}

5216 \fi

I.6 microtype パッケージ

警告が多すぎなので消す。

5217 \if j\bxjsp@engine \else

5218 \PassOptionsToPackage{verbose=silent}{microtype}

5219 \fi

エンジンが (u)pIATEX のときに microtype パッケージが読み込まれるのを阻止し、さら にテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は standard ドライバでこの処理を行っていたが、元来は Pandoc 用の処理なので、1.5 版で pandoc に移動。

5220 \if j\bxjsp@engine

5221 \pandocSkipLoadPackage{microtype}

5222 \newcommand*\UseMicrotypeSet[2][]{}

5223 \fi

I.7 Unicode 文字変換対策

Pandoc で LATEX 形式に書き出す場合は、元データ中の一部の Unicode 文字を「LATEX の表記」に置き換える。その中には日本語文書で問題になるものが含まれる。

$$\cdots \rightarrow \exists \{\}$$
 ' \rightarrow ' ' \rightarrow ' " \rightarrow ''

日本語 \LaTeX では「 \LaTeX の表記」は欧文扱い、Unicode 文字は和文扱いとして使い分ける 習慣があるので、このような置換が行われるのは好ましくない。

これらの置換のうち、後の 4 つは Pandoc の --no-tex-ligatures オプションを指定すれば抑止できるが、「…」の置換を抑止する機能はないようである。そこで、「\ldots を『…』に戻す」という処置を行う。

\pandocLdots Pandoc用の \ldots の実装。非数式である場合は代わりに … を実行する。

※以前は「Pandoc が必ず \ldots{} の形で書き出す」ことを利用して後続に {} があるかで「元が … であるか」を判断していた。ところが、Pandoc 2.7 版で {} を必ずしも付けなくなったため、1.9f 版で非数式の \ldots を全て … に戻す動作に変更した。

 $5224 \verb|\DeclareRobustCommand{\pandocLdots}{\cite{Main}}$

5225 \relax\ifmmode \expandafter\bxjsp@org@ldots

5226 \else \expandafter\bxjsp@ja@ellipsis

5227 \fi}

5228 \def\bxjsp@ja@ellipsis{\cdots}

5229 \let\bxjsp@org@ldots\ldots

\ldots の実装を置き換える。

※ Benglish オプション指定時は置き換えない。

 $5230 \ \texttt{AtBeginDocument} \{ \% \}$

5231 \let\bxjsp@org@ldots\ldots

5232 \ifbxjsp@english\else \let\ldots\pandocLdots \fi}

\ldots の直後の文字が非英字の場合、Pandoc は「\ldots。」のように空白を入れずに並べて出力する。「Pandoc は非英字と見なすが $X_{\overline{A}}$ Lua $T_{\overline{E}}$ は英字と見なす(または将来その可能性がある)」文字で、特に日本語文書に現れるものについて、非英字扱いにしておく。

```
※ Pandoc は「Unicode 7.0 で GC が Letter」な文字を英字と判定している。
```

```
5233 \chardef\bxjsp@cc@other=12
5234 \@onlypreamble\bxjsp@makeother@range
5235 \def\bxjsp@makeother@range#1#2{%
     \@tempcnta"#1\relax \@tempcntb"#2\relax
5237
     \loop\ifnum\@tempcnta<\@tempcntb</pre>
5238
       \catcode\@tempcnta\bxjsp@cc@other
       \advance\@tempcnta\@ne
5239
5240
    \repeat}
5241 \times 0^{1} x\
     \catcode"1F23B=\bxjsp@cc@other
5242
5243
     \bxjsp@makeother@range{9FCD}{A000}
5244
     \bxjsp@makeother@range{1B002}{1B170}
     \bxjsp@makeother@range{2B820}{2EBF0}
```

I.8 PandoLa モジュール

```
インストール済であれば読み込む。
```

```
5247 \IffileExists{bxpandola.sty}{%
5248 \RequirePackage{bxpandola}\relax
5249 \PackageInfo\bxjsp@pkgname
5250 {PandoLa module is loaded\@gobble}
5251 }{}
```

1.9 完了

5245 \fi

おしまい。

5252 %</ancpandoc>

補助パッケージ実装はここまで。

5253 %</anc>